913.58
M179s
H(4)
00285358

事故本
欠ページ：口絵
1993.9.7

ト27J-48

博文館編輯局校訂

校訂釋迦八相倭文庫 上

東京 博文館藏版

悉達太子
十九歳にして
懐妊の姫を
振捨車匿を
連て檀特山の
岩窟へ
面向ひ

913.58
M179s
H(4)

国立国会
28.1-6
図書館

285359

耶輸陀羅女
獄屋のうちにて
觀世音の利益
ふかくして悉達太
子檀特山にて
難行の霊夢
を見る

獅子ヶ嶽沙門と
ゑり実母舍利女の
名をとりて
舍利弗と
改名し
悉達太子の
出山を
待

初大臣

目蓮

舍利弗と
号き

悉達太子の雪山
闍梨雪山の法臺
ゆゑ摩迦薩如意
の奇特を顕し魔
族の障碍を拂退

四天王の内持國天

雪山闍梨

四天王の内多門天

解題

世に宗教を説くは多し、然れども是を通俗簡明にして、婦女童蒙を益するもの極めて罕なり、何ぞや他なし、言ふを俟ず其稗史野乗に比して、事理頗る解し難きにあり、否、解し難きにあらずして、説の深遠高大なる、能く淺薄なる理想の筆し難きにあり、尋常一様の小説に伍して、難易軽重遂に同日の論にあらざるにあり、嗚呼著述家たる亦難い哉

然り而して既に宗教といふ、其澁難なる、其拮屈なる、詮するに因果應報、勸善懲悪の意に過ぎずと雖も、而も見え安くして解き難く、説き易くして言ひ難き、到底一朝夕の、能すべきにあらずとは、獨り吾人のみにあらずして、斯道専門の士の、往々にして唱道する處なるは、今敢て

喋喃の辯を費すべきにあらず、況んや往昔戯作者一流の輩、巧みに佛典を敷衍して無量の妙を說き、三界の苦樂を明示して、幾多の世俗を悟道徹底せしめしもの、一二某々の作家を除き、夫果して幾人かある

此時に當り群書の作家をして後へに瞠若たらしめ、後年又賛賞措く能はざらしむる一部の宗教小說あり、問ふを休めよ、則ち本篇釋迦八相倭文庫是なり、首尾一卷全部を通じて五十七、年一年卷を追ひ月を閲する四十餘年、今尙ほ書林の珍藏として、時に演戯の檢舞臺に顯はれ、明窓淨几の下優に愛讀の偉書として、拍案曉を徹するの好著たり、宜なる哉釋迦八相とし云へば、識者も夙に是を首肯し、婦女童幼も歡迎止まず、殊に本書の主眼とする處、骨子を異域の君家に則り、事例を幕閣の因習に擬し、忠臣孝子、義姑節婦、奸賊佞人、賢者愚夫、艶麗の字句、幽婉の

言辭、磽确に失せず粗野に陷らず、愈よ出て愈よ快に、釋迦一代の眞傳、說去り說來りて理義明晰、蔽ふに經典の道理を以てし、示すに因緣の歷來を明かにし、如是して不知不識の間、無限の法味と無量の方便を會得せしむる等、凡そ當年流布幾種の者に比べ、眞に其上乘に位する、決して誣言にあらざるを信ず、今や刻成り上卷の發梓に際し、蕪辭を陳して聊か事由を附記すと爾云

明治卅五年春正月

校訂者識

校訂 釋迦八相倭文庫初編叙

大集經未來記に曰如く、白法隱沒と說れしこそ、今この時に合せ見るに、不思議なるかな其意不違、四民の心顚倒して、武家が番太に番太が二本、亭主を嫌ふ女房あり、予も十八歲にして戲作にこゝろざせど、元より師一匹を取事をせず、書は一點も讀とを得ず、ほんの猿智恵方便は、四十餘年の元祖もあれば、こゝに釋迦八相の物語りを、机に扣えて是を著す、

天保十六年乙巳孟陽

二十五歲の戲作
二十番の內

萬亭應賀述

釋迦八相倭文庫初編

校訂　江戸萬亭應賀

大乙五天竺の其一つ、

中天竺摩迦陀國の都、迦毘羅城の開闢、大賢王より三十六世の帝、師子頬と申し奉るに、王子四人あり、第一を淨飯太子、第二を甘露飯太子、第三を白飯太子、第四を斛飯太子と申しつゝ、何れも勝れし御子達なり、左れば治まれる當御世を、第一の王子、淨飯太子に讓らんと、頬王衣服を改めて、大極殿に出御あり、月卿雲客四人の王子、並居る中に飾りつけし、七流の御寶と申すは、第一に月氏國の御ン系圖、第二に四神龍道の御多羅枝、神力のおじやうづゝ、鬼神の恐れし弓矢、第三に白蓮劒、第四に闇冥如意の玉、第五蓬來宮より供へたる玉の冠、第六に不淨を攘ふ玉の旗、第七に五天竺の內、山道海道陸野道、三十餘州の國の繪圖、右の七寶は、代々傳はる重寶なれば、淨飯太子に改め相傳するなりと、玉座に直して、即ち位ゐを讓り給ひ、三人の王子には、東西南北の、國を分けて賜はり、百官の者へも夫々に、官を增し祿を付け、尙も國民の政道、末世までも怠らず、豐かに此の國を守るべしと、御言葉正しく宣ひて、軈て奧へぞ入らせ給ふ、月卿雲客口を揃へ、皆な萬歲と唱へつゝ、實に難有さ

綸言かなと、欣びの袖を連ねて、打揃ふてぞ退きける、去程に淨飯大王は、萬乘の位ゐに上り、政正しく仁心厚かりければ、世に難有き帝なりと、仰ぎ尊み奉りける、斯くて大王、或る時一と間に籠り、政道の文書を復し居給ふ處ろへ、重役高明大臣進み出で、「只今御前へ罷り出で、申上げるは餘の義に非ず、君政治を知らしめすに、故きを捨て新らしきを磨くを、一つの孝と仰せわりし如く、芳苑十里に路造りし、新内裏を造り調へ奉つれば、則ち吉辰を撰み、御移轉あれかし、又た一つの願ひには男子の侍きは、今宮中に滿つれども、官女后の冊きは、只の一個さへ是なく、夜のお寢間の寂しきは扨置き、御代を嗣せ給ふ、王子を設けん、便りさへ無き儘、何卒隨身の輩の内にて、容貌優しき娘を、官女后に備へ奉りて、政道正しき君の御胤を、千代萬代までも、殘し參らせたく存じ上ると、謹んで申ければ、帝御機嫌麗はしく、「實に尤もの事かな、兎も斯うも宜きに計らへかしと、仰せを蒙むり、高明大臣尙ほ平伏して、「然らば先づ奥殿をも造營して、御移轉を急ぎ、叡慮を休め奉らんと、欣び退きて夫々の役人へ、綸言の趣きを傳へ、奥殿の御普請も成就しければ、程なく吉辰の日を選み、既に其ことなりければ、百官の輩に、廿歳を越さぬ娘あらば、帝へ奉るべき由、兼ての綸言に任せ、今日行幸の巷に出で、今を盛りの多くの娘、今日を曠と姿を飾り、互ひに花の色香を爭ひ、帝の御通りを待ちかけて、今を遲しと並居たる、折から淨飯大王華やかに、連錢葦毛の駒に跨がり、手綱凜々

しくりん〳〵と搔繰り、供奉の面々も勇ましく、御馬の左右に從ひ、間もなく此方へ來り給へば、高明大臣地上に跪き、「是に並居まするは、我君へ隨身の、面々が娘なり、叡慮に適ひたるを、奥殿へ召入れ給へと申上ぐれば、帝則ち御言葉優しく、彼等にも會釋したまひ、三百人官女に召抱へられ、直ぐ樣迦毘羅城へと、駒の足を運ばせ給ふ、此時高明大臣、巷に並居たる、數多の婦人を見渡せし中に、世に類ひなき美人、善覺大臣の娘兩人見えず、如何の事と不審しながら、帝に供奉し彼等が穿義に、夫々の者を招きて、樣子を糺させける、此に又善乘國の將軍、善覺大臣に、三五廿の娘二人あり、姉を轎曇彌、妹を摩耶と云ひて、何れも劣らぬ器量にて、此二人の者に勝りし美人は、世に少なしとぞ聞へける、左れば此二人の娘互ひに淨飯王の志優しき噂に、何卒一と度なりと、お姿を拜せんと思ふ折柄、官女后を、數多召抱へらるゝと云ふ、其沙汰を聞くよりも、何卒お目通りせんと、樂しみしに、親善覺は、假令へ帝の仰せなりとも、斯く淺ましき育ち柄にて、君の冊きは思ひも寄らぬ事、只二人とも我々づれに、善き緣あらば冊けんと、君の御移轉の巷へも出さねば、二人とも懊惱と、心に物想ひ重る處ろへ、博齋道二ヶ國を領する、淨飯大王の四番目の弟、斛飯太子は、甚く婦人を好み、善覺の娘、殊に麗はしと傳へ聞き、何卒手に入れんと、仲立を以て云ひ渡れど、二人の者の心に嫌はれ、自から只一個、忍びて善乘國へ來り、善覺に面談し、種々割り口說望めども、善覺不平の顏色に

て申すやう、「假令へ我子なりとも妹脊の緣は、一と筋に親の意にも任せ難し、是を無理に云ひ聞かせなば、是非なく親の心に從ひ、否々ながら、妹脊の緣は結ぶとも、元より心に染まぬ時は、女の身の果敢なきを悔み、遂に縊れて身を果すか、水に沈むか二つに一つ、無分別起せるは、世間に間々ある習ひ、何卒此譯柄を汲分けて、必らず機嫌を損ねぬ樣に、思ひ切つて給はれと、物しとやかに答ふれば、斛飯は色を變へ、「愈々以て身が望みの、叶はぬ上は口數きかず、ヲ、それよと股立引上げ、奥の間指して走り入り、何心なく居たる二人の娘を、捉へんとするに愕き、「コワ何事と慌てゝ逃ぐる、妹の摩耶が襟髮つかみ、引寄せんとするを見るよりも、姉の轎曇彌突ッ立上り、手早く要意の懷劍を、拔きそばめつゝ立蒐り、「無禮をしやると許さぬと、競含ふ表へ迦毘羅城の、淨飯大王の勅使なりと、呼ぶ聲斛飯の耳に入り、「ヤレ仕損じたり殘念やと、娘を放ち、慌てゝ背戸口より逃出でたり、後には樣子白髮の善覺、勅使の出迎い叮嚀に、一と間へ招じ敬へば、のさ〳〵通る初大臣、四下邊りを睨め廻し、「勅諚の趣き餘の義でなし、此の度淨飯大王へ、百官の輩、官女后を奉るによつて、御移轉の節都の巷へ、姉妹の娘を差出せと仰せありしに、何を以て帝の仰せを背き、不參ありしぞと目に角立てゝ、權柄に云ひ聞かすれば、善覺は平伏の頭を少し上げ、「中々君の仰せを背く、心ならねど御存じの如く、小國の某が娘ども、如何にも賤しき育ちにて、帝の御册には恐れありと、存じてお召に從はず、

是非にとあらば夫こそは、冥加に適ひし身の面目、如何とも御計らひ、下さるべしと相述れば、初大臣打首肯き、「如何にも心優しき大臣かな、斯樣に美しき姫を持ちながら、誇らぬ心底感じ入りたり、則ち是れは諚札なりと、渡せば善覺二人の娘に、是を戴かせ讀ませけるに、兩人の內、叡慮に適ひし方を止め、一人は何れとも、御返しあるとの仰せ、然らば我卑下の心に任せずとて、善覺則ち人を選み、姉の轎曇彌へは、馬將軍をつけ、妹摩耶へは優將軍を、付けて參內させんと、兩人の將軍を呼出し、心をつけて守護すべしと、夫々の手當をなさしめ、參內の用意をぞ急がしける、姉妹は日頃の願ひ屆きてや、お后に召さるゝと云へば、何れが叡慮に適ふやらと、心の內の物案じ、紅粉化粧に氣を付けつ、互ひに髮を結び合ひ、夫々の腰元を從へ、華やかなる衣服を着飾り、親子の暇乞ひに、涙限りなく見へければ、同じ心の善覺大臣、氣を取直し、願ふても爲らぬ身の出世、親も大慶に存ずる、早や〳〵參內致すべしと、涙隱して勸めける、去程に初大臣は、彼の兩人の姫を召具し、迦毘羅城へ歸り登り、先づ善覺大臣の、志斯樣々々と奏聞せしに、帝由々しく思召され、極めて政道も正しかるべき間、則ち小國の王に附せしめんと、聽て善覺王に綸旨を賜はり、四節の禮義參內を許されける、是れと申すも善覺が、斯く美くしき娘を持ちながら、些つとも己れを驕らず、志し厚き故なりと、皆々等しく感じける、扨て姉の轎曇彌は、月の方と名づけて、月景殿に移し、妹摩耶をば、花の方と名づけ

て、青龍城に据へ、互いに劣らぬ月花の、裝ひを爭ひつゝ、君に冊き奉りぬ、然るに貴き上つ方も、卑しき賤の女に、至りても、嫉妬の心は謹み難く、世に恐るべき者にぞありける、左れば淨飯大王は、彼の兩人の女を止めて、后には備へたれども、分けて妹の、花の方摩耶夫人、御心に適ひけるにや、此方へのみ近つき臥し給ふを、姉なる轎曇彌月の方、獨寢の閨寂しき儘、嫉み心の一圖に起り、アラ恨めしや一人の君へ、姉妹にて見ゆるとは、例少なき事なるに、開もや初めの仰せには、叡慮に適ひし方を止め、一人は御返しあるとの事、夫に違ひて二人とも、止めて妾は此の樣に、一人寢さすとは聞えませぬ、情けなの御計らひ、最早や摩耶とは緣を切り、他人となりて言葉も交さじと、恨み喞つ其一念、假寢の夢にも青き蛇となり、鱗を逆立て青龍城の、夜の床へと飛びゆく有樣、附隨の女中ども、稀には是を見たるもありて、只不思議なる擧動やと、殊に怪しみ恐れたる、扨又摩耶夫人花の方は、君の心に能く適ひて、夜毎々々の御通ひ繁く、姉の方へは一と夜さも、音信れなきを姉上は、定めて恨み嘆ちてお在さんと心には察すれども、我想ひも又止み難く、信實深く見えければ、君も一と方ならず思召て、此の方へのみ通はせ給ふ、然るに春も半旬の頃、或る夜青龍城の玉の床に、美を盡くせし夜のものを敷妙の、枕に熟睡む摩耶の夢に、虛空に妙なる音樂聞え、紫の雲靉靆き、十六丈の寶塔聳へ、金色の旗八流れ、七寶の寶樹八本、花房の香の妙なる上に、諸々の佛合掌して、經文を唱

へければ、寶塔の扉さつと開け、大日輪の内にありて、光明赫々と輝き、「我れ成道を得て現在到來し、諸佛智に緣を結ぶと、文を唱へ給へば、白象青蓮花を抱きて來る、其上へ戴き、佛御聲あらたかに、「如何に婦人、御身に結緣深ければ、今淨飯大王を父と賴み、夫人を我母と賴みて、衆生濟度の爲め變生するゆへ、暫らく胎内を貸し給へと、朗に仰せあり、摩耶は思はず起返り、「アラ勿体なやおほけなや、五障三從の汚れある、此身の胎内へ御佛を、宿さん事は思いも寄らず、許し給へと身を脊向くれば、佛重ねて宣はく、「さは宣ひぞ、既に摩耶の前生は、東上國の南に當つて、緊那羅城と云へるあり、此都の主個、法裟王の最愛の姫に、瑠理女と云へるは、幼けなき時母に遲れ、イクダ夫人と云ふ、繼母に育てられしが、此繼母にコウヤ女と云ふ姫一人あり、容貌美しゝと雖も、瑠理女には及び難く、されば瑠理女、東陽國の帝に冊を繼母の嫉みにて、樣々に讒言し、僞り奏聞すれば、法裟王は誠と思ひ、都の北に切陀羅山と云ふ、嶮岨の山へ室を造り、罪なき瑠理女を只一個捨てさせ、イクダ夫人の娘、コウヤ女を其代りとして、東陽國の帝へ冊かせたる、左れば瑠理女は、實母の遺品とて、淨光菩薩の說かれたる、解脫結品經を信じ、千部寫して一萬部讀誦し、七種の木の實を取りて、三燈を揭げ、日月燈明佛を供養せし、其因みによつて、今既に摩耶夫人と生れ、淨飯大王と枕をかはし給ふなり、以前の燈明佛は即ち某なり、是非に胎内を貸し給へとあるを、摩耶は只管詫びて、合はず

る手より、忽然と蓮華開けば、佛是に移り、經文を唱へながら、三五の乳房を搔分けて、幻の如く摩耶夫人の、胎内へぞ入り給ふと、見しより愕き夢覺めて、見れば不思議や我ながら、五体六根清らかに、玉を抱きし心地して、自から其身より、金色の光明輝き、忽ち六通を現じ虛空にて、「諸佛淸淨」して守護すと聞へ、春風も身に吹き過ぐるか、花の御粧ひ次第に衰へ、朝夕の供御も進まず、病ひの床を、暫しも離れ給はねば、帝附々の女蔕に樣子を聞き、是より寢屋へも通ひ給はず、密に優陀夷夫婦を召し、「此程夫人は風の心地なるや、只打臥して惱み給へ、花の宴にも怠りて出でず、夜の通ひも絶へたるが、幷も那の夫人は、世に勝れて情け深く、殊に内氣の心遣ひより、氣病みならんも知れ難し、萬事望みの儘に勤はり、少しも早く平癒させ、身が心をも安からしめよと、仰せ蒙むり優陀夷夫婦、其次第を遂一に、摩耶夫人に告げ申せば、「身に受けて難有き思召し、飽まで厚き御情けの程、生々世々忘れ難く、少しも早く全快して、戀しき君に見えんと、一圖に思ひ奉る甲斐もなう、只捗どらぬ身の煩ひ、今の仰せを聞きしより、最と心が急かるゝと、涙含つゝ物語れば、優陀夷の女房謹んで申すやう、「兼て醫師の申すにも、兎角病ひは各自の、氣より起る者と承はる、されど貴女樣も恐れながら、只お氣晴らしが肝要かと、及ばずながら存じます、幸ひ今宵は春雨の、鬱氣を拂ふ其爲めに、酒の用意を調はせ、お坐敷をかへて皆々を召寄せ、お賑かに致したら、些つとはお慰みにもなり、

此程の御鬱氣も晴れませうと、勸め申せば摩耶夫人、「夫は能くこそ心づきたれ、今宵は何やらいつもより、一入氣も鬱々しき儘、早う宜しなに計らやと、仰せに從ひ優陀夷の女房、お局お側お次を初め、お茶の間お仲居お仂まで、お許しあつて召出され、用意の九献器の物、處ろ狹きまで置き並べ、軈て夫人のお坐をも移し、琴や三味線笛太鼓の、調子を揃へ打囃して、夫人の心を諫め、皆諸ろ共にぞ興じける、扨て多き女中の其中に、供御の役を勤むる女は、元はやんごとなき大臣の娘なるが、親の許さぬ忍び男をもち、遂に親の勘氣を受け、果敢なき身の暮しも、致せし身なれば、下つ方の世帶の事は勿論、女一と通りの病ひ、月のめぐり滯りの事まで、能く心得し者なれば、數多の女中に厚遇され、女の役にありたるが、此夜初めて摩耶夫人の、御前に召出され、酒なぞ給はり夫是爲す内、夫人の御顏容を、遠目ながらに拜して云ふ樣、「恐れながら御夫人樣の御惱みは、如何にも目出たき王子の胤を、宿し給ひし御氣色なりと、恐る〳〵申しければ、皆々大きに打愕き、「扨は誠か目出たやと、欣ぶ中にも摩耶夫人、思い合する此程の、靈夢に違はぬ言葉の端、「アラ難有やと思はずも、仰する御言葉聞くよりも、多くの女中そやし立て、「扨は相違もあらじとて、取々欣び帝へも、優陀夷を以て奏聞すれば、帝の御喜び限りなく、月卿雲客下々まで、是ぞ御子孫長久の基ひと、擧つて皆々祝しける、去れば此噂、月景殿の轎曇彌へ聞へ、親善覺王より附人、馬將軍を召し、「如何に將軍聞きつるか、妹

摩耶は逸早く、王子を懐胎せしとの事、只でさへ我方へは、君の御通ひも無き處ろへ、早くも左樣になる時は、尚以て摩耶のみへ、君は情けを掛け給ひ、人も彼のみ敬ひて、中宮女御と崇めつゝ、威勢は日々に増すべきに、夫に引替へ情けなきは、有るに甲斐なき此身の上、果敢ない命存らへて、數多の者に指さゝれ、顔見らるゝも恥かしき儘、今宵の内に仇し世を、放れる覺悟極めし故、和郎密かに心得て、頓死せしと世間に披露し、妾が死骸隠してたもと、搔き口説つゝ伏沈む、遣瀬涙も女氣の、果敢なき思案ぞ道理なる、馬將軍は打愕き、「汗は餘りに短慮なり、果敢なくお成りなされずとも、御無念晴らす仕方もあり、先々心を靜め給ひ、暫らくお待ち成されませと、宥められて力を得、「左らば和郎に任する間、兎も角もして遣る瀬なう、口惜しき一念を晴らしてたべと、割なき言葉に馬將軍、聲を密めて云ひける樣、「夫にてぞ宜き事あれ、此の都より丑寅に當つて、宿陀山と云ふ高嶺あり、此に阿宿山人の跡を次ぎ、術を行ふ儀伯仙無間仙といふあり、此二人の行者の法には、飛ぶ鳥も落つる奇特あり、これ賴みて妙術を行はしめば、貴女さまのお夐の、晴れる仕方もあらん、此義如何にと勸むれば、轎曇彌大きに欣び、「少しも早く計らへかしと、云ふに將軍心得て、軈て一人の、官人を、使ひに立てゝ招ぎたれば、程なく行者兩人來りて、馬將軍に面談し、委細の譯を密かに聞きて、事も無げに答ふる樣、「仰せの趣き何より安し、併しながら調伏の法には、七段の次第あり、先づ懐胎の調伏

には、其當人の姿形ちを、能く見定めねば、行ふ事能はずと、述ぶる彼方に轎曇彌、忍びて窺ひ立聞きせしが、御簾を搔き上げ立出でゝ、「夫れは何より安き事なり、自らが文認め、呼ばゞ摩耶は必らず來らん、其時襖の影よりして、兩人とも其姿を、能く見られよと云含め、此方の一と間に忍ばせ置き、直らに硯引寄せて、鈍くもやをら摺る墨の、黑き心の怖ろしや、嫉みの一念消る瀨なく、心の内を卷紙に、情け夏毛の筆染めて、書くとも讀むとも戀しさは、盡きぬ想ひと細々に、存じ守らせ候〳〵と、書き認めて文函の、紐の結びと唐花の、實の無き節を引縮めて、上包みして物馴れたる、側女中に呟咐けて、青龍殿へぞ遣はしける、去る程に摩耶夫人は、思ひ懸けなく姉君より、玉章を受け押披き、見れば一筆しめし〳〵候、此程は絶へて音信無き儘、如何と姉も心配せしに、承はればそもじには、帝の御胤を宿せしとや、偏に國の爲め代の聞へ、姉の身に取りても如何ばかりか、欣ばしく存じ〳〵候、左りながら女の身の、一大事は難產なれば、是を案じて夜の目も寢られず、戀しく床しく思ひ暮らせば、常の儘にて苦しからず、今日は此方へ渡り給へ、倶に睦まじく故郷の、越方など語らひ參らせん、先づは其節と、早々筆を止め候〳〵と讀終りて、軈て優陀夷夫婦を召して、「是れ見給へや、他人にわらぬ姉妹の親切、片時も早く赴きたし、此由我君へ申してたべと、仰せに任せて優陀夷は心得、速かに御前に出で、右の事ども奏聞すれば、帝は快よげに仰するやう、「女子の親身左

もありなん、摩耶が心任せにせよとあるにより、俄に御支度を調へ參らせ、局腰元多く從へ、いそ〳〵と使ひと共に摩耶夫人、月景殿へ渡らせ給ふ、身は薄き氷か刃の上を、渡るより尙ほ危しと、知らぬが佛と云ふ事は、此時よりや云ひ初めけん、月景殿には轎曇彌、今や遲しと待詫び給ふ處へ、姉君は云ふに及ばず、女中將軍等へも、下さる土產を持たせつゝ、摩耶夫人來り給ひ、玉章の厚き情けを、繰り返し〳〵、欣び告げて敬へば、姉は又た內の想ひを、表の色には顯はさず、「ヤレ懷かしや、能くこそ來り給ひつれ、イザ先づ酒を參らせんと、老實々々しげに持囃し、「如何にも芽出たき御身の程ぞ、第一には帝の御欣び、親御の名聞、此の姉までが何の樣にか、嬉しさ餘りて涙がと、目顏に蔽ふ袂の內は、人知らず齒を嚙ひしばる、彼方の襖の影よりは、儀伯仙無間仙、共に麻耶の髮形さへ、目を配りつゝ容体を、窺ひ居るこそ恐ろしけれ、既に廻れる盃も、數積もれば轎曇彌、摩耶に向ひて老實やかに、「語りて盡きぬ二人が將來、今暫しと云ひたけれど、春の夜の短き儘、君のお伽も如何かと、案じるも和女の爲め、又も迎へん今宵は先づと、早や追ひ立つるを心に呆れ、アラ情けなや久々の、積もる語らひも霎時の間、最うお暇申す事かと、姉とは替りし摩耶夫人、涙含みし御粧ひ、名殘惜げに悄々と、青龍城へぞ歸り給ふ、

校訂　釋迦八相倭文庫初編　終

釋迦八相倭文庫第貳編序

抑中天竺迦毘羅城、三十七代淨飯、大王の后摩耶夫人、王子懷胎ありしより、姉の轎曇彌嫉妬深く、一念十六丈の蛇形となり、あなたを怨身を悲みて、內縛外縛業縛の、無明の法の調伏に、三百六十餘流の血筋を搦め、たとへ衝突鎗梅ありとも、倒〳〵に花は散ず、胎は鶯合法華經の、玉をのべたる佛童子が、神力自在の奇特ある、一代修行に基づけど、戲作の筆のあやしきまゝ、直に倭文庫と題ること爾り、

弘化三年丙午春

萬亭應賀識

釋迦八相倭文庫第貳編

江戸　萬亭應賀　校訂

左れば悼はしや摩耶夫人は、何心なく青龍城へ歸らせ給へば、二人の行者は一と間を立出で、今見屆けたる姿の如くに、摩耶の形ちを造らんと、未の米を取寄せつゝ、月の水を迎へ取りて、七度洗ひて粉に碎き、是にて夫人の顔を造り、未の藁を以て体を拵へ、五形のくしにて、此處彼處を繼ぎ合せ、五色の衣を纏はせて、腰には花の帶をしめ、三つ羽の征矢を差させて、丈の髦をかけ、頭にしでを切付けて、地の下七尺の底に埋めつゝ、上には調伏の檀を飾りて、四方には七五三繩を張り、供物には未のいゝを黑く染め、百八十本の釘をさし、四隅に幣帛を立て、華蔓に木瓜の花、射水に白蛇の水をたれ、守宮の脂を以て燈明を照し、虎狼の骨を以て燒香に燒き、檠木に片刄の劒を立て、朴木にしたら修丹の備へ、着衣の袖を逆さまに縫ひつけ、麻を取寄せ裏搔かぬ草履を並べ、行者は左り繩にて華蔓を結び、襷にかけて調伏の壇に、立向ひたる有樣は、身の毛も彌立つ計りなり、去る程に儀伯仙人、用意の幣帛押つ取りて、天神地神あらゆる惡鬼神を、二人の念力に任せて、祈り立て責めかくれば、殿中俄に震動し、不思議

や百八十本の、幣帛一つに亂れ蒐れば、無間仙人大音あげ、「如何にや如何に摩耶夫人、無明長夜の狹ばからん、出よ〳〵と呼はれば、又も鳴動盛んにして、地の下へ埋けし、摩耶の形代現はれ出で、供へたる衣を打かけて、裏搔かぬ草履を踏み、壇の上へあがりつゝ、傍の御簾の内へ向ひて、「アラ情けなや姉上、自らが王子を懷胎せしも、不義密通の心から、貴女を辱かしむる邪曲ならねば、偏へに許して給はれ、のふ恐ろしや、アラ苦しや、何卒許して〳〵と、熱鐵地獄の苦しみを、受くるも孱弱き姫御前の、身を打臥して、涙限りに泣き結び給ふ、其傍らには二人の行者、尙も責めかけ〳〵祈り立つれば、摩耶の形代愈々悶へ、右に倒れ左りに逡ぼひ、七顚八倒の苦しみ、目も當られぬ折こそあれ、最前より一ト間の内に、始終を窺ふ姉の轎曇彌、花の姿も山風に、亂れし如く顔容嗔らし、懷劒携へ御簾搔き上げて、靜々と出で立向ひ、言葉を荒らげ、「アラ心地よや摩耶夫人、能くも淨飯王の御心に謾らひ、自らを有る甲斐なしに、和女一人を手活の花と、夜のお伽の樂みに、自らは只獨り寢の、寂しき寢屋に物思はする、報ひは靦面夫れ苦しくば、父善覺王を恨むべし、今は親を親とも思はぬ妾、況して其方を妹なぞゝは、思ひも寄らず緣は切りたり、觀念せよと裳を蹴立て、罵りながら行者に向ひ、「ソレ此形代を、宜きに計らひ呉れよかしと、仰せの下に彼の二人は、摩耶の形代を引下ろし、幣帛を差し蓆に押包みて、取捨てんと殿中を退きゆく、扨て轎曇彌は調伏の法、成就せしと欣ぶ處へ、馬將軍

密やかに進み出で、「如何に姫君、斯くの如く調伏も調へば、摩耶も是れから亡き身となれば、今までの御無念も晴れ、是非とも帝のお伽は、貴女お一人、嘸ぞお欣びと、云はれて流石轎曇彌、嬉しき素振も顯はし兼ぬ、「此上王子を懷姙致さば、和郎も格別取立てん、太儀々々、只何事も密やかに、包む樣に付々の、女へも云ひ含めよと有りければ、馬將軍拔からぬ顏にて、「夫は少しもお氣遣ひ遊ばすな、某宜しく計らふべし、扨て二人の行者へは、當座の褒美樣々々と、述べて手づから寶藏より、沙金千兩取出し、蝶花形に押包み、是を白木の臺へ載せ、外に又綾錦千疋づゝ、腰元女中が荷ひ出で、廣間の內へ飾り置き、待つ間程なく二人の行者、形代を遙か隔ちし山へ打捨て、勇み立つて歸りければ、馬將軍厚く待遇し、「當座の布施として、則ち是なる品々を下さる、重ねて又も沙汰せんと、差出されて行者ども、「思ひ寄らざる結搆の品々、難有く頂戴仕ると、頭を下げて一禮のべ、品々携へ立たんとすれども、餘り重くて腰立たず、漸やくに二人して、欄干の下へ運び降りたり、左れば又轎曇彌は、何となく心嬉しく、數多の女中へも、常に變りて物柔らかに言葉をかけ、手道具の類ひ夫々へ遣はし、惡事を深く包ませければ、皆々も此方の姫君を、帝の御意に適はせんと、日頃の願ひも屆きて嬉しさ、此上は少しも早く、王子の御胤を宿し給へと、取囃すさへ物密やかに、さゞめく所へ一人の腰元、慌て走り來り、「喃恐ろしや、只今の行者二人とも、欄干の下にて五体が屈み、少しも歩む事叶

はず、手足を悶き、左も苦るしげに見えまするとて、申上ぐれば轎曇彌、开は何故と立出で給へば、皆々も從ひゆき、此体を見て愕く中に轎曇彌、「アレ〳〵將軍兩人とも、祈りに精盡き草臥れけん、手を取つて介抱せよと、仰せを蒙むり馬將軍、取敢へず下へ降り立ち、二人の手を取り助けんとする折柄、俄に惡風、颶風の如くに吹起り、鳴動すればコワ如何に大地めり〳〵と電光の如く、四方へ裂けて行者二人は、眞逆樣に金輪際へぞ陷入りける、此の有樣を姫君初め、附々の女中見るよりも、皆な身を顫はせ、扨こそは摩耶を祈りし報ひかと、恐れ戰き一同に、奥の方へぞ逃入りける、左れば神ならぬ身とて、佛をも生み給ふ、殊に尊とき摩耶夫人、されども知れぬは御身の程にて、悼はしくも青龍城へ、歸らせ給ひし其日より、祈らるゝとは露知らず、姉君の心ばせを、最と頼もしく思召し、又一つには懷胎の、王子を安々產み落し、何うして斯しての嬉しさも、指折り數へ何時か早や、紅葉色めく菊月の、初旬となりければ、帝を初め下々まで、御安產あるべしと、皆々欣び待ちけるに、或る時夫人轉寢の、夢見よりして病着の起り、俄に差込み强くして御苦しみと成りければ、優陀夷夫婦附々の者も、コワ何故と氣を痛め、ソレ醫師よお藥よと、噪ぎ取々なりければ、末々までも夫人の病ひ、平癒を祈り、介抱愚かなかりしかば、漸やく差込みも治まりて、小しは落付き給ひしゆへ、附々も氣を休めける、其時摩耶夫人は、優陀夷夫婦を御膝近く召寄せられ、最と苦るしげなる御聲にて、「のう優

陀夷、自らが差込みは治まれども、骨の節々痛み強く、身内が屈む樣に覺え、動く事も叶はねば、起上るべき樣もなく、夫に又た胎内の王子も、早や七月とも成りたれば、最と仂なく働く事の、折々此身に覺ゆれば、心嬉しく思ひしに、今になりては拔け殼の、樣に覺えて胎内に王子ありとも思はれず、心ならねば此由を、詳しく醫師に尋ねてたもと、仰せに優陀夷は取敢へず、巧者の御醫師を招ぎ寄せ、御容体を伺はするに、篤と拜脉して申すやう、「一体懷姙の御身には、物のあやかり氣の噪ぎと、申す事は間々ある習ひ、此度姫君の御煩ひも、夫に異なる事無ければ、少しもお氣遣ひあるに及ばず、御安産も程あるまじ、只御保養が肝心と、詳ちかに述べければ實に左もあらんと附々も、種々の御慰みを勸め、病ひも薄らぎ給ひしが、早や十月とも成りけるに、未だお產の氣も無ければ、附々よりも摩耶夫人の、心の内の物案じ、過ぎし頃お目見えせし、供御の女を側近く、呼べとの仰せありけるゆへ、其旨を係りへ通じ、御前へ召連れ出でければ。摩耶は膝下近く召寄せ、御身の樣子何呉と、包まず隱さず語り給ふも、女同志の心安く、供御の女中も御身勤り、撫でさすりながらの物語り、「イヱ最う姫君樣のお案じも、御尤もではムりますれど、決して惱々思召すな、月越しに胤の籠りましたを、則ち重ね月と申して、下々にも夫は〳〵、多い事ムりますゆへ、お氣遣いなくお心を、浮々と遊ばせと諫め申せば何時になく、御機嫌も麗はしく、浮世の噂も折柄の、暫しお心慰めと、附々諸共打

囃しける、扨て百官百司の輩よりも、摩耶の心を慰めんと、皆な夫々に思ひ附ある、品々を献上しける、斯くて十三月に至れども、王子御誕生の樣子も無ければ、摩耶は頼みの綱も切れ果て、がつくりと氣を落し、再び床に就き給ひ、夜晝の分ちも無く、只泣き悲しむ計りにて、假令へ病ひ癒るとも、身の懷胎は思いも寄らず、重き病いを種々に、持て囃されし口惜しさ、君への手前姉君への聞え、アラ恥かしき此身ぞや、只此儘に死ねよかし、生きて甲斐なき我命と、我れと我身を死ぬ覺悟、思ひ定めて夫となく、召使ひの者へ夫々の、遺愛品を遣はさんと、心を當て置き衣服を改め、親御へ一と筆委細の事を、書き置かばやと手近かなる、硯引寄せ忍びやかに、墨摺り流す胸の内、堰き來る涙は雨霰、筆の穗長き命毛も、今は甲斐なく書き盡し今宵限りの涙を拂ひ、「のゑ父上母樣、先立つ不孝はお許しあれ、此の年までの御高恩は、海山あれど愁ひに、果敢なき事を持囃されて、國への聞へ親御の面目、生恥晒すも面伏せ、何うぞ自らの亡き後で、必らず嘆いて給はるな、黄泉の障りと成りもやせん、せめて此世のお名殘に、片時なりとお側に居て、長の御恩の十分一でも、養ひ返したう思へども、思ひがけない身の出世に、一日片時御用も聞かず、臨終の際にお顏も見ず、果てゝ行く身の心の内は、マ、何の樣であつたかと、思ふてばし下さるな、親に先立つ大膽もの、不孝者と憎んでたべ、夫が責めての罪亡ぼし、返す〳〵もお年の上、朝夕御身を大切に、只姉上を此世の便と、覺えて果敢ない白

らの、事をばさつぱり思ひ切り亡い後々で偶な事、思ひ出して惱々と、悔んでばし下さるなや云ひ殘したい數々は、須彌の山ほどあるなれど、瀧なす涙先立ちて、物云はせねば後や前、あら〳〵申殘し候と、書きは書けども眼は眩み、讀むにも盡きぬ胸の內、噫如何なる天魔が魅入りてか。斯かる果敢ない身の最後、思へば〳〵過ぎにし春の、彌生の夜の夢見より、この樣な病ひに取著れて、此身計りか若君の、御心さへに兎や斯うと、痛めし事の勿体なや、今が今生のお名殘と、兼て嗜む懷劍を、やをら取り出す覺期の際、胸一杯に思ひ詰め、岸破と臥して泣き沈み、暫し絕入る心の內、憐れと云ふも愚かなり、去程に摩耶夫人は、兼ての覺悟も今更に親を思ひ君を思ひ、頻りに嘆き沈みしが、不思議なるかな此折柄、俄に睡氣さして思はずも、熟睡むともなく打臥せしが、夢か現か幻しの、如くに光明輝きて、三五の乳房を搔分けつゝ、過ぎし頃對面せし、佛現はれ給ひしが、忽ち玉を延べたる如く、三十二相備はりたる、御優姿の兒と變じ、臥したる摩耶を幼けに、搖り起し〳〵、御聲爽かに宣ふ樣、「ノウ久しや母君、御身苦しみ在すゆへ、此身を恨み給ふは道理、されども如何なる天魔の、魅入りぞと宣ひしこそ恨みなれ、過ぎし彌生の頃、衆生の願を、普ねく滿てん其爲めに、正覺する麼なれば、何とか早く君の心を破るべき、其疑ひを解かん爲めに、仔細を包まず物語らん、必らず他へ洩し給ふな、夫一時の嗔恚に、具定公の善言を燒き捨て、又諸々の生を受くるに人と生れ、人と生

れて萬づの道理を知り、道理を知りて能く到るを、則ち三つの喜びと云ふぞかし、又世界に十定の掟あり、身尊うして賤きを捨てず又た暗きを捨てず、又た愚なるを捨てず、又た惡人を毀はず、又た貧しきを捨てず、又た衰ふ者を捨てず、又た適ざるを捨てず、又た僞りを捨てず、又た缺けたるを捨てず、因果因緣を知つて、他を恨むる事勿れ、是れ十定の掟なり、扨又未だに此麼が、誕生せざる其仔細は、姉君轎曇彌嫉妬深く、御身の懷姙を聞くよりも、過ぎし彌生の頃僞りて、月景殿へ迎へしは、母子を調伏せん爲めなり、其邪法には、人間の出世の角を七重に塞ぎ、父母より分くる、三百六十餘流の血統を大綱にて搦げ、母君も麼の骨々も、碎くる計りなれば、如何で命のあるべきや、左りながら轎曇彌は、御身と既に姉妹の緣を切れたれば、今はしも七百生の恨みの念、健やかに晴れ渡りて、二人の命恙なし、只不憫なるは奈落へ沈みし、調伏の行者二人あり、是も我、到來作佛の時至らば、引導して助くべし、是等の事必ずしも、疎かにな思ひ給ひそ、佛力自在の我身なれば、今にも產るゝは安けれども、左らば御身は立所に、中宮女御と敬まはれて、轎曇彌は尙ほ暗きより、暗き邪念の一入起りて、生々世々に迷ひを取らば、麼が功德も甲斐なければ、尙ほ尊躰を煩はさん、今告げ奉りし事共は、只此儘に閉捨て給へ、花の對面は是が初めて、又も逢ふ日のあるべきに、夢とは思ひ給ひぞと、云ひつゝ再び乳房を分けて、胎內へ入り給ふと思へば、忽ち光明輝きて、五体淸らかになりし

かば、摩耶は愕き夢覺めて、我と我身を抱きしめ、「アラ勿体なや罪深や、疑ひ晴れし今の仰せ、斯程尊き懷胎を、天魔の魅入と嘆ちしを、許し給へとかつぱと臥し、涙ながらに詫び給ふ、其程に早や夜は明けて、最とゞ心の麗はしく、硯引寄せ嘆きの中より、欣びの筆を染め。有りし次第を細々と、記るす内にも胎内の王子、いと仂よく働かせ給ひ、軈て月日も重なりて、二たゝび年十月に充つ冬の、寒けき空とぞ移りける、斯くて或る時摩耶の御前へ、優陀夷進み出て平伏し、「只今申上まするは、則ち君のお言葉、懇ろに聞し召すべし、抑も姫君の御懷胎は、最早三年に近くなれど、今以て其の記なし、之より典藥どもは、病氣なりと見立て、朕も夫と存ずるゆへ、摩耶一人懷胎と申すが、女に依りて、懷腹と申す事あり、夫のみならず人の恨みにて、物あやかりもと存ずれど、情け深き摩耶なれば、附々の女子どもゝ、嫉むべき事露ほどもなし、況してや姉の驕曇彌も、何時ぞやの文の趣き、殊に親しき同情にて、憎む樣子は更になく、是等の事を落もなく、堅く摩耶に云ひ聞かせ、安堵させよとの御使ひ、只々典醫の計らひに、任せ給へと述べければ、摩耶夫人聞召し、「難有き我君の仰せ、左りながら、妾を病氣に見立侍る、典醫の藥を用ゐん事は、却々に思ひも寄らず、實に自らが胎内は、王子なる事疑ひなし、夫につき和郎に計り、物語る仔細あり、必らず他へ漏らしなせそと、身の有樣を細やかに、云ひ聞かすれば優陀夷は感じ、「實に夫にては、御誕生の無きは道理、此上は帝へ某、宜き樣に申上候

はん、御心安く思召せとて、其儘御前を退きける、斯くて三年の春を迎へ、如月の初めとなりければ、帝國中の相見を、百人選みて、呼び出せとの勅命あり、依りて此處彼處へ觸れられて、百人の相見を、殿中へ召出し、帝御簾の影よりして、樣子如何と窺ひ給へば、軈て高明大臣、百人の相見に向ひ、「姫君の御身の上、御煩らいか但し又、御懷姙なるか詳らかに、申上げよと命ずれば、相見ども承はり、皆な肺肝を碎きつ、撓めつすがめつ摩耶夫人の、御顏容を拜し、一同に、「御懷姙は思ひも寄らず、御煩いに極まつたり、而も恨みの邪氣ありと、正しく九十九人まで、言葉を揃へて申しける内へ、姫君初め附屬の、女中も力を落さぬは無く、涙さしぐむ計りなり、末座に扣へし一人の、相見の翁は何をやしけん、物をも云はで只潛然と、泣き居るを帝密かに御覽じて、「斯く九十九人の者が、摩耶を病氣と見立てしに、那的なる老翁のみ仔細を云はで、只泣き居るこそ不審なれ、辭の要を承はれと、仰せによりて高明大臣、件んの老翁を呼び近づけて、仔細を問へば、翁は涙を打拂ひ、「そも姫君の御容体は、只今九十九人が、見立て申上げたる上からは、老耄なる某義は、何事も許し給はれと、詫ぶるを大臣聞入れば、「イヤ〳〵是れは帝の仰せ、勿体なくも忍せならず、觀相卜筮何れなりとも、心の丈を包み隱さで、詳に申上ぐべしと、退引させぬ光明が、言葉に老翁頭を上げ、「然らば御免を蒙むりて、某が今相する處、且つ占ひの趣きを明白に申上げん、恐れながら摩耶夫人は、是れ誠の御病

氣ならず、如何にも芽出たき御懷胎にて、而も玉を延べたる如き、太子御誕生に極つたりと、具さに述るを聞きわへず、大臣威丈高になり、「イヤ翁の言葉疑はし、左ほど目出たい御吉瑞、而も玉を延べたる如き、太子御懷胎と見立てながら、何とて潸然と泣きけるぞ、不吉の事動心得難し、サア此義は如何に如何にぞやと、責付けられて翁は噪がず、「其譯懇ろに申すべし、左れば某が占ひは、天眼通の仙法にて、九曜七曜二十八宿、三十六拘の星を立て、其外秘密の法を以て、男女の位ゐを差すなりと、云はせも果てず大臣は、夫が又何故に悲しくて泣きつるぞ、「されば候其仔細は、此王子降誕の後、仮令へ水火の中へ入り給ふとも、御身に恙ある事なけれど、十善天子の御位を望み給はず、明覺無爲の位ゐ備はり、衆生濟度の法王如來に在せば、明日の命も知れぬ此翁は、斯程尊とき如來の結緣に、逢ふ事難き恨めしさに、思はず涙を飜せしなりと、申せば君を初めとし、高明大臣其外の、附々までも是を聞きて、知れぬ事とは思ひながら、皆一同に欣びつゝ、一人が誠か九十九人の、申すが誠か先づ是までと、殘らず殿中を退けゝる、去程に摩耶夫人は、此の夏、綿ぬきの御祝ひの日より、玻璃遮那城へ移されて、青陽の間へ褥を設け、心も凉しき帷子に、折柄薫玉掛け香の、馨り一入なまめく風に、摩耶夫人はまだ宵の間の、轉寢し給ふ其處へ、幼けなる兒仿佛と、又も夫人の御側へ顯はれ、楓の如き御手にて、善哉々々と三度撫り、「如何に母君先つ頃、又の對面を約せしゆへ、再び現れ參りたり、明日より七日の御慎み大切なり、一時の嗔恚に、善根を燒き捨つると、云ひしこそ此時なれ、夫れ父に五恩母に十恩とて、海にも山にも代へ難き、十月の恩を受けて此世へ生れ、又十丈とて、厚き恩を蒙むり、遠からず父淨飯王にも、對面し奉らん、嬉しや母君とて優しくも、抱きつきて搔き口說き、戀ひ焦れ給ふ有樣に、共に焦るゝ摩耶夫人、「あら嬉しや只今こそ、御誕生まし〳〵たかと、抱き上げて抱きしめ〳〵、優陀夷夫婦に早く見せて、喜ばせんと飛立つ計り、心いそしく立たんとすれば、轉寢の夢は甲斐なく覺めて、只兩手にて其身をのみ、搔き抱きて居たりしかば、這は又夢にてありけるよと、思へど最早や御誕生も、近からんと思へば心嬉しく、附々に密やかに物語り、御欣び限りなき、折柄中老職の命婦とよぶ女中、君よりの御傳ひに、參りたりとて入り來れば、摩耶は忙がはしく四下を片付け、いざ此方へと呼入るれば、命婦は端然に座につきて、「扨て我君の仰せには、姫君の御煩らいより、二た年三年此の方は、花の宴も是なき處ろ、此節は少しづゝも、御快よきとの事ゆへ、帝此方へ行幸ありて、藍毘尼苑の花園にて、宮中の人々を、殘らず召出して、花の宴の御催は如何あるべき、夫も一つは其方さまの、お氣晴らしの爲なれば、只々摩耶の心任せに、せよとの仰せに侍るかし、如何思召さるゝやと、述ぶれば摩耶は嫣然に、「思ひ掛ない今日の御使い、最早や三年も我君の、御顏容も拜しまつらば、御懷かしき折柄に、此身に餘る仰せ事、冥加なや勿体なや、殊に又局々

の、上藷達も打揃ふてとは、如何にも嬉しき御宴にこそ、摩耶が欣び此上なし、君へ御返辭よき樣に、申上げ吳れよとて、尙ほ種々の物語りしつ、命婦を待遇し歸されける、去程に淨飯王、俄に花の宴の御催しあり、其用意とて殿上殿下、上を下へと返すが如く、內外の官人立噪ぎて、局の取込み政所の、混雜大方ならざりけり、斯くて其日と成りければ、帝玻璃遮那城へ行幸ありて、月卿雲客殘りなく、藍毘尼苑の西靑陽殿に、上下の隔てなくぞ連なりける、扨又姉の轎曇彌も、君よりの仰せによりて、花の宴に立出づる、姿は優しく見ゆれども、心の內の恐ろしさは、譬ふべき方もなく、妹摩耶とは同胞の、緣切れたれば今更に、心にかゝる事もなく、怯めず臆せず廊下傳ひに、附々の女中引連れて、御前近くぞ進みける、左れば靑陽殿の、南の廊へは諸卿を据へ、北の廊へは數多の女中を据へ、轎曇彌の褥を右の上へ敷き、摩耶夫人の褥を、左りの下と定め、皆々衣紋搔い繕ひ、座を連ねたる美くしさは、譬へん方もなき風情なり、されども摩耶夫人只一人、未だ出座なかりしかば、帝命婦を近く召され、「何ゆへ摩耶は立出ぬぞ、今日の花の主なるに、何とて遲きや疾く召せと、仰せに從ひ馳せゆきて、斯くと申せば摩耶夫人、「されば今日の行幸、殊に珍らしき上藷達の、運びの迎いの爲め、路まで心は赴きしが、思召の程如何と、身は是に控へ侍り、直樣參內致さんと、數多の女中を右左、引連れ出たる其姿、天人とも仙女とも、譬へん樣なき御粧ひ、加之ならず表には、仁愛慈悲の相を顯はし、靜々と

歩ませ給ふ、御頂きをアラ不思議や、瑠理光如來妙不可思議の光りを放ち、日月光佛諸共に、前後左右を守護すれば、歌舞の菩薩も光を添へ、御前間近く進みつゝ、式代わつて左りなる、褥へ移り給ひける、帝是を御覽じて、「如何に摩耶、久しく音信なき折柄、今日の對面嬉しいぞやと、實に情けある御言葉に、摩耶は答へも只平伏し、君を敬ふて座し給ひ、身を遜りてお在すれば、其樣氣高麗はしさ、四下眩き有樣に、數多の女中も惚々と、暫しは見惚れ居たりしが、軈て褥の近くへ進み、「姫君惱ませ給ひしと、聞きて皆々お案じ申し、只懷かしう侍りしに、早や癒らせ給ひけん、今日のお入りの如何計りか、喜ばしや嬉しやと、君の前をも憚からず、手取り袖曳き持て囃せば、轎曇彌は不興顏、眷向きて何の言葉もなく、差俯頭きて居たりしが、良流に盼摩耶の姿を、熟々と眺めやり、思はず涙をはら〳〵と落し、アラ怖ろしの我心や、斯程優しき妹を、嫉みし事の耻かしさと、心の內に詫び給ふ、其色外へ顯はれて、君を初め人々も、轎曇彌の摩耶を思ふ、涙の体を見るよりも、是までとは事替り、扨々優しき姉君かなと、皆一同に感じける、これや如來の佛力にて、一時の懺悔に億劫の、罪障此に消滅して、一佛成度の結緣となる、最とも尊とき事なりける、其時帝御聲凉しく、「あれなる藍毘尼苑の寶樹は、容易には折らせぬ筈、されども一入風情ある、嬉しき今日の會なれば、皆々の心に適ひしを、一枝づゝ許すべし、疾々手折りて翳に挿し、其花に擬へて一曲を唄ひ、盞を廻らしさゞめき舞へ

と君の仰せの、其の御言葉の末、「扨て今日摩耶夫人は花の主にて、自らの翳ありければ、志のある方より、一と枝手折りて簪に挿せ、酒を侑めよとありければ、皆々願ふ所なりと、等しく庭に降立ちて、何れが摩耶の御方の、御心附の花ならんと、彼方此方を打眺め、思ひ〳〵に見立てつゝ、斯れや斯れやと手折りては、皆な簪に挿込みつ、摩耶の前に進み出でゝ、盃に取添へて進めけり、佛に一と枝の花を捧げ、菩提の此身を得ると云ふ事、此時よりぞ始まりける、左れば盃の數廻りて、帝の御氣色麗はしく、摩耶の方に打向ひ、あれなる提婆羅樹の英は、藍毘尼苑の長なれば、一と枝朕がかざしにせん、那的折りてよと仰せあり、摩耶は嬉しく庭へ下り、提婆羅樹の下へ寄りて、やをら左りの手を延ばし、一と枝折らんとする程に、不思議や俄に差込み來りて、胎内の殊の外動じければ、すわ夢の告げは今なるか、折も折とて花の下、玉たいの宴も是れまでなるかと、引入るゝ樣に見えければ、女中達は愕き慌て、御手を把りて勦り撫り、口を揃へて取々に、御心を勵ましければ、摩耶は漸々人を力に、提婆羅樹の下へ座し、暫らく御心を落つけ給ふ、是や正しく御安産の、時至れりとぞ見えにける、

校訂　**釋迦八相倭文庫第貳編** 終

校訂　**釋迦八相倭文庫第三編序**

夫摩耶夫人の懷胎を、諸佛結緣して、安く太子は誕生したまひ、忽地天上天下、唯我獨尊の形をつくれど、天哉性哉、血筋の母の別を知らず、繼母の手しほに育ち、やゝ三歳にして初て、未來の母を保ゝ戀慕す、これを三歳の出家に云、去れば轎曇彌の惡念も、一時の懺悔に罪障消滅して、悉達太子の諱始、冠定の祝を賀ぶ、眞如の眉のくもりなき、月景殿のいさましさも、一犬の虚に吼るを、萬賢の御見物樣方、必實に傳ふべからず、

弘化三年丙午春

萬亭應賀述

校訂

釋迦八相倭文庫第三編

江戸萬亭應賀

去程に摩耶夫人の、座し給ふ御頂へ、虚空より金色の光りを放ち、旗二た旒れ天降りて、提婆羅樹の梢に止まり、異香芬々として實相の淨土も、斯くやあるらんと思ふ折柄、夫人の御衣を掻分けつゝ、左りの側よりアラ尊とやな、太子誕生まし〳〵ければ、帝を初め奉り、優陀夷夫婦附々も、欣び勇み氣も浮れ、殊にお庭の面と云ひ、俄かの御安産に取敢ず、屏風お褥お枕を、持運ぶさへ後や前、慌て惑へる其内に、今まで二旒と見えたる旗の、忽ち金色の龍と變じ、功德の水を下しつゝ、太子を初め摩耶夫人の、汚れを清らかに洗浴して、靉びく雲へぞ登りける、去程に太子は前へ、三歩後へ四歩、左りの指にて天をさし、右の指にて地をさし給ひ、天上天下、唯我獨尊の、形ちを造り給ひしより、母君の膝に安座まし〳〵、乳房を掻き搜し尋ね給ふ、左れば生れ子の産聲をきく時は、凡ての女の産に掛りて、一生の苦みも忘れて、力づく者なれども、摩耶夫人は去る氣色もなく、只雨に萎む花の如く、打痿れ給ふにぞ、優陀夷夫婦、慌てゝ太子を抱き上げ、兼て召抱へられなる、乳母上蔕達へ渡しければ、皆々大切に冊きて、御簾

の内へぞ入れ奉る、扨又摩耶夫人をば、お褥の儘心静かに、御居間へ移すべしと、優陀夷夫婦の指圖に任せ、數多の女中勤りて、奥へ手輿に昇き移しつゝ、御機嫌の程を伺ひけるに、尙ほ宜ろしからぬ御容体故、誰彼の隔てなく、典藥ども殘らず御脉を取りけるに、皆々頭を傾けて、「御太切々々々とばかり申せば、帝を初め優陀夷夫婦、命婦其外、怪しの末の者まで、太子御誕生の中の欣びの、その悲しみの袖を絞りて、惜めども夕べに靉びく花の雲の、朝は雨にそぼ濡れて、果敢なふ散るに異ならず、實にや老若の分ちなく、無常の風の誘へばこそ、仮りに浮世に云ふ果敢なさ、左れば悼ましや摩耶夫人は、可愛盛りの御身にて、其保はうつろはず、御健かなる風情にて、自然に目を閉ぢ果て給ふこそ、哀れと云ふも愚かなり、扨て宮中の人々は、わつと泣き臥し皆一同に、袖を絞れる有樣は、空も雨もつ計りなり、此旨附屬の女中達、漸次〳〵々々に傳へしに、帝の御嘆き一と方ならず、龍顔を惱まし悲しみ給ひ、「今日の花の宴こそ欣びなれ、正しく摩耶が名殘の爲めに、催せしに異ならず、此上もなき死出の餞別、心に殘しぞと打嘆き、吊らはせ給ふぞ難有き、扨又君の御側に、附添ひありし轎曇彌の方、摩耶は敢なく爲り給ふに、きくより裲襠掻ひ上げつゝ、無常の一と間へ走りゆき、其亡き骸に縋りつき、表は名殘の涙なれども、心の内には過ぎし頃、調伏せしより惱み初めて、斯く果敢なき身と成り給ふか、アラ怖ろしの我心や、罪なき妹を恨みし事、如何で天道許し給はん、摩耶の魂ひ此の家

の棟に、止まりをれば今一と度、亡骸に返りて此私に、言葉を交して給はれと、誰が敎へしか小袖の褄を結びとめ、魂呼ばひして泣きけるを、優陀夷見かねて樣々に、諫むれども尙ほ正体なく、此儘此處に身を失ひ、冥土の摩耶に追ついて、造りし罪を懺悔して、夫の御罰を逃れんと、悶へ焦れて泣き口說くを、優陀夷は君の仰せに事寄せ、轎曇彌を側に隔て、、「其の御名殘はお道理なれども、嘆いて甲斐なき繰り言より、後世の菩提が何より功德、イザ〳〵御支度ありて、妹君の供養を、勤めらるべしと、宥め賺ば附々の女中も、「夫が何よりの御千言ぞと、言葉を揃へ共々に、勸められて轎曇彌は理に服し、泣々月景殿へぞ歸りける、是れやそも瑞圓信女の功德にて、覺れば善と惡と二つは無く、煩惱菩提の種深き罪障も、一時の懺悔に消滅して、下化衆生結緣致すとかや、斯くて淨飯大王は、摩耶の菩提を營まんと、白綸子のお服に召替られ、一と間の內に閉籠もり、御經讀誦し給ひけるが、良あつて命婦を召され、「密かに優陀夷へ尋ぬる事あり、是へ招くべしと仰せの旨、直ちに次へ傳ふれば、優陀夷畏まりて御前へ出で、進み て平伏する程に、帝御聲曇らせ給ひ、「如何に優轎夷、摩耶が身の上、今更悔んで甲斐なき事、是れ皆な生ある物の習ひ、とは云へ未だうら若き、莟の花の身にしあれば、惜しむ心も一入勝りて、斯く亡き迹を吊ふ內、思ひ出にしは、摩耶が此世に在りける折、何がな彼が身の上に、願ひの筋もありつらん、夫等の事も聞かまはしく、殊に過ぎし頃久々なる、彼の懷妊を訝かし

く思ひ、麿が尋ね遣はし、事の有りし時、其方が種々〳〵の仔細ありと答へしが、其赴きは如何なる事ぞ、包まず語り聞かせよと、優陀夷仰せを蒙むりて、「さん候過ぎし頃、摩耶へ綸言ありし節、委しき事は今以て、奏聞致さず候へ共、其節摩耶の仰せには、いやとよ妾が胎內は、物の化の魅入り病氣にあらず、偏へに芽出度き王子なり、假令へ千劫萬劫經るとも、一度は誕生まします事、疑ひなけれど兎に角人の浮薄さに、懷胎と思ふ三年が間の、樣々を落もなく、書き認めて此にありとて、某し夫婦へ忍びやかに、見せ給ふを拜見し、最とも尊く覺えしが、扨ては此度不思議にも、夢の御告に少しも違はず、太子は御誕生ましませしが、摩耶の方は悼はしくも、既に果敢なく爲り給ひぬ、其時傍に置給ひし、御手函を改め見しに、以前の御遺書は更なり、數多の女中達へ夫々に、御紀念分けの事までも、認め置かれし御心入れ、未だうら若き御身にして、斯くまで物に行屆きし、御眞心の忝けなさを、思へばいとゞ悲しさに、未だ奏聞を扣へしが、過ぎにし事の御不審を、御尋ねに任せ只今こそ、某が妻に申付け、彼の御書き物を取寄せて、尊覽に入れ奉らんと、云ひつゝ襖の外へ向き、人を呼ばんとする程に、折よく妻は御佛に、供養の花を携へて、行くを呼止め云々と、申付くれば女房は、軈て摩耶の手函を携へ、目も泣腫らし悄々と、御前へ出て手箱の內より、御書置きの文の中にも、三年の間惱み給ひし、其故由を細々と、書き綴りしを取出し、帝へ捧げ參らすれば、淨飯王取上げ給ひ、熟々

叡覽在すに、初めよりして細々と、御身の果敢なき事をのみ、書續け給ひしかば、帝を初め優陀夷夫婦も、感涙袖に包み兼ね、暫し言葉も絶へけるが、良あつて帝優陀夷に向はせ給ひ、「是れ見よ此の返す書に、若しも此儘相果てなば、懷胎なるか病ひかの、二つ一つの證據をば、身を裂いてありとも顯はして、人の疑ひ晴らしてたべ、是のみ摩耶が上もなき、願ひに侍りにと書きてありと、仰せて尙も細々と、書殘されし事どもを、殘る方なく讀終りて、龍眼の涙を拂はせ給ひ、「如何に優陀夷、摩耶が亡骸は、尙ほ存生の体にもてなし、八葉の車に乘せ、宮中を送り出すべし、扨て吊らい納むる處は、青龍殿の東なる、夕陽山の景色をば、摩耶が常々樂みて愛で欣びし處なれば、此の頂きに、十六丈の寶塔を築き、正面に提婆羅樹を植へ、左右に藍毘尼苑の寶樹を植付け、青龍殿を傍に引移して、香華を絶す事なく、吊らふべしとの綸言あり、優陀夷夫婦頭を下げ、「左りとては厚き御惠み、嘸ぞや草場の影に於て、此事聞こし召すならば、摩耶夫人は此御言葉を、名僧智識の經文よりも、嬉しく得道致さるべし、イデ綸言の趣きを、夫々へ申し達せんと、即座に御前を退きて、夫々へ右の趣きを傳へ、急ぎて用意を調へつゝ、摩耶の亡骸野邊送りは、君の仰せに任せつゝ、尙ほ存世の裝ひにて、八葉の車に移し、帝を初め附々まで、殘る方なく香華の手向け、良終りて御供には、優陀夷を初め高明大臣、右將軍を先として、百官諸士の輩數百人、衣服を改め是を警伍す、扨又女中の輩は、優陀夷女房命婦を

初め、お側お小性お次お茶の間、お仲居おすへお仂まで、皆夫々に役を設け、御車に從ひつゝ、軈て宮中を靜々と運びいで、列を亂さぬ道すがら、辻々には老若貴賤の隔てなく、袖を絞りて立集ひ、摩耶の車を拜しつゝ、額づき嘆くこそ殊勝なれ、斯くて程なく夕陽山の、麓近くへ來りければ、笙篳篥太鼓の音を、揃へて音樂を催しつゝ、尙も車を進むる程に、附隨ふ面々も、皆な感涙を堰きあへず、牛打つ男も斯く計り、尊き方の葬式に、結緣する事の難有さと、感嘆すれば思はずも、鞭を戞裡と投げ捨て、短き袂を延ばしつゝ、涙を拭ふぞ道理なる、去る程に夕陽山の御墓所へ、漸やく着きにければ、高きも低きも隔てなき、世の習ひとて是非もなや、無常の風に靡くなる、旗天蓋も哀れ添ふ、葬禮の式事終り、車よりして御柩を、既に土中へ納めつゝ、守りの役を付け置きて、忌日々々の御吊らひ、香華の手向け怠りなく、又彼の青龍殿を、追々此處へ引移され、贈進あるこそ冥加なれ、されば月景殿の轎曇彌は、其の後心も改まりて、摩耶の菩提にも心を盡し、苟且にも艶めきたる、氣色なければ、命婦は欣び、何とぞ帝の御伽に、親しく近づけ奉らんと、彼方此方を繕ひて、媒妁しつゝ睦まじく、御通はせを執持ければ、夜の大臣も浮々と、酒のむしろの繁々に、去る者は日々に疎しと、世の俚言に違ふ事なく、摩耶の忌日も程たちて、何時しか絶ゆる香華の、煙は轎曇彌の胸にあこがれ、帝も遂に月景殿へ、通はせ給ひて、比翼連理の割なき契りになりけるゆへ、附々の女中達も、欣びの餘

りには、寄り集りて獨り寢の、身を恨み呟くは、宮仕へして憂きを知らざる、女子の常とぞ知られける、扨て淨飯大王は、或る時命婦を、月景殿へ召連れ給ひ、轎曇彌に語らひ給ふは、青龍城に殘り居る、摩耶が召使ひを初め、月景殿の女どもへも、摩耶の遺物分けを遣はすべしと、仰せを受けて畏まる、命婦端然に申すやう、「御意の趣き畏こみ候へ共、摩耶夫人の御遺書もあれば、此義如何と伺へば、「如何にも〳〵、其遺書へ記るせし者へは、夫々の遺物を遣はし、漏れたる者へは、其方達宜きに計らへかしと、殘る方なき惠みの程、青龍城を初とし、月景殿の女中へも、優陀夷の女房を以て、夫々に御遺物を下され、青龍城の女中は殘らず、御暇を賜はりしゆへ、名殘涙の乾かぬ内、嬉し涙の嫁入沙汰、或ひは聟取り夫々に、兄弟分の訪ひをとづれ、狂言見物月花の、供も互ひに世帶染み、夫婦爭ひの出來心から、重ぬる褄の數顯はれ、遂には苦界に身を落すもあり、憂きも辛きも假の世の、假の宿にも因と果の、車は巡り來る者を、知らぬが佛のいたづら事、謹むべし慎むべし」去程に、月日は水の流るゝよりも最と早く、摩耶の忌日、百ヶ日も何時か過ぎたるに、太子は益々健かに成人し給ひ、殊に精悍やかなる事の聞えて、淨飯王は優陀夷を召し、今日幸ひの吉辰なれば、太子に初めての對面せん、疾々諸卿へも參内の趣き、相觸れよとの仰せを受け、夫々へ達せしに、月卿雲客、如何にも芽出たき御世の政と、心勇みて參内する、扨て玉座近くへ優陀夷の女房、太子を抱き奉りて進みければ、

帝の御膝に抱き取り給ひつゝ、「如何にも優しき面こしかな、摩耶に其儘生寫しと、云ふも中々愚かなりと、心ともなく云ひかけ給ひて、「いや左にあらず、此若宮の母と云ふは、則ち是なる轎曇彌なり、忘れても摩耶の子と、云ふ事決して語るまじ、宮中は云ふも更なり、國中民間怪しの者の末までも、此事堅く示すべしと仰せ出れば、只太子は轎曇彌の、お腹なりと持て囃し奉りて、千代萬代の末までもと、祝ひ壽き參らせける、左れば轎曇彌は世の聞へ、旁以て嬉しき事の、此上に侍らじとて、帝の御側近くより、太子を抱取り左も愛々しく、眞の子の如くに假裝し、良あつて乳母を引連れ、月景殿へ歸られければ、附々の者の中にも、初めて玉顏を拜せし者は、アラ麗はしの御有樣や、楊桃の媚翡翠の黑髮艶々しく、瑠璃の眉より眦かけて、仁愛の御相顯はれ、如何にも優しき若樣と、手を打囃しさゝめけば、太子は御機嫌麗しく、共に浮かれて愛いけに、頭てん〳〵手拍子まで、日に增して智慧づき給ふを、母君は餘念なく、取囃し守り立てらるゝに、早や三歲と爲り給へば、初元結の御祝ひとて、月景殿にて樣々の、物の御調ひ數々揃ひ、既に帝へ參内の、吉日となりければ、御父淨飯大王へ、獻上の其品々は、寮の御駒綾羅、金劍銀劍玉の旗、龍幢龍旗寶瑤桂、金銀珠玉を取揃へつゝ、華やかなる飾を添へ、官人仕丁打圍ひ、前後を守りて參内ある、其形容ぞ華美なる、扨て太子へは、優陀夷夫婦乳母冊きて、軈て玉座の前へ進み出で、禮義正しく見え給へば、帝叡覽まし〳〵て御ん言葉優

しく、「念なう漸く成長したまひし事、國の榮へ千代萬代までも限りなふ、目出たき例、則ち諱を、悉達太子と授くるぞと、仰せに從ひ傍らに、扣へし優陀夷、兼て認めありし壽讃の折紙を、白木造りの臺の儘、差向けければ優陀夷の女房、押戴かし參らすれば、共に平伏ありて、御禮をぞ述べ給ふ、其時帝再び宣ふ樣、「如何に優陀夷承はれ、今日太子初元結、諱初めの祝ひ事に、摩耶が六年の忌も晴れたれば、轎曇彌諸ろ共、太子を夕陽山へ誘ふべしと宣示あり、優陀夷畏まり、其趣き云々と、轎曇彌へ告げ知らせしに、「こは身に餘りて、嬉しき仰せかな、願ふても一と度は、太子を誘ひ、摩耶が墓塲へ赴き、せめて紀念兒の成人を假托に、我宣からぬ事の讖悔をなさば、左のみに執念く恨みもあらじと、過ぎし日よりも此事の、心に思ひ絶へねども、帝の聞へ如何あらんと、案じて扣へ侍りしに、左りとは嬉しき仰せなり、御言葉の變らぬ内、疾々太子を誘ひ申さん、夫々の者へ供の用意を、急がしてたべとある、俄の御物詣に、附屬の女中も慌てさゞめきて、御供の身拵へ、何かに各々行通ひして、長局の混雜云ふ計りなし、斯くて程なく夫々の、御供方も揃ひ、御乘物をお廣敷内なる、長廊下まで舁ぎ上げし、轎曇彌の方、華麗なる粧ひにて、太子を抱き、御駕籠へ移り給ひければ、御陸尺の女ども、力を揃へて靜々舁上げ、御玄關まで舁出れば、男の陸尺受取りて、尙ほ靜やかに舁出せば、御供には優陀夷夫婦を初めとして、お側お次お仂まで、連なりて供し奉る、扨て夕陽山の境内には、

藍尾尼苑の花、今を盛りと咲き揃ひ、人待貌の梢々も、只山彦の音つれのみにて、花になる身は何ならん、中にも無情なき色を含み、咲亂れしは寶塔の正面なる、提婆羅樹の英は、山吹の色にあらねども、物云ふ事の叶はぬは、摩耶が果散なき亡魂の、若しや止まり給ふかと、宮守る人も袖を濡せし折柄に、麓より對の狹箱、凜々しき打物先立てつゝ、悉達太子、轎曇彌の方御參詣と、驕て寶塔の傍へ、御乘物を舁下ろし、お履物參らせしに、悉達太子は常よりも、御機嫌冴々と勇み給ふを、附々御手をひかゆれば、如何にしてか振放ち、彼の提婆羅樹の邊へ、直ちに參り給ひつゝ、花の下に取付きて、戯むれて居給ふ内、轎曇彌は摩耶の寶塔の前へ跪き、科なき妹を恨み、遂に果敢なくなり給ひし事の、今となりては我身ながら、我身を恨み侍るかしと、後を悔みし繰り言も、人目憚る口の内にて、又た提婆羅樹に打向ひ、「夫れ花は心なしと雖も、折を待得て、斯く其色を顯はせば、我罪咎を如何に忍ぶべきか、あら懷かしの妹君、あら畏ろしの我心かなと、懺悔の涙堰きあへず、袖に餘れる折こそあれ、俄に山風烈しく吹起り、雨は篠を亂して突く如くに、花を散らして降り來れば、轎曇彌を初めとし、皆々取敢へず傍らなる、青龍殿へ入りけるゆへ、附添ひし乳母も又た、太子を抱き宮中に入りて、雨を凌がんとしぬれども、太子は一人むづかりて、中々木の下を放れ給はず、尙ほ惡あがき仕給ふを、優陀夷は是を見兼ねつゝ、雨を厭はず走りいで、「コワ何ゆへに怒かり給ふぞ、此雨風の烈しき

に濕れて、故意と我儘を宣ふか、今にも雨晴れ風やみなば、又此處へ誘ひ參らせん、いざ〳〵此方へ〳〵と、抱き入れんとしつれども、中々に聞入れなく、尙ほ怒かり悶き給ふにぞ、優陀夷は言葉を正しくして、「扨も心强き若君かな、さる御心なる記にか、三年が間母君の、胎内に身ごもりて、遂に母上を失ひ給ひしも、既に此花の下なりき、あら恨めしの此花や、疾々と渡らせ給へとて、無体に抱きかゝへつゝ、宮の内なる轎曇彌の、御膝へ移し參らせて、「イザ是なる母君の許に、遊び給へと諫め申せば、「いや〳〵是なるは、麿が母には在まさずと、細き腕に押退けて、「我母戀し、何處にやお在ます、何咎あつて此麿を、早くも見捨て給ひしぞや、我こそ麿が母なれと、早や〳〵名乘り見へてたべと、轎曇彌の裙に縋り、彼方此方の女中に賓はり、物狂はしく滑然と、打泣き給ふ有樣は、如何にも不思議と有合ふ人々、貴ひ泣しつ賺し申して、外へ移らせども聞給はず、太子は尙ほむづかりながら、「此處は何と云ふ處ろにて、主個の名は何と云ふぞと、宣ふに轎曇彌は、愈々悲しく答へ兼ねて、絕入る計り泣き沈みしを、何心なく太子は、尙ほも袖を取り、「如何に〳〵と尋ね給ふに、轎曇彌は漸やくに、涙押へて顏を上げ、「その御心に快からず、思さるゝ事の有ればこそ、去るお尋ねのあるらんを、今更嘆ちは致さねども、御心根の悼はしさに、申兼ねたる此の處ろは、昔摩耶と云ふ者の、住みし宮にて侍るかし、アレ〳〵那處に美くしき、綠の花の候を、御覽わつて鬱を晴らし、左のみ怒かり給ふな

ど、轎曇彌は更なり其餘の者も、取々賺し紛らせども、「イヤ花より其摩耶夫人を、此處へ召して給はれと、あどなき仰せを聞くよりも、又も皆々興覺めて、何と答ゆる者も無ければ、轎曇彌は端然に、「其摩耶と申す者は、那的なる寶塔の苔の下に、住む人なれば中々に、召さるゝ事は叶ひ侍らず、異な事のみ仰せずとも、先づ祝ひの酒きこし召せと、提籠の供御を進むれば、太子は不審の面色にて、頭をやをら傾け給ひ、心の内に思すやう、今日の花見に誠の母の、在す處ろを聞得たる事の嬉しさ、時節を待ち、遂には深く尋ねん者と、漸やくに思ひ止まり、「左れば那的なる花一と枝、誰か折りて與へよと、仰せに優陀夷畏まり、「最と安き御事なりとて、一と枝折りて差上ぐれば、太子は嬉しげに取上げて、是より御手を放ち給はず、是なん深き思慮の初めなり、是を三歲の出家と云へど、三年胎内に在せしゆへ、五歲の出家とも申しぬ、扨て御歸りの路次は、御乘物を退けて、殘らず附き從ひ參らせ、御步行にて月景殿へ、靜々と歸らせ給ひける、去程に轎曇彌は、計らずも太子の心に、誠の母で無き事を、覺られしより何となく、不快らず思ふより、隔つる心の起りつゝ、冊づくさへも疎ましけれど、帝の手前如何ぞと包めど漏るゝ無情さの、涙の袖にだき抱へ、晝夜慰め參らするに、如何なる故にか太子は又た、良もすれば佛間へ入り、夕陽山より家產にせし、彼の英を佛の前なる、經机に供へつゝ、最愛なる手を合せ、何事をか祈念して、伏拜ませ給ひけるを、乳母は見るより疎ましく、お側

へ寄りて餘所々々しき、事に紛らし諫むる樣、「是はしたり若君さま、まだお年も參らぬに、異な事ばかり遊ばさる、其のよな事はまだお早ひ、恐れながら御相應の、コレ此處にある鳩車、太子の御年既に早や、お五つに成り給ひし故、公家大臣より參らせし、若樣のお手遊び、いざ是れをお引き遊ばして、母上さまのお心を、お慰め遊ばせと、申すを太子は餘所になし、「ノウ乳母何云やるぞ、世の有樣は電光石火、昨日生れて今日の夕の、煙と消ゆるも爭はれず、三才にても五才にても、身の老先は賴まれぬもの、此處を放れる事は思ひも寄らずと、又手を合はせ、再び答へも無き處へ　轎曇彌は忍び來て、若しや摩耶の俤の、顯はれもして若君に、見ゆる事の有らんかと、果敢なき事を押計りて、種々心を惱ましつゝ、先程より窺ひ居たるに、乳人は早く側へ寄り、今太子の宣ひし、事云々に告げ申せば、轎曇彌は聞敢へず、愈々涙も忍びかね、袖に餘れる計りなり、斯る處へ光明大臣、帝の宣示を蒙むりて、此の處ろへ入り來れば、轎曇彌は周章だしく、泣顏隱して出迎へ、「如何に大臣、何事の侍るにやと、尋ねに光明手を支へ「されば今日の宣示には、太子五才に成り給ひしゆへ、則ち三つ目の御祝ひを蒙むり、定めのお儀式を、仰せ出されて候と、述ぶれば蹻曇彌打點頭き、「ヲヽ夫こそは、女は簪初めと云ひ、下つ方にては、袴着の祝ひとて、兩親ある者は連なりて、祝ひさゞめく事なるに、我太子の無情は、年端も行かぬにアレ見給へ、あの佛間に終日在して、只御佛を拜し給ひ、餘の事

は申上げても、如何な如何な聞入れ給はず、如何にすべきと打嘆てば、大臣も訝かりながら、御側へ進み寄れば、太子は早や色を悟りて、優しく言葉をかけ給ふ、其時大臣謹んで、「若君五才の御祝ひ、冠定めのお儀式を、仰せ出されて候と、忝しく述べければ、「夫こそ身が望む處、轎曇彌の御方も、嘸な欣び給ふべし、急ぎ用意を致せよと、案に相違の御仰せ、是れ元より心と言葉の、表裏とは知らずして、千代萬代まで繁昌の、記と皆々欣びける、軈て吉日と成りければ、帝を初め轎曇彌、奥書院へ褥を設け、月卿雲客袖を連ね、踵をついで並居る有樣、實に勇ましき次第なり、去程に悉達太子は、冠凜々しく衣紋つき、自から氣高く見え、歩み出で給ふ御裝ひ、逞ましき面ざしは、五才と云へど七才の智惠在せば、席上の起居擧動、殊更に父君を、敬まひ給ふ言葉の品々、實に常人とは見え給はずと、皆々恐れ敬まひける、其時みかど、太子を近く進ませ、「扨も〳〵美くしき裝ひかな、朕が仁德に十倍增して、國を納め民を憫れむ事、今よりして忘れ給ふな、初冠りの祝ひ、目出たし〳〵と壽ぎ給へば、轎曇彌も木に竹を接ぐ、相性の生得惡ろき心から、祝ひ言葉をかけられけれど、何となくうつり宜からず、餘所の見る目も鈍ましかりき、斯くて御祝ひも濟ければ、帝太子を誘いて、月景殿の御庭へ下り給ひ、池水に浮べし小舟に乘り、帝自から棹さして、漕ぎ戯むれ給ひければ、太子殊の外欣び喋き、折しも蓮花の花盛りにて、其色香の清らかなるを、只管に愛でらるゝゆへ、帝思はず涙を

催し、心の内に思すやう、そも太子は末頼もしからぬ、志の程顯はれぬ、斯くあらんかと此池に咲きし、蓮を見せけるに、果して外の花よりも、分けて甚く好む事、是れ佛心の兆疑ひなし、何卒此の志を、止めたしと只管に、思ふ心を押隱し、「水上の遊び是までなり、尙ほ勇ましさ戲むれせん、太子を初め女子ども、早や來れよと船より上り、宮中へぞ入り給ふ、扨も轎曇彌は過ぎし頃より、太子此世に亡き母の、摩耶を慕ひ給ふより、何んぼう辛さを忘れ兼ね、暫し心を慰む爲め、腰元共を相手とし、妻琴を調べ唄ふ處ろへ、太子諸ろ共帝入らせられ、「コヲ面白し、今日の祝ひの目出たさに、今より酒を初め、富貴組など唄ひて、腰元どもに一曲を奏で、我心を慰めよと、叩せは嬉しき女中達、立噪ぎつゝ種々の、思ひつきなる事どもして、御慰みに備へければ、帝一入興に入り、其夜は月景殿へ御止宿ありて、太子の心を勇ませ給ふは、彼の佛心を抑へ給ふ、下心とぞ知られける、

扨この續き小弓の勝負に、太子と提婆の爭ひ、太子學問に才智ある事、太子修業の志、新宮造營、太子に妃を奉つる事、太子御胤を宿しつ妃を見捨て、宮中を忍び出で給ふ事、追々次編に著すべし、

校訂　釋迦八相倭文庫第三編　終

校訂　釋迦八相倭文庫第四編序

夫天の命むる二五の性理、精きを受て生るゝものは人也、性理偏氣に埋れて、生るゝものは畜類なり、性理幽微なるを受て、生るゝものは草木也、されはその性理の精きを受て生れし中にも、猶貴き賢仙を望、太子の御歳七才にて、小弓の勝負を催し給ひ、大惡無双の徒弟なる、提婆達多と爭ひしが、終に射勝玉ひしより、是ぞ提婆の意恨の始め、扨太子九才にして、初學の師には鬱頭覽弗の院へ遷り、回鸞麟馬虎頭の筆勢、皆流通なるあらましを、おぼつかなくもあやなして、冬籠する此草冊子、何卒梅に先立て、評判あらんとを冀と爾云、

弘化三年丙午春

萬亭應賀述

釋迦八相倭文庫第四編

校訂　江戸萬亭應賀

此に又淨飯王の四番目の弟、博濟道にて三ケ國を領せる、斛飯王は、過ぎし頃善覺大臣の、姉妹の娘を深く思ひ佗び、戀慕ひしが二人とも心に從はず、是に依つて自から、善覺大臣の館へ赴き、何れなりとも奪ひ取り、立戻らんと狼藉を働きしに、折しも思ひがけなき、迦毘羅城なる兄君、淨飯王より勅使として、大臣入り來りしかば、斛飯王又も仕損じ、空しく悄々立歸りつゝ、二人の娘の樣子を聞くに、早や姉妹とも淨飯王の、后と成りたる沙汰ありければ、斛飯は齒嚙みを爲して、二人の娘を憎み、且つ兄上を嫉みしが、詮方なくて漸やくに、霎時は思ひ止まりぬ、扨此の斛飯王と、奥方の中に出來たる、提婆達多と云ふ太子あり、幼きよりして心荒く、仁義の道をば少しも學ばず、只山へ行き野に赴きて、鳥獸を多く捕り、些細の遊び戯むれも、殺生ごとを好みつゝ、今年漸やく十五にして、勝れし豪傑の、其凄まじき働きを、見るもの膽を冷さぬはなし、斯くて或る時庭へ立出で、小性相手に唐犬を、責めさいなみて居たりしに、腰元女中若樣〳〵と、腰を折り屈めつゝ、「只今迦毘羅城の、伯父君樣より御使ひ參り

父上お逢ひ遊ばすゆへ、貴下樣にも御對面あるやう、殿樣仰せられましたと、申上ぐれば提婆達多、「はて何用あつて俄の使者と、云ひつゝ其處を打捨て、椽側へ來て腰かくれば、彼の腰元がかけ參らする、湯桶の湯にて手を洗ふ、斯る處ろへ庭口より、淨飯王の御使ひを、側役の者伴なひ來り、提婆の前へ平伏すれば、提婆は不審の眉を顰め、「何事にやと問ふをも待たず、彼の使者言葉を正しくし、「今日の御使ひ、別儀には候はず、悉達太子さま、早や七才にならせ給ひしゆへ、駒くらべ小手弓の、勝負の御催し是あるにつき、若君にも御相手の、思召し如何にや、御樣子尋ね參れとの事、尤も其當日は、明日に定められ候と述べければ、勇氣に誇る提婆達多、目に角立てゝ云ひける樣、「夫は〳〵、御念の入りたる御使ひかな、悉達どのはまだ赤兒と仝前、殊に孱弱き性質なれば、我を萬事の、稽古の師匠とも、頼むべき筈なるに、相手なぞゝは片腹痛し、ヲヽよし〳〵、何事も我方寸の內にあり、會日は愈々明日とあれば、我未明より赴きて、荒馬の責め方、手綱の揃き樣、思ふ存分目に物見せん、併し悉達どのは、まだ年果敢行かぬと知つて、駒くらべ或ひは小弓の勝負にかゝり、滿更に用捨もなるまい、赤恥搔いて父淨飯王まで、相伴の顏汚しも、我から決して望ひにあらず、使者を向けられたる程なれば、元より覺悟の上ならんも、面白し〳〵、委細は明日參りし上、萬事緩々語るべし、使ひの者大儀と權柄に、膠もしやしやりも無き挨拶、投げ出す樣に云ひ捨てゝ、一と間の內へぞ入りにけ

る、使ひの人は手持無沙汰に、彼の側役に誘はれ、暫し休息して歸りける、扨て其の翌日迦毘羅城にては、愈々今日駒くらべ、小弓の勝負の御催しとて、殿上の御庭先なる御馬場へ、新たに敷砂を爲し、凜々しく埒を結ひ廻らし、塵も据へざる、掃き掃除の役を添へられ。綺羅美やかに御馬見所には、紫の幕を打たせ、前には御簾を懸けまくも、内には淨飯王を初め轎曇彌の方、月卿雲客殿上人等、夫々に席を分けて着坐せしめ、又其人々の北の方、皆盡く御簾の内に召されて、小弓の勝負を見物す、斯くて程もなく悉達太子は、提婆を先とし、數多の公卿の公達と伴ひ、附々の者を召具して、馬場の假家へ立出で給ひて、敵味方の群を分けんと、則ち提婆を西の方の大將と定め、小太郎と名乘らせて、諸卿の公達を差副へられ、太子は東の方の大將となり、大太郎と名乘り給ひ、同じく諸卿の公達を誘ひ、斯く東西に陣を分ち、第一番には霞の勝負と名づけて、西の方の公達駒を進め、四寸の玉を東へ擲を、東の方の公達走せ出で、是を射て落さんとすれども、其矢は外れて射止め得ず、是よりして漸次々々に、互ひに出合投げかけ〳〵、射れども〳〵空矢のみにて、勝負更に付かざれば、いで此上は大將同士の、太子と提婆、西東より鎧を蹴立て、最とも勇々しく出逢ひければ、馬見所に淨飯王を初め、轎曇彌附々まで、今ぞ太子の勝負ぞと、手に汗握り身を振はし、何卒太子勝ち給へと、心を凝し目視り居れば、並居る諸卿北の方も、片唾を呑みてぞ眺めやる、扨て提婆の方より來りたる、公達

數多の女中達は、何卒提婆の勝つ樣にと、神佛を念じ夫々に、氣を揉み焦るぞ道理なる、左れば元より强氣の提婆、太子を侮り心の内に、己れ今目に物見せんと、軈て西の方より馳せ出て、玉を虛空へ擲ば、悉達太子は心得たりと、兼ての身構へ弓引絞り、鏢と射る矢は過たず、玉をはつしと射落し給へば、彼方此方の見物の人々、思はず聲を振り立て〳〵、東の勝と呼ばはつたり、提婆は是に氣を焦ち、身構へしたる程もなく、太子東の持場より、擲ち給ふ其玉を、さしつたりと發矢と射る、其矢は外れて張詰めし、幕の外なる板塀を、射貫きたる其音に、すは射損せしと大音に、此處彼處にて囃されければ、提婆は無念さ遣る方なく、イデ今一と矢仕らんと、駒を勇ませ進めけるゆへ、太子又た玉を投げ給ひしに、是をも思はず射外して、提婆は思はず殘念さ、顏を背向けて齒嚙みをなし、口惜涙を落せしは、是ぞ所謂る鬼の目に、涙と見えて心地よし、此有樣に提婆の方より、召出されし見物は、力を落し無念の思惑、又此方には淨飯王、轎曇彌を初め附々の、女中は更なり月卿雲客、其北の方も一同に、若君一人の御勝と、口を揃へて囃し立てられ、提婆の恥辱此上や有るまじと、淨飯王差くみ給ひ、軈て優陀夷を召寄せられ、「如何に優陀夷只今の勝負は、大空を飛ぶ玉なれば、當らぬが道理なり、然るを太子が射止めたるは、是れ過まちの功名なれば、極めて勝とも云ひ難し、今一度東西を分け、第二番目草薙の、勝負を疾々催はさせよと、仰せの趣き、優陀夷は畏まりて、兩方の大將へ、斯

くと告げゝれば、又た東西の公達各々出逢ひ、草薙の早勝負に取掛るを、太子味方の公達に宣ふ樣、「如何に各々空飛ぶ玉さへ、射止むれば射止むる者を、此の草薙の早勝負は、大地を轉ぶ玉なれば、射止めんは心の儘なり、左のみに焦り給ふ事勿れ、彼方に射止めば此方にも、劣らず射止め給へよと、心を付けたる仰せを受けて、皆々心得へ打扮つゝ、闘みて勝負を爭ひけれども、何れも外れ矢のみにして、又も勝負定まらねば、遂に又東西の、大將の手前となり、駒を蹴立てゝ西の方より、提婆は勇み進みいで、大力無双の日頃の手並に、十倍增して力を籠め、玉を大空へ貫ぬく如く、殊更高く擲ちしを、太子は悠々と矢を交へ、未だ放たでおはせしを、提婆は元より身寄の見物、悉達太子射損じたり、提婆の勝と大音に、呼上られて轎曇彌、其外附々の女中達、皆な冷汗を額へ流し、御簾の内より延び上り、樣子を窺ひ見る處ろに、太子軈て身構しつゝ、雲の中より落ち下る、處ろを丁と射止めしゆへ、提婆は案に相違して、呆れて獨り膽を消し、一と口に誘りし事の、恥かしげなる折柄に、轎曇彌聲をかけ、「ヤレ出來したり出來したり、初めに射損せしと見せかけ、落來る處ろを射止めたは、手柄々々と宣へば、先に囃し立てたる、提婆方の者ども、皆消入りたき風情にて、何と云ふべき言葉もなく、顏赧らめてぞ扣へゐる、提婆は尙ほも心を焦立ち、第三番目の勝負に、小的を射けるに、太子は深く思案なし、彼方に射止むる時は此方に射止め、彼方が外せば此方もはづし、小的の勝負を分

けざるは、太子の心に思慮ある事と、皆々感じ敬まひぬ、扨て提婆は十五才、太子は僅に七才なるに、小弓の勝負に負けたるより、見れば遺恨の初めなる、左れば太子は其色を覺り、提婆に向ひて物しとやかに、言葉を交し睦ましく、袖を取りて先へ立ち、「先々此方へ御入あれ、祝ひの酒一つ參らせんと、宮中へ伴なひ給へば、淨飯王轎曇彌も坐席に連なり、「目出たき今日の坐敷かな、イザや一献過さんづ、腰元ども、唄へや唄へと喋めき渡り、提婆を厚く待遇せども、提婆は中々興に浮かれず、暫らくして館へ歸りければ、太子は附々の者に宣ふやう、「扨も今日の遊びは面白からず、本意なき戯むれ、恨めしき事かなと悔ませ給ふは、奥深き思慮、御在す事なるべし、去れば早くも年月立ちて、太子九才に成らせ給へば、帝よりの綸言にて、優陀夷へ仰付けらるゝは、「如何に優陀夷太子も早や、九才にもなりたれば、學問の道をも學ばせんと思へば、數多の殿上人を是へ呼べと、仰せに從ひ呼出せば、皆參内して居並びたり、其時帝宣ふは、「そも太子には如何なる事を、初めには學ばせんや、皆々宜しく穿義すべし、依りて朕が思ふには、先づ出世の道を第一に、學ばせんと存ずれど、汝等が存じ寄る處をも、詳らかに聞かせよと、事懇ろに仰せわれば、數多の殿上人、右と左に坐を構へ、穿義取々なりけるが、軈て右の坐より一人の公卿、進み出て奏しけるは、「夫れ尊きは利を求めず、仰せの如く御出世の道こそ目出たかるべしと、述れば又た左の方より、公卿一人進みいで、「恐れながら御尋ねに任

せ、申上げ奉る、今右より奏聞せしは實に尤もの事なれども、我々が存ずる處ろは、先づ太子の初學には、世間の道こそ然るべしと、速かに言上せしに、帝暫らく御頭を、傾けさせ給ひしが、良あつて宣ふやう、「成程々々、只今右の方より、申條も左る事なれど、能々思慮を廻らし見るに、太子摩耶の胎内にある節、百人の相見の内、一人の老翁が占ひし處ろ、今となりて太子の、起居動作を思ひ合すれば、未だ年端も參らぬに心賢く、人の心を破らぬ氣質、正しき樣子の見え侍れば、如何にも出世の道よりも、世間の事業を、學ばせんに如くべからず、斯樣に年波寄する朕が身の、只案じらるゝは太子の事、心に掛るは是のみなれば、皆の者宜き樣に計らひ、呉れよかしと他事もなく、事懇ろに仰すれば、坐中一同頭を下げ、畏まりをぞ申ける其時優陀夷坐中の者に、殘らず談じて言上するやう、「君の仰せ、坐中の者殘る方なく、御道理に存じ奉る、就きて太子の初學には、何れの者を師と定めんと、皆々評議仕りしに、夫こそ兼て聞及ぶ、鬱頭覽弗は世間の事に、通達せし博學の法師なれば、此方へ太子を參らすべしと、僉議を詰め候ひしが、此義は如何に候やと、伺へば又帝は、默頭かせ給ひつゝ、「左あらば其の鬱頭覽を師として、太子修業の其間は、綾錦に纏ふ身を、謙遜らせて粗服を着し、九夏三伏の暑さ寒さ、寒風素雪の厭ひなく、夙より起きて勤學し、夜は燈臺の下に夜を更し、身を輕々と致さねば、天下萬民の司と成りても、民の辛苦を辨へず、世を治むる事難かるべし、優陀夷は

是等の事どもを、能々太子に云聞かせ、急ぎ院の許へ移すべし、夫とてもまだ、代に勤めぬ内なれば、成り丈け忍びやかに伴ふべしと、殘る方なき御指圖に從ひ、優陀夷は月景殿へ赴き、轎曇彌の方へも、帝の綸言云々と申上げ、太子にも改めて此旨を、御聞きに入れしに、太子殊の外欣び喜ひ、「麿が願ふ處ろ、あら嬉しき父の仰せかな、人として道を知らざれば、禽獸にも如かずと聞く、返すがゝも學問はゞ、世に難有き物はあらじ、疾く其の鬱頭覽弗の、院へ赴くべし、用意々々と勇ませ給ふ、夫に引替へ轎曇彌は、流石女性の馴れ〳〵し、太子の今宮中を、離れ給ふと聞くよりも、只何となくうら悲しく、心も坐ろに引止めて、名殘を惜みてお在せしに、時移りて漸やくに、御支度調ひ、供の用意も宜しとて、既に御暇乞爲し給へば、轎曇彌はいとゞしく、分れの涙はら〳〵と、落し給ふを見るよりも、太子は尙ほ幼なき御身も優しや、俄に怒かり給ふこそ、道理せめて憐れなれ、斯くて又た數多の女中も、御暇乞として、若君の御前に進みいで、御機嫌窺ひも濟む折から、早や暮れ初むる鐘の響きに、打合はす時計の數に、「いざさせ給へと、優陀夷は侍女、帝を初め夫々の者へも、御分れの御意を賜はり、夫より帝の御意に脊かず、殊に手輕き御供づれにて、宮中を目出たく立出たまひ、急ぐとすれど道芝の、露踏みくたき踏分けて、濕る裳に捗どらず、漸やく辿りつく處ろは、早や暮れ過ぎて鬱頭覽弗の、院は門の扃を閉ぢて、案内を乞へど答へ無ければ、優陀夷はほと〳〵打叩く、音の

響きて漸々に、取次の僧立出でゝ、「此の暗がりに辷ッそりと、提燈一つ携へず、院の案内訝かしく、幷も何者ぞ名乗れ〳〵と、すげも無く尋ねられ、優陀夷言葉を正しくし、「如何さま不審は尤も、身を忍びしは仔細あり、某は迦毘羅城の重役優陀夷、帝よりの勅用なり、不審を晴らして扃を明けよと、聞くよりも、「コワ一と方ならぬ帝の勅使、辭退してはと取敢へず、戸を開かんとせしを一人の僧、「ヤレ待給へ勅使と僞り、何者の訛かして、入り込まんも計り難しと、止むる聲を聞付けて、院主鬱頭覽弗立出でゝ、「何は兎もあれ勅使とあれば、等閑には爲し難し自から門を開くべしとて、忝しく迎ひ入れつゝ、先に立ちて客殿へこそ請じけれ、去程に、優陀夷は太子を勸りて、鬱頭覽に打向ひ、「勅使と申すは餘の義にあらず、尊くも是に在すは、帝の御子悉達太子におはするなりと、聞くより鬱頭覽坐を退りて、敬まい畏れ平伏するを、優陀夷聲かけ近く進ませ、「太子此度位ゐを放れて、御修業の爲め、則ち御坊を師と頼まん爲め、斯の如く故意と輕々しく、謙遜りて御來臨ありたるなれば、左ばかり禮義正しきは、反つて無禮に當るべし、扨て帝の綸言には、若君の初學びに、先づ世間の事業を、知ろし召すこそ宜しからん、御坊其心して、能く敎へ導き給へ、今より長く此院に、移し遣はし置くからは、賤山賤の子も仝前に、隔てなく修業の道を、學ばし吳れよとの御事なれば、忘れても十善天子の、御子となし心得て、勸り册き參らする事、必らず以て無用なり、左なき時は勵みも薄く、心撓み

て其道に、發達し給はねば、其趣きを弟子達の、數多の御僧へも、盡く云ひ聞かせ置かるべし去らば某は立歸り、帝へ是等の事どもを、早く言上致すべしと、立上るを押止め、鬱頭覽弗袖搔合はせて、「愚僧の身に取り難有き、帝の綸言左りながら、見申せばまだ御年も、九つ十の最愛盛り、お乳やめのとに册かれ、在せし御身を如何ぞや、御着替の衣服の、御用意もなく、其儘住み荒れたる此院に、置き參らせて若しや又た、御煩ひの事もならば、反つて愚僧が、不忠の名を取る心の苦しさ、優陀夷どの御推量あれかしと、眉を顰めて申しければ、太子は御聲浮きやかに、「イヤのう師の坊此の麼が、望みの道を覺ゆるまでは、此姿は愚か假令又た、吹雪寒けき冬なりとも、氷鋭き瀧にも打たれ、修業せんと思ふなり、今よりは土民の某と、聊も用捨なく、叱りも懲しもしたまひて、學問の道を明らかに、敎へてたべと穩なしく、手を支へ給ふ面ざしを、鬱頭覽熟々と拜しつゝ、「最とも畏き御志、左らば兎も角も此院に、止まり給ひて御修業あれ、恐れながら懇ろに、敎へ導き奉らん、アラ貴き若君かなと、幼兒愛す優々しき言葉に優陀夷は安堵の思ひ、直ぐに太子の御機嫌を伺ひ、鬱頭覽に暇を乞ひ、數多の僧へも拜授して、迦毘羅城へぞ歸りける、實に良禽は木を選んで棲み、忠臣は主を選んで仕ふとかや、されば太子は道學勝れし、鬱頭覽を選み師とし仕へて、此院に止まり在してより、束の間も此世を去りし、母摩耶夫人の事を忘れず、心に忍ばぬ折もなく、何卒御恩を報じたしと、朝な夕

なに思召せども、浮世に無ければ詮方も、涙に暮れてあこがれ給ふ、扨て欝頭覽は太子の志、一と方ならぬ望みと覺りて、御心を計り見ん爲め、經机に二た品の、經文を並べ置き、太子を近く招ぎよせ、「如何に太子畏くも、我々を師と頼み給ひ、學問せんとの御望みに任せ、今より能く敎へ傳へん、那れなる机に、二た品の經文あり、何れなりとも望みの方を、此處へ携へ來り給へと、心を計らるゝとは努知らず、太子は机の前に赴き、二品の經文に、記せし外題を見給ふに、一つには神變妙奇集と記して二百部あり、一つは發心報謝論と記して百部あり、太子頭を傾け給ひ、夫れ外題と云ふ者は、其冊の赴きを、案じ付くる者なり、是なる二百部の方は神變奇特の品々を、書き著はす處ろならん、元より麿は世間の事業は、轉輪王の威勢をも、更に望む處ろにあらず、心に忍びあてがるゝは、母摩耶夫人の御事にて、御恩を偏へに報じたき願ひなれども如何せん、此世におはし在さねば、報すべぎ便もなく、今日まで空しく過つるが此百部の經文の、表に斯ばかり打ちたる外題、發心報謝論こそ聞かま欲し、夫よ〳〵と打首肯き、百部の方を携へて、師の坊の前に來り、「麿が志こそは此冊なり、疾〻此經の趣きを傳へ給へ、やよ是なるぞ喃々と、欝頭覽の法衣の袖に、縋りて頻りに乞ひ給へば、欝頭覽心に思ふやう、左あらんと思ひしゆへ、聊か心を計り見しに、淺ましや案に違はず、發心報謝の思召し、是ある事隱れなし、左れど優陀夷より聞きたるには、世間の事業を第一に、學ばし給へとなれば、二百部の妙奇集の方ならば、直ぐにも說きて得さすべけれど、今發心の學問は、容易く說く事能はず、とは云へども二た品の内、何れなりとも御心に、染みたる方を持給へ、我說くべしと云ひたるゆへ、夫は叶はぬ二百部の、方に今更したまへとは、云ふに云はれぬ師の一ち言、兎やせん角と思案の内、太子は頻りに促がして、「早や〳〵說きて給はれかし、如何に〳〵と縋りたる、袂を放ち給はねば、欝頭覽是非なく早速の挨拶、「成程々々御望みに任せ、其冊の趣き說くべきが、云はゞ大切の御初學、我私にも爲し難し、此趣を父帝へ、言上せし上心置きなく、說き傳へて御望みを、如何にも叶へ奉らん、先づ夫までは彼處にて、慰み戯ぶれ給へとて、一と間を出して欝頭覽は、首傾けて褥に直り、アラ淺ましの若君かな、到底も十善の御位ゐを、望み給ふ御志は、中々に思ひも寄らず、只賢仙の道發心報謝、三摩耶形の御望みあれば、最愛の御身と云つて、心は許されず、若したる時は帝を初め、宮中の嘆き上下の悲しみ、假令へん方もある可らず、思へば果敢なき思召し、去りとは云へど此由を、包み隱さず詳かに帝へ言上する時は、愈々萬民の嘆きの基ひ、只何卒して御志を、取直させ申さんと、心を苦しめ案じける、扨又太子は心の内に、師として望む經文を、說き傳へぬは如何なる故ぞと、不審は晴れねど執念く問はず、折を見合せ尋ねんと、心に納めて居給ひける、去程に太子は此院に止まりて、日を經る儘に良もすれば、出家達の寄りこぞる、中へ交はりて、只御佛の道をのみ、

深く尋ね給ふゆへ、心よからぬ法師ども、太子に向ひ申す樣「如何に太子、君は十善の位に生れても、斯く修行の道を學ぶ時は、我々は兄貴にて、一つ膳に連なる友なり、此義如何思召すと、聞いて太子は打點頭き、「扨てこそ扨てこそ、まだ九つか其處等の麿を、皆の者が深切に、勸り呉れる辱けなさ、麿十善の位ゐに即かば、格別の褒美を取らせん間、此の間も頼みし如く木像金佛は假の世の、造り物にて頼もしからず、何卒發心報謝の道、正眞の佛を拜すべき事、偏へに敎へ傳へてたべ、新參ながらも厭ひなく、假令如何なる行なりとも、勤むべきにと涙を浮め、頼ませ給ふ御心の、中こそ殊に優しけれ、其時一人の僧打點頭き、折柄幸ひ徒然に、慰み呉れんと進み寄り、「ヲ、其優しき心を愛て、後とも云はず今此處で、其處等の秘密を傳へんづ、必らず他へな洩らし給ひそ、开も正眞の御佛を、拜まんと思ふ者は、此院より北に隔ちて淫肆と云へる契情町あり、是は即ち西方の、安養淨土を表してあれば、歌舞の菩薩も來迎まし〳〵、無明の長夜は懸燈籠に、火を點じて明らけく、皆な人の信仰して、通ふ所に候と、聞きて太子は行儀を正し、「夫は誠か忝けなや、何とて斯ほどに容易き事を、欝頭覽師として敎へぬぞ、アラ恨めしのお師匠やと、嘆つ言葉を打消して、「イヤ〳〵今云ふ彼の處ろは、即ち悟りの捷徑にて、是れ佛法の奥儀なれば、うかとは師も許さぬを、我等は親しき友と思ひ、密やかに傳へるなり、必らず〳〵此事を、師の耳へ入れ給ふな、能々忍びて彼の町に、夜に入り通ひて

見給へと、あられも無い事僞れども、賢さながら御年も、まだ九つの頑是なく、太子は誠と欣びて、「左らば今宵其の處ろへ、行きたけれども路は知れず、何うぞ頼むは御僧達、案内してはたもらぬか、「イヤ我々は心ろ立惡しく、其佛達に嫌はれて、拜む事は中々叶はず、御身一人赴き給へ、其道筋は斯う〳〵と、事細やかに敎へられ、太子は愈々欣びて、日の暮るゝを待兼ねて、尚ほしどけなき姿にて、立出で給ふを引止め、「其樣にては人や咎めん、此の手拭にて面を包み、幸ひ那的なる笠を冠り、成り丈忍びて意づけ、人目に係らぬ樣にしたまへ、並々ならぬ御身と云ひ、殊に夜路の事なればと、口には情け心にて、惡を含みて冷笑ひ、角口まで送り出して、「明日は夜の明けぬ先に、歸りて來ませ夫までは、師匠の手前は我々が、宜きに計らひ置くべければ、安心してと内と外、分れてこそは行く雲の、北に其名も隱れなき、淫肆の里と聞えたる、傾城町は軒を並べ、喋めき渡る其中に、婆須密多女と云ふ傾城は、水際の立つ品ものにて、夜毎に通ふ賓客の、暇とては無かりしとかや、左れば太子は一心に、正眞の佛を拜せんと、敎へられたる路を急ぎ、彼の傾城町へ着き給ひ、心嬉しく其處此處と、眺めやれども中々に、是ぞ佛と見受くるもの、一人だに有る事無ければ、扨ては罪障深くして、麿には拜まれぬ事かいの、アラ情けなの有樣やと、袖を掩ふて泣く体を、婆須密多遠目に見兼ねて、「喃夫に渡らせ給ふ、いわけなき御出家さま、何故に悲しみ給ふぞ、若しや俄の病着にて、惱みての事共

ならば、此方へ入りて休らひ給へ、藥を參らせ侍らんにと、情けの言葉に內へ入り、「アラ辱けなや欣ばしや、如何なる人か知らねども、まだ親しみもせぬ者に、情け深かる志、其の嬉しさに絆されて、尋ね侍る事のあり、必らず〳〵叶へてたも、开も其方衆は兼て聞く、契情とやらにお在すかやと、聞かれて婆須密多女が、「如何にも傾城にて侍るなりと云ふに、太子は雀躍して、「アラ難有や尊とやな、左らば偏へに正眞の、佛菩薩と拜まれて、麿が嘆きを止めてたべと涙拂ひて賴み給へば、數多並居る契情ども、皆打笑ひ口々に、「イヤ此の幼ない御出家は、異な事云ふて興がらす、何處の者ぞ名は何んと、此處へは何しに傾城買ひに、來たのでは無いかやと、そゝるを押止め婆須密多は、「コレのう其りやまア何云はんす、何者に欺されてか、其樣な事を求め給ふぞ、淺ましき我等の懷ろには、假令夜叉鬼神は住むとも、佛の宿りは思も寄らず早々家路を志し、暇申してお歸りあれ、若し此處彼處に彷行いては、酷き目見んも計られずと押出さんとすれば氣色をかへ、「そりや何んとある何うあつても、正眞の佛は拜まれぬと、師の敎へも道理か、さらば奥までとは云ふまじ、ツイ門口からなりと、拜ましてたも傾城どのと、幼な心の一心に、足摺しつゝ賴み給へば、女どもは开も何事と、理由を知らねば怖氣だち、「ヲゝ氣味惡るやと散々に、立行く一人が袖引とめ、「コレのう賴む賴むぞを泣き叫ぶを振放され、此方の一人に又縋り、「偏へに願ひを叶へてたべと、聲を上げて泣きつくを、又突遣られ突き退

けて、一人も殘らず逃げて行く、後には何とも詮方なく、途方に暮れて泣き居る處ろへ、此の家の長走り出で、「コワ忌々しき小出家めが、何を其處に泣きくさる、此契情が買ひたくば、早く黃金を持て來よと、威赫がましく咎められ、「ヲゝ黃金さへ持つて來れば、正眞の佛が拜まれるかや、「如何にも〳〵、黃金さへ澤山持つて來れば、佛は何程も望み次第、拜まれるとも拜まれるとも、「夫こそ最と安き事、母摩耶夫人の菩提が直きに、拜まれるとは忝けなし、さらば明日の夜さりには、黃金を盜んで來る程に、必らず待つて居てたもれ、併し佛さへ拜めば、人の物盜んでも大事ないかや、「ヲゝ大事ない〳〵、夫れ偸盜戒を破つても、正眞の佛は拜みたしとある、經文をばまだ讀まずか、吳々も明日の夜さ、黃金をたんと持つて來て、契情に抱かれて寢て見よ、安養の淨土も及びないぞやと、云ひそやしても此方はまだ、幼な心に合點行かず、「イヤ傾城買ふては帶といて、抱かれて寢ねばならぬ者か、「ならぬとも爲らぬとも、傾城の懷ろは、安養淨土と云ふ事を、まだ知らぬも無理ならず、乳の香失せざるおことの年端、何は兎もあれ極樂入りは、明日の夜よあすの夜さと、手の裏返す慾張根性、口任せなる僞りも、表裏ある世渡りの、心の程ぞ淺ましき、斯くて太子は明日の夜を、只樂しみに遊廓を出で、長の道もせ一と筋に、佛を拜せん志に、闇をも厭はず只一個、欝頭覽の院へ立戻り、密かに門を忍入りて、何時もの寢間へ這入りしが、一人熟々と思ひ給ふは、扨て僧どもの敎へし如く、正眞の

佛を拜すべき、手蔓は求め得たれども、貯へたる黄金なければ、詮方も無き事なから、如何にもして手に入れて、是非一と度佛を拜し、未來の母の功德にと、心を凝し居給ひしが、良あつて意づき、ヲヽ夫よ〳〵、今朝見つる師の居間に、積み重ねし布施は則ち黄金なり、是を密に盗み出し、望みを遂んと思ひ詰め、夜の目も合はず待明かし、其明けの日も夕暮に、至るを終日待ち暮らして、黄昏頃になりしかば、時分は宜しと人々の、目を忍びつゝ諸方より、寄進の布施物賽錢を、掻き集めつゝ慾のなき、心の慾に懷ろへ、隱して又々忍び出で、彼の里さして急々と後の嘆きも白露を、踏分け行くぞ最愛らしき、」帝の仰せを蒙むりて、太子の學問如何ぞと、轎曇彌の仰せも兼ねて、太子の冊き優陀夷の女房、本夫に代るお使者の役、腰元下僕を引連れて、鬻頭覽の許へ立越へ、案内すれば取次の僧、斯くと云ひつぎ一と間へ請じ、鬻頭覽程なく面會に、互ひの一禮濟むか濟まぬに、鬻頭覽言葉を正しくし、「扨て優陀夷どの、御内室御入りこそ幸ひかな、左なくば今日此方より、參内せんと存せしなり、其義は是れ外にもあらず、帝の綸言とは申しながら、止む事を得ぬ仔細あつて、太子と師弟の契約を、只今是にて御斷はりを、申上げ奉る、帝の御前宜しき樣、賴み申すと有りければ、優陀夷の女房眉を顰め、「开は何故か知らず侍れど、思ひも寄らぬ師匠樣のお言葉、惡あがきは幼兒の習ひ、又學問に器用不器用は其者の性質と云ふ者、是等の事もあるならば、假令天子の御子たりとも、師弟と

なれば心置きなく、戒め教へ給ふをこそ、師の道と申すべきに、一旦にして無情もなき、師弟の契約を斷はるとは、近頃ながら夫りや御坊の、思召違にあらずやと、男に勝る利發の辯舌、速かに述べければ、鬻頭覽頭を打掉りて、いや〳〵和女の仰せらるゝ、處は尤も至極なれども中々左樣の義に有らず、學問とても人に勝れ、回鸞麟馬虎頭の筆勢、悉曇懸河驪龍の點、速かに流通せしゆへ、並々ならぬ御方の、心の底を試し見んとて、一つの机へ二百部の、益世論と又た百部の、誠諦論を並べ置き、太子の志しある方を、携へ給へと申しければ、太子は机の下へゆき、暫らく小首傾けて、外題を考へお在せしが、軈て百部の誠諦論を、携へて來り給ひ鷹が望みは此方なり、疾く教へてたべ、イザ說き傳へよと法衣の袖に、縋りつれど其時には、此の鬻頭覽思はずも、涙さし含みヤレ淺ましや、此若君は十善の位を、望ませ給ふ御方にあらず、偏へに發心の御兆と、推せし者から詳かに、帝を初め轎曇彌の方、諸卿わやしの末までも、嘸ぞ悲しみ嘆かれんと、思へば愚僧太子の前は、樣々に綾なして、未だ彼の百部の書は、一枚も說き傳へず、ならば二百部の世益論を傳へて、帝の御心を安んじ、御子孫繁榮の政道を、爲さしめ奉らんと思ひ、折々機嫌を伺ひて、諫め賺し參らする内、人の心は幼なきとて、油斷のならぬ習ひとて、其の兆在す太子、まだ九つか其處らの御身で、過ぎつる夜より淫肆と云へる、傾城町へ通ひ馴れ、晝は三度の、食物さへ碌に進まず、只何とな

く、懊々としてお在ますゆへ、申上げんとは思ひしが、いや〳〵理を云ひ詰めて、若しや又た幼な心の一と向に、果敢なき御覺悟も在まさば、反つて愚僧が不忠の至り、夫よりも宮中へ、恙なく戻し奉らんと、先づ夫までは何事の、お在ますとも見ぬ顔して、仂には噂なぞ致すなと堅く申聞せ置き、御心の儘に任せ置くゆへ、既に昨日の夜より院を出で、未だ御歸りも無き次第と、具さに聞いて愕き呆るゝ、優陀夷の女房耐り兼ね、思はず涙灑なして、人目も恥ぢず泣伏しける、欝頭覽も亦た心の内は、泣くより辛き苦しさを、隱して故意と餘所々々しく、「如何に御身左ばかりに、嘆き居る所にあらず、少しも早う宮中へ戻り、御身の本夫優陀夷どのに、斯くの次第を告げ知らせ、還御爲さしめ參らする、御計らひあつて然るべしと、勸められける優陀夷の女房、形ちを正し涙を拂ひ、「イヤ夫までも無い女ながら、優陀夷に代つての御使、此儘聞捨て歸られんや、太子の御歸りを待受けて、一と通りは御異見申し、若し御聞入れなき時は、此身を捨ての御諫めも、致さねば爲らぬ義理、且つ萬民の聞へも惡しかりなん、テモ恨めしの若君かな、過ぎし頃より摩耶夫人の、亡き後をのみ戀ひ焦れて、兎に角發心の、思召立是あるは孝心の道、御尤もとは思ひながらも、由なき事に紛らして、思ひ止まり在ます樣に、するも何卒十善の、御位ゐに即せ奉り、代の知ろし召を願へばこそ、今は夫より尙ほ果敢ない、お志に成り給ひしか、妾夫婦が附添ひて、是れまで守立て參らせし、其甲斐もなき御擧動、

人の誹りに帝まで、御名を下す口惜しさ辛さと、恨みつ泣きつ赤心の、餘りて喞つ言の葉も、早や入相の鐘ならで、思ひ數そふ兼言の、太子の歸りを待受けんと、欝頭覽と諜合せ、一と間を隔ち忍ばんと、したる折しも仂なき、番僧一人進み出で、「コレ優陀夷の御内寶、是を見給へ此中に、一杯有りし諸方の布施を、太子樣が一つも殘さず、淫肆へ御持參遊ばせしと、箱を叩いて叫きければ、女房は胸も張裂く計り、如何なる惡鬼が魅入りてか、箇程さもしく淺ましき御身とは爲り給ひしと、愈々益々心の内に、齒嚙みを爲して愕けど、面へ其色を顯はさず、「ヲ、可し〳〵聞屆けました、今に埒あけて進せませう、先づ夫までは密かに〳〵、コレ御僧達此の一と間に、妾が忍び居る事を、太子の戻り給ふとも、必らず知らせて給んなよと、云ひ含めつゝ、一と間の内へ、入らんとすれば押止め、「イヤ若し其處のお座敷は、則ち太子のお部屋なれば、唐紙一と重彼方の間に、立隱れてお在せかし、程なく歸らせ給はんにと、座敷の樣子案内に、任せて一と間へぞと入りて、太子の歸りを待居るこそ、女ながらも由々しけれ、」去る程に太子は一心に母摩耶夫人の後世菩提を、吊らはんとのみ思ひ込み、人の敎へを守りつゝ、淫肆の里へ通ひ馴れ、身をも振をも省みず、傾城屋の長に親しみ、只管賴み嘆きつき、一と度正眞の御佛を、拜まし奉れよと宣ひしゆへ、元より長は志の、拙きものゆへ虛に附入り、欺し賺して黃金を望めば、太子は最と安き事と、數多の布施を隱し持ちて、長が望みに任せしも、ま

だ御年のいとけなく、殊に天子の御胤なれば、黄金やら土塊やら、人の物やら我物やら、貰ふ事やら取る事やら、更に分ちは渚吹く、風に任する青柳の、みどり兒仝前に在せば、有らん限りの彼の黄金を、貪ぼられても心はつかず、「まだ金子欲しくば何程もある、持て來りて與へん程に、明日の夜さりは僞りなく、正眞の佛を、拜まし奐れよと約束して、遊廓を悄々立戻り、漸やく院の門前なる、寶塔の傍らに腰打かけ、我れと我身を熟々と、御覽あつて思はずも、「扨て此先は何うせうぞと、わつと泣入る御身の有樣、院の内には優陀夷の女房、一と間に忍びて氣は張弓、今やお歸り在ますかと、心を金鐵の如くに守り居る、内と外との悲しさ辛さ、態は變れど其元を、思へば同じ忠と孝、何れ惡かは無かりけり、

校訂　釋迦八相倭文庫第四編　終

校訂　釋迦八相倭文庫第五編叙

夫大盡の大蔽顔は惡むべし、味噌汁のみそ臭きは嫌ふべし、佛身の佛臭きは厭はねど、什麼當世の大看官は浮世につれて、堂宮詣の晴小袖も、戀が七分で劇場三分、殘る一分が纔に佛心、されば此冊子の卷々も、その緣の綱に啞と拿附、佛の香幽にして、貴意に合ふて賣るが德と更に大人佛者の誹謗を數はず、釋迦牟尼佛の尊名を汚し、未來は倘極樂へ行れで、地獄の呵責を受、またも穢土へ垂跡、ふたゝび色と酒との敵に、遇ことあらば夫も亦、予本望たらんかと怯ぬ顔にて云事しかり、

弘化四丁未年初春

萬亭應賀識

校訂

釋迦八相倭文庫第五編

江戸萬亭應賀

去程に太子は、欝頭覽弗の門前なる、寶塔へ休らひつゝ、母摩耶夫人の御菩提を、吊はんとする氣魂も疲れ、いつしか憔れし面ざしを、我れと我身で心付き、誰に語らふ人もなく、心細げに伏沈み、嘆き給ひてお在せしに、遙か彼方へ提灯の、火影の來るに打愕き、涙を袖に拭ひつゝ、良立上りて潜門の扃を最とも忍びやかに、押せば開きし身の幸ひと、欣びながらそと入りて扨て敷石は音のみして、耳にや立たんと心づき、爪立つ足に芝を踏み、密々と玄關のくゞりを開け、内を覗けば常よりも、物密やかに森々と、靜まり有るぞ折よしと、尙ほ差足にて上りつゝ、居間の座敷へ入りて見れば、早や行燈も睡れる如く、微かに燈りて寂びしきに、心細くも御安座在まし、ほつと一と息つき給ふも、尙ほ絶へやらぬは涙なり、其時太子は熟々と、獨り案じ在ます樣、我身是れまで心を碎き、母の菩提を吊はんと、件んの淫肆へ夜半毎に、通ひ行きしが明日の夜こそ正眞の佛を拜ませんと、長が約束したれども、貯へし黄金は悉く、是までに失ひ果てぬ、扨て此先は如何して、黄金を携へ行くべきやと、樣々考案したまひしが、良

あつて御心に、密かに思召す樣は、過ぎし頃僧どもの、夫となく語りけるは、此院の本尊なる左りの方に、新たに安置せられし佛は、南天笠の東に當る、南庄國の巽なる、素摩山の窟をば蓮華臺と云ふ、其蓮華臺のざわう如來の佛形を、兜利天の帝釋が、自から閻浮檀金を以て造りしを、今此の院に連綿と傳へあると聞けば、志ざすは此の金佛、人靜まりて折もよしと、佛間を指して忍び行くを、優陀夷の女房は一と間の内に、怺へ〳〵て始終の樣子を、窺ひ居るとは努知らず、太子は程なく尊像を、携へ戻り座に就きて、幼な心の只一心に、母への孝心何は兎もあれ、此佛体は金なるか、但しは土かと短刀にて、丁々々と斫りかけしに、不思議や内より金色の、光明輝き四邊眩ゆき折こそあれ、優陀夷の女房腰元を、一と間へ殘し裲襠脱ぎ捨て氣色を替へて走り出で、涙と共に太子の又、振上げ給ふ短刀の、御手をむづと捉ふれば、太子は愕き振返り、熟々と御覽じて、「ヤア其方は優陀夷の妻、何うして夜中に此院へ、參りしぞ仔細やあらん、疾云ひ聞かせよ如何にぞやと、お尋ねあるより女房は、御膝許へ寄り添ひつゝ「ヲ、御不審は御尤も、私此の院へ參りたるは、そも太子の學問修行、此程は如何在ますか、若し御我儘なぞ遊ばして、尙ほ未熟にもおはしなば、欝頭覽どの遠慮なく、嚴しく叱り敎へて よと、事々しく母君より、仰せ越されしは表面上、誠は馴れも習ひ給はぬ、君の起居此頃の、不順の夜寒も一と方ならず、父君の御案じと云ひ、轎曇彌の方又た私ども、其外の未々まで、

此院へ移らせられし其夜より、今頃は何う遊ばしてか、慣れぬ御身の憂さ辛さを、御案じ申して夜の目も合はず、餘りの辛さに私が、轎曇彌の方へ願ひ、帝へも此由申上げ、太子の御顔拜せんと心いそ〳〵此院へ、參りて見ればソモ什麼に、打つて替りし欝頭覽の、空怖ろしき物語り、譬へん方なき御擧動、如何なる天魔が魅入りてか、世に淺ましき戯の事、傾城町と云ふ綽名、文字に見るさへ汚らはしきに殊に尊き御身にて、夜々通ひ御年にも、似げなき賤しき傾城に、肌ふれられしが御顔容の、憔れし事はと恨み泣、言葉も涙に口籠る、太子は始終を聞き給ひ、胸を貫く劒より、思ひ苦しき其諫め、何は兎もわれ其色を、先づ宥め置き其上にて、深き思案も致さばやと、思召しつゝいたいけなる、御手にて泣くづをれし、女房が背撫でさすり、

「ノウ優陀夷の妻何事も、麿が澤山惡るい程に、過まつた勘忍しや、憎からふ許してたもと、宣はすれば女房は、はつと計りに起直り、太子を膝に抱き上げ、「エ、何を御意遊ばすぞ、貴方がお可愛いければこそ、勿体なくも兎や角と云ふても、甲斐なき振分髪の、まだ八つ九つの御年にて、此世を去られし摩耶夫人を、誠の母君と迷ひ給ひ、其の亡後を最愛に、深く吊らひ給ふをさへ、惡しき樣に呼いて、何卒發心を止め參らせ、萬上の御位に、即けんと是まで樣々に、諫め申せしに情けなや、今はしも其發心に、百倍劣りし御身の擧動、最早天下萬民の思惑是が天下の若君と、何面目に官中へ、今更御供あるべきや、是れと申すも此年頃、守り立て申

せし此乳母が、惡しき故に罪もなき、罪なき御名を汚し申せし、其落度の言譯に、自ら果てにしと世上の者に、云はせん爲めに今此處にて、妾は自害致すべし、假令五障三從の、戒めある女子なりとも、やわか男に劣るべき、此身は此處に朽るとも、一念の魂魄は、天子の影身に添ひ奉り、附纏ひ居る天魔破旬を、拂ひ除けて是非ともに、十善の御位に即けまさば、帝を初め轎曇彌の方、其外怪しの末々までも、國土豐かに御代長久と、欣び勇むを草葉の影から、今見るやうで嬉しけれども、此儘此處で最期を遂ては、二世の睦びの吾夫に、再び逢瀬もこれなき儘、恐れながら太子より、優陀夷へ何とぞお傳へ下さる樣、只一つの願ひは誰も知る通り、宮中に居る怜愍待は、抑も如何なる因緣にや、生れつき愚痴にして、まだ幼なしとは云ふ者の我名をさへも覺えぬ身ゆへ、心に心を付けて育て、何卒人並の者にして、太子へ忠義の美名を上げさせ、果敢なく果てし母が名も、世に美しう呼ばれなば、千部萬部の經陀羅尼、夫れにも增したる功德ぞと、是れを土產に成佛せん、臨終の願ひは是のみと、偏へに御告げ下されかし妾は最早是までなり、いでや若君お去らばと、有合ふ太子の御刀もて、死なんと肌を寬げれば太子は愕き取縋り、「ノウ女房夫りや何事、先づ止まれよコレのふと、慌て止むる有樣を、欝頭覽物影に篤と窺ひ、今や危しと走りいで、懷劒無手と取放てば、女房よりも太子は迂路々々

「ノウお師匠さま面目ない、麿こそ死なねば叶はぬ身、後懇ろに吊らひ給へと、云ひつゝ欝頭

覽が取放ちて、持てる懷劍に縋りつき、我れと我咽喉元へ、突き立てんとしまたふを、欝頭覽漸やく刄を隱し、「御心急くはお道理なれど、是まで御身の放埒も、何がな樣子あるべきなり仔細を包まず語り給へと、云へば太子は早速の挨拶、「ヲヽ麼が放埒の其仔細、語り聞かさんが最前より、心惑はれて苦しき儘、那的なる一と間にて氣を休め、軈て委しく語るべしと、一と間の內へ入り給ふ、扨又優陀夷は此夜さり、妻の歸へりの遲かるを、心許なく思いしかば、供人僅か召連れつヽ、迦毘羅城を出でヽ欝頭覽の、玄關へ來て案內を乞ひ、云々と云ひ入るれば、早くも通じて女房は、しぞけ風俗見せまじと、形ち繕ひ甲斐々々しく、腰元連れて出で迎ひ、「ヲヽ優陀夷どの宜い處へ、先づ此方へと先に立ち、以前の座敷へ伴なへば、欝頭覽も挨拶終り、「扨て太子には斯樣々々の、事に賤しき御身持と、語る辛さ聞く辛さ、優陀夷は一入呆れ果て、暫し言葉も無かりしが、良あつて、「シテ若君は何處へと、問へば女房一と間を指さし、「あれなる內にと聞くよりも、優陀夷は急き立ち取敢へず、襖開いて入らんとするを「ヤレ暫しと欝頭覽押止め、「心急くは道理なれど、是にも仔細の御座る事、此處に暫らく待給へ程なく是へ出て給ふても、甚く叱りなど仕給わで、何事も辭穩便に、此の院を還御なさしめ、御引取下さる樣、此の欝頭覽が分けての賴み、必らずお違へ下さるなと、御內儀へも談じ置きたれば、心得へてたべ優陀夷どのと念に念をば入れにける、優陀夷は聞きて打點頭き、「御

坊の仰せ至極せり、萬事心得たり左りながら、若君は何事の、お在てか餘りの暇取り、殊に又、一と間ひつそと心許なし、コレ女房、早く御樣子を伺ふて、餘り夜更けぬ其先に、御供して立歸らん、早く御樣子伺へと、指圖の下に女房は、襖の際へ立越へつヽ、「若君夫に在ますか、若君樣々々々と、呼べど答への無は不思議と、夫婦諸ろ共間の襖を、打開き見ればコワ什麼に太子は影だに見え給はず、彼處此方の隅々を、見廻はす側に捨てられし扇開きてありけるを、雪洞翳して能く見れば、最とも優しき仮名文字にて、書き記したる筆の跡、優陀夷取上げ讀み見れば、「人に欺され正眞の、佛を拜せんと一と筋に、淫肆の里へ通ひ馴れ、肌身は汚し申さねど、尊き公の御名をよごし、最早や宮中、へ歸るべき身にはあらず、殊に報加賽錢を盜み取り、其上佛体に刄をかはし、是れ皆な母への孝とは云へど、何んの因果で淺果敢に、罪造りなる回向して、我ゆへ母君は尙ほ暗き、闇から闇へ迷ひ給はん、其云ひ譯に潔よく、腹切つて冥土へ赴き、母の手づから打ち叩かれ、お叱り受けても奈落の底へ、魁して母の呵責の御身替りに立たんと思へど、斬れ物は挐ぎ取られ、此處で死なれぬ身なればとて、如何で生存へ居らるべき、只父上の御前を、能く執成して呉れよかし、優陀夷夫婦』と優しくも書殘されし扇を見て、優陀夷はぎよつと心も顚動、「イヤ女房狼狽へな、コリヤ斯うしては居られぬ處、彼處の障子明放して、あるを思へば彼處より、忍び出させ給ひしに、違ひは無しと彼方を見やり、心

坐ろに急立てば、女房は又た遺物の扇、つれ〳〵と身に添へて、「樣子も知らば兎やかうと、御意見したが勿体ない、許して給はれ若君と、打臥し嘆き居る處へ、欝頭覽も樣子を聞付け走り出で、「御夫婦とも、嘆いて居るべき處ろにあらず、此の庭口の外は是れ、即ち仇し野の一と筋道、早く後より追付きて、太子の、御最期止め給へ、サア〳〵早うと急き立つれば、實にもと夫婦は身づくろひ、優陀夷は股立ち取敢へず、庭へ飛下り、「女房急げとせき立てられて裲襠を端折りもあへず、本夫に續き、いそしく外面へ出てし頃、欝頭覽内より聲をかけ、「此の暗がりに提灯を、持たずば萬づに不便ならん、と心を付くれば優陀夷は答へて、「イヤ、提灯あつては若君に、早く我々と知らるべし、殊に世間へ内々なれば、と云ひ捨て急ぐ表の方、優陀夷が供せし足輕一人、來つ〳〵、「何事の候と、云へば優陀夷は言葉急しく、「ヲ、宜い處へ來りたり、其方に申付くるは、此院に居る年長けたる番僧を、取逃さぬ樣嚴しく繩かけ、縛め置くべし、穿儀致す事數々あれば、必らず脱るな外に又、申付くるは夜明けぬ内、迦毘羅城より太子御迎ひの乘物を、密かに取寄せ置けよかし、是等の事決して外へ、洩らさぬやうに心得たるか、急げ〳〵と立分れ、夫婦連れ立ち行くと云へども、何れを當度に後追ふべき、折も折とて眞の闇、一と足先も見え分かぬに、廣き野原を何方から、尋ね初めんと心とり〳〵、女房は早や涙ぐみ、西の方より廻らんかと、云へば優陀夷は頭を掉り、「イヤ〳〵東より行くべ

しと、手を取り草を踏分けつ〳〵、急ぐにつれて女房は愕き、「ノウ怖やアレアレアレ、那方に光るは若し太子の、此世を早く去り給ひし、亡魂にてはお在さぬか、「イヤ那的は亡魂ではなし、あれこそ狐火更々に、怖いものでは決して無し、斯る折から左ばかりの、不吉三昧云はずとも、早う〳〵と誘へども、女房は流石女氣の、心遲れて立止まり、「あゝ持病の癪が差込んで、此の胸先へアレ〳〵〳〵、ノウ苦しや耐へ難や、モウ一と足も歩まれぬ、痛や〳〵と道の邊の千草の上に伏轉べば、優陀夷は言葉を荒らげて、「イヤ此處な甲斐性なしめ、若し此の暇に太子の御身へ、萬一の事あるならば二人ともに何面下げて、宮中へ又た歸るべき、何うせ死なねば成らぬ命、氣をしつかりと持つて來よと、無理と知りつゝ言葉で叱り、勸はる優陀夷より、何ぼう辛き女房は、病ひに勝たれずハイ〳〵と、返辭の内にウンと計り、反氣にそりて引いりたり、優陀夷慌てゝ大音に、呼べど答へのあらばこそ、傍に立踰へ流れの水を、手に掬びつゝ一人言、「實に此流れの水源は、雪山の寶嶺に續くと聞けば、諸佛諸菩薩力を添へ此の水に奇特を顯はし、妻の病苦を助け給へと、一念凝して口より口に含むれば、佛の利益か難有や、誠の一心通じけん、女房は目を開き、「アゝ難有や諸々の、諸菩薩が今わり〳〵と、顯はれて宜ふには、妙覺無爲の太子と雖も、數多の外道が附纏ひ、修行を妨げ或ひは又、死神と變じて禍し、諸佛守護すと云へども、御身の上尙は危し、急ぎて助け參らせよと、敎へられ

しと不思議を語れば、優陀夷は大きに力を得て、「さらば未だ、太子の御身に恙はあらじ、欣ばしや少しも早く尋ね出さん、此仇し野の内より外に、豈夫赴き給ふまじ、いざや急がん左らばとて、夫婦互ひに勵み合ひ、彼方此方と尋ねゆく、心配りぞ切なりける、去程に悉達太子は、欝頭覽の院を忍ひ出で、踏みも習はぬ荒野の内、开首よ此處よと悼はしや、最期處ろに彷行へど、流石に此世の名殘には、父君に心引かされ、安らふ隙も泣く涙、優陀夷夫婦と幾度か袖摺れ違へど情なや、此世の暗き暗闇に、夫とは知らで西へ行き、優陀夷は東に人影と、走せづけ見れば口惜しや、枯れし尾花に招かれしと、又立戻る西の方、太子は怪しき人影と、東へ忍ぶすれ合ひに、跪づく石も縁の端と、云ふ俚言さへある者を、餘りと云へば腹立ちや、五更の空の北斗さへ、光りを失ふ雨雲の、雨も落ち來る計りなる、空物凄き有様に、女房は優陀夷の袖引とめ、「コレ申し此の様に、幾度か同じ道を、彼地へ行き此方へ行き、尋ね廻るに今までも、逢はぬと云ふも不思議な事、そして折々人影の、様なる者に摺れ違ふて、坐ろ心にゾッとする、氣持の事もムんすが、那れは確に惡戯な、狐か狸でムんせう、夫に又た空合は、次第に惡うなつて來る、氣の澄まぬ事たんとあり、如何に佛のお知らせが、あるとても皆な此様に、寧を惡るい辻占ばかり、若しや太子のお身の上に、過ちはありやせまいかと、思へば最う私は、生きて居る空ムんせぬと、云ふ聲さへも曇らせて、袖に涙を押拭へば、優陀夷は急に止

めつゝ、「又た愚痴ばかり云ひ出して、何ぞれ彼ぞれ泣きたがる、左らば今度は手分けして、和女と私が右左より、巡つて尋ねる程ならば、見逃しはよもあるまじ、尚ほ夫にても逢はずんば、是非に及ばぬ兼ての覺悟、二人が命を仇し野の、空となすとも恨みはあらず、左らばと計り諸共に、西と東へ分れつゝ、心に佛の御名を唱へ、道を分けてぞ尋ねゆく、夫婦が忠義の眞實心、哀れとも切なりとも、云ふも中々愚かなり、去る程に太子は、尚ほ、此處彼處と仇し野の、露となる身を迷ひしが、とある小影に冬枯れたる芒、尾花が其中に、誰が亡き後の紀念に か、數多の石碑荒れ〳〵て、並立ちたるを御覽じて、此ぞ宜き我最期處ろと、既にお覺期在ませども、死ぬべき仕方は御存じなく、「ハテ何うしたら死なれうぞ、何うして死なうかと斯うしようかと、今更に又た屈托の、涙と共に打臥して、暫し思案に暮れけるが、良あつて上を御覽じ、「ヲヽ、死ぬるに宜き者見つけしぞ、あれなる柳の下た枝に、腰の細紐結び下げ、夫へ羅りて相果てんと、紐をとく〳〵兩手に捧げ、延び上りつ又飛びつきて、掛けんとすれば背足らず、紐は外れてかゝらねば、又々智慧を廻らし結ひ、傍らにある手頃の石を、孱弱き腕の二つ三つ、漸やくに積重ね、夫へ上れば柳の下枝に、思ふが儘に手の届けば、あな嬉しやと細紐を、結びつけて一と息つき、「今が此世の暇乞ひ、父上様轎曇彌の方、先立つ不孝を許させ給へ、又二つには優陀夷夫婦、心を盡して此年まで、育てし禮も宜う云はず、嘸ぞ、今頃

は淺ましい者ぞと、恨んで居やらうが、到底も汚れた身にしあれば、宮中へは歸られず、今此の原で死果てゝ、鳥や獸の餌食となり、身の罪障を滅すべし、方々去らば南無阿彌佛、南無阿彌陀佛と、云ひさまに、飛ばんとしたる其折柄、右左より來る人音に、見つけられじと立たる儘、息を殺して居給ふ處へ、優陀夷と女房は廻り合ひ、黑白なき闇に透し見て、「和女や女房か、「ヲヽ優陀夷どのかいの、是程までに尋ねても、見え給はぬ太子はもう、賴みの綱も切れ果てたれば、私しや覺悟を極めました、と側の石に腰打かけ、正体涙瀧なして、目も當てられぬ悼わしさ、優陀夷も共に不覺の涙、良搔拂い聲濕ませ、「如何にも〳〵、斯程に心を盡しても、巡り逢はざる上からは、兼ての覺悟に極むべし、さりながら宮中に、殘し置く悴槃待が事思ひ出せば痛はしゝ、年端も行かぬ幼な兒を、獨り寢させた其儘で、分れて果てし其後では、つぼね〳〵局々の者どもにも、親の無き子と侮られ、嫌られ疎まれ辛き身の、立行く方も無くなりし、其時には嘸ぞ酷い親と、嘆つ涙は目の前に、見る樣で乃公や夫が悲しい、太子樣の在さぬ上は、是ばつかりが氣にかゝると、子を思ひぬる親心、女房は尙ほ女氣の、最とゞ涙に搔暮れて、「アレ、其樣な悲しい事、もう語づて下さるな、私しや尙更女子ぢやもの、疾に知つても居たれどお前に云ふたら呆氣もの、悴どころの事では無いと、叱られ樣かと思ふたゆへ、獨り心でくよ〳〵と、泣いて計かり居りました、ほんに浮世の俚言に、持つべき者は子と云へど、今の此身

は生中に、一人の悴がある故に、冥土の障と成りますと、語る折柄鬱頭覽の、院の時鐘明け六つを、告れば女は氣を焦ち、「何時まで悔みても甲斐なき事、二人の最期を今此處でと、覺悟の言葉を優陀夷は押止め、「イヤ初めより今までも、偖老の契りは致せしが、此にて二人が相果ては、世間の者の口の端に、戲ら事の情死などゝ、云觸らされんが口惜しい、「イヱ〳〵私しや二世の緣、死なば一緒と心の內に、堅く誓ひし事あれば、人は何とも云はゞ云へ、何うでも來世は同じ蓮と、死後を語らふ折しもあれ、一番烏鳴き渡れば、優陀夷は空を見上げつゝ、最早や夜明けに程あるまじ、日の出を告ぐる烏鳴き、吉事に近き今の辻占、何んと女房アレ聞いたか、と云ふ間も鳴きゆく烏の聲、女房も氣を取直し、「ヲヽ爾うでムんすと、云ひつゝ空を見上ぐる機會、石の臺座に立給ふ、太子を見つけまだ暗きに、夫とは知らず優陀夷に向ひ、「コレ此に石の地藏の、辱なくも立たせ給ふ、聞き及ぶ地藏菩薩は小供を守る佛とある、太子の御命恙なく、未だ此世に在まさば、其現在を守らせ給へ、若し早や此世を去り給はゞ、後世を偏へに助け給へ、南無地藏菩薩、薩陲の誓ひを現はし給へと、心に深く念じつゝ、「コレ優陀夷どのも拜み給へと、勸められて形ちを正し、夫婦諸ろ共手を合はせ、涙と共に唱ふるやう、「南無衆生正念必得往生、知るべし本性重ければ、正念するもの皆生ると、太子へ向ひて南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、ヽヽヽヽヽヽ、と深くも誓ひをかけらるゝを、太子は始終聞くより

も、優陀夷夫婦か懷かしや、我を助くる誓願を、我へ向つて賴むとは、何ぼう知らぬ事ながら餘りに果敢ない冥路の迷ひ、寧そ名乘つて出たらば、二人が命も助からん、ヤレ情けない懷かしい、優陀夷夫婦太子ぞと、云はんとせしがア、いや〳〵、斯く淺ましき身の罪障、覺悟しながら今更に、名乘るは愚かの至なり、愛着心に引かれては、後世は成佛ならぬと聞く、此處ぞ大事の處なりと。口の內にて今生の、暇乞を宣ふ程に、流石に深き恩愛を、とむる苦しさ胸先へ、刄の如くに突き來る涙を、呑込み〳〵顫ふ身を、顫はせもせず耐へ忍び、目を閉ぢ給へば微かにも、夫婦が姿は見えねども、情けなや生憎に、太子々々と打嘆く、其聲耳に入る物から聞くに耐へ兼ね止め兼ね、耐へ〳〵て御涙閉ぢたる眸に堰きとめ難く、思はずはら〳〵と、溢れ散り、優陀夷夫婦の顏へかゝれば、女房は打愕き、「アヽ疎ましや今となり、雨が落ちて來たそうな、大降のせぬ其先に、最う一と度念晴しに、巡つて見ようぢやムんせぬかと、顏にかゝりし涙の雨を、夫とは知らず袖で拭く、優陀夷も己が涙の雨の、乾かぬ顏へ汐先か、太子の涙はつたりと、又た降りかゝる一粒は、千尋の海にも優さるべき、太子の思ひ方々の、顏に晴れ間は無かりけり。斯りし程に夫婦の者は、雨の大降せぬ內にと、目の前なるを見殺しに、後の哀れも知らぬが佛、打連れ急ぐ二人の後を、太子は見送り〳〵て、「アヽ我ながら愚かの嘆き、いざや最期と兩手を合せ、願以至功德平等施一切、發菩提心往生安樂國、南無阿彌陀佛、

と、句をつぎ以前の紐にかゝり、石を後ろへ蹴返しながら、ひらりと飛べば悼はしや、僅に九才を一期として、此世の息は絕へにけり、」曇りては、夜明けも遲くまだ暗らきに、鐘を力に打鳴らし、墓塲々々を回向する、寒念佛の僧しと〳〵と、口に稱名途絕なく、此の處ろへ來かゝりしが、不圖傍らを透し見て、「ハテ朝な〳〵廻れども、いつしか此處に見慣れざる、あの佛の立姿、見落すやうな未熟な修行、愚なり〳〵、どれ〳〵回向致さんと、側へ立寄り熟々見て、「ヤア是りや佛ぢやない、幼な兒の縊死ぢや、後世のみ助くるが出家の役か、現在は尙ほ下の事助けて、見んと石へ乘り、細紐解きて抱き下ろし、身內を探ればまだ溫か、コワ幸ひと大音にて、「幼な兒よ喃々、喃々々と幾度か、呼び生け〳〵抱き屈めて、口に吹き込む此世の風、太子はふつと生返り、御目を開き四邊を見て、「アヽ情けなや、又も此世に返りしかと、宣ふ內に優陀夷夫婦は、幼な兒〳〵と、呼ぶ高聲を遙に聞付け、若しや夫かと慌たゞしく、夫婦諸共馳せ來り、と見れば出家の抱きたる、小兒は正しく太子なり、「ヤレ嬉しや忝なや、御身恙なく在ませしかと、女房早くも抱き取り、悲しみ涙忽ちに、嬉し涙と降り替る、優陀夷は件んの修行者に、有りし樣子を打聞きて、「コワ忝けなき御坊の情け、御名は何と宣ふぞと、問ふに出家の答ふるやう、「イヤ、我等は家を捨て身を捨てゝ、只雲水に任する修行者、名乘るに及ばず、人を助くるは出家の役、身寄の者なら幸ひぞ、勸り給へと云ひ捨て、恩にも着せず其

が儘に、笠を取上げ鐘打鳴らし、見返りもせず分れ行く、後を優陀夷は見送りて、「如何にも尊き僧の有樣、名をさへ云はぬ美くしさ、イヤのふ女房、此處は先刻に腰かけた、地藏菩薩の前なれぞ、地藏は更に見え給はず、扨は太子と見違へしか、如何に闇がりなればとて、爾うとは知らで白々と、後世を賴みし愚かさよ、其折なぞて御名をば、名乘り夫婦が千辛萬苦を、休めては賜はらざりしと、勸りながら恨み嘆てば、太子も今更思ひに耐へ兼ね、「ノウ夫婦の者其恨みは、誠に尤も左りながら、忍び隱れて死なうとしたも、深き願ひある故ぞ、もう何んにも云ふて呉れな、麿が過まると宣ふにぞ、夫婦はハッと恐入り、「コワ勿体なや餘りの事に、思はずお恨み申しました、サア〳〵、還御在ませ、と夫婦は是より慰め申し、御世嗣にする下心女房は早速の口調子に、浮かれて唄ふ子守唄、優陀夷が囃す雨こん〳〵も拍子拔けたる可笑しさに、皆々笑ひに紛れつゝ、昨夜の難義に引かへて、荒野の路も苦にならず、既に其夜も白々と、明け渡りたる山かづら、空は迷ひの雲晴れて、日輪東に輝けば、夫婦は御壽命長久と、欣びの眉開きてぞ、太子に冊き麝頭覽の、院へと道を急ぎける、去る程に、麝頭覽の院にては、優陀夷が殘せし彼の足輕、一人の番僧へ繩をかけ、堅く絏め繫ぎ置き、且つ太子御迎ひの、乘物の用意も調へぞ、優陀夷の歸り遲かるは、如何にも心許なしと、不審は晴れず立ちつ居つ、野面眺めて待詫びける、折柄以前の庭口より、太子密かに御還御の、樣子を窺ひ漸やくに、心

落つき扣ゆる足輕、尙ほ繩付を守り居る、良あつて女房は、姿を改め太子に冊き、端近く立出れば、本夫優陀夷は威儀正しく、先に立ちつゝ玄關の、障子さらりと押開き、凜々しく立出で大音に、「ヤア〳〵、誰かある、兼て申付け置きし、繩付きの僧是へ引けと、言葉鋭く呼立つれば、はつと答へて足輕ども、彼の繩付を取圍ひ、太子出御の玄關前に、最とも嚴しく引据へたり、其時優陀夷惡僧を、はつたと睨付け荒らかに、「汝番僧承はれ、過ぎつる頃悉達太子の、此院に移らせ給ひしより、斛飯王の一子提婆達多、先つ頃小弓の勝負に、打負けたるを無念に思ひ、遺恨を報はん其爲めに、己れを犬に入れ置きて、あるに有らぬ惡事を勸め、太子の學問を妨げて、大切なる千金の、御身を能くも汚させしぞ、抑も淨飯王は、斛飯王の兄君にして、辱けなくも今萬乘の、御位に備はり給ふ、君の御子悉達太子と提婆とは、則ち從弟同士の續き是等の事も辨へながら、是れまでの汝が不始末、我れ忍び目付を以て、詳かに之を知る、最早や隱しても隱されまじ、直ぐ素直に巧みし惡事を、白狀して刄を受けよ、とても許さぬ己れが命、去りながら此院の、佛の場にて果てるとは、惡人には似ず冥加な奴めと、刀すらりと拔放ち、其面先へ突付けつゝ、「さア此刀にて引導せん、疾く白狀せよ、覺悟は如何と突付られても、繩付きの僧は、太々しく冷笑ひ、「ヲ、聞き及ぶ優陀夷とやらか、斯く露顯に及ぶ上は、何をか包まん我こそは、汝達も兼てや知らん、摩偈國の北山に接む、法性妙顯と云ふ者にて、

十六魔界百種の外道、速疾鬼を、手下として、あらゆる魔術を行ひて、天變不思議を働く身なれば、假令へ百筋千筋の繩目に、かゝればとて悸みはせねど、事顯はれぬ今までは、太子を首尾よく往生させ、此の處を逃れ去り、提婆が許へ立越へて、愈々太子は小氣味よし、我と我身を果たすやう、死なしたりと云ひ誇らんと、思ひしにアラ腹立たしや殘念や、命冥加な悉達太子再び見るこそ口惜しけれと、彼方の太子を睨め付くれば、優陀夷は怺へず刀を振上げ、首打落さんとする處を、太子は聲かけ押止め、靜々と立出で給ひ、「イヤ是れ優陀夷其の怒りは、如何にも尤も左りながら、院の場にて人を苦め、三佛場を汚さん事、麿が心に適はねば、先々此場は助けてよと、云ひつゝ側へ立寄りて、自から繩を解き給ふ、仁心の程こそ難有けれ、優陀夷は驚き太子に向ひ、「コワ難有き君の御慈悲、左りながら是等の如き、大惡人を殺せばとて聊か以て罪ならず、反つて多くの人を助くる、大善根になり申さん、左なくば天下千萬の、人を惱まし募りては、遂には此世を己がまに〳〵、魔界と爲さんも計り難かり、助け置くべき奴にあらず、許させ給へと云ひ敢へず、又振上ぐる手を押へ、太子は惡僧に打向ひ、「此の後佶と謹みて、惡事を思ひ止まるべしと、尙ほ樣々に敎へ諭し、又優陀夷にも言葉を盡して、其心を宥め給ひ、遂に繩解き放ち給へば、優陀夷も今は詮方なく、暫し側へに扣へたり、其時惡僧忽ちに大地をも踏拔く計りに、躍上りて優陀夷に向ひ、「ヤア小賢しき及三昧、思ひ知らさん

是れ見よと、空へ向ひて印を結び、口に秘文を唱ふれば、俄に震動夥しく、此處彼處に黑雲の渦まき下る其中にあらゆる、惡魔鬼神、外道の眷族異形の者、夥しく顯はれ出で、太子を初め優陀夷等を、挫がんと近寄るを、優陀夷は臆せず立向ふ、腰元數多の供人は、恐れて皆々屈み居る、中にも流石は優陀夷の女房、褄搔上げて甲斐々々しく、太子を抱き院の內へ、入れんとしたる其程に、優陀夷が拔きたる獅子王の名劍に、惡魔外道は恐れを爲し、法性妙顯を雲に乘せ、摩偈國の北山さして引退く、劍の威德こそ尊けれ、時に優陀夷は齒嚙みをなし、「アラ口惜しや惡魔ども、太子の深き惠みに絆され、取逃せしか殘念なり、思へば憎き提婆ども、此上ともに片時も、油斷のならぬは太子の御身、先づ兎も角も此院を、還御爲さし奉らんと、夫々の者を呼び集ふるに、以前の騷ぎに氣後れして、皆々隱れ居たりしが、優陀夷は髻頭覽に逢ひて、懇ろに一禮を述べ、太子を御乘物に移し、還御爲さしめ奉らんと、申上げしに何故か、太子は兎角の答へなく、御顏襟に差入れ給ひ、嘆き給へる御裝ひ、女房は不審の眉を顰め、御膝元へ進み寄りて、「是はしたり若君さま、またお怒かり遊ばすか、少しも早う還御まし〳〵、父君へ御對面、殊にお嬉しい筈なるに、お悲しいとは聞へませぬと、柔らに諫め奉れば、太子は泣顏押隱し見せじとすれば、尙ほ縋るゝ、涙を拂はせ給ひつゝ、「イヤ喃女房何云やるぞ、父君へお目にかゝるは嬉しけれども、此院へ移りて學問は得遂ず、由なき人に欺し賺され、あ

られも無い事仕出して、不義放埒の名を求め、報加賽錢を盗み出し、或ひは佛像を及にかけ、旁以て面目なき、生甲斐もなき此身にて、父君は云ふまでもなく、數多の殿上殿下の者へ、今更顏を合はせん事の、最と恥かしく疎ましさ、夫が悲しく覺ゆると、又た御顏を差入れて、打泣給ふを女房は、實にお道理とは思ひながら、左あらぬ体にて又云ふやう、「是れは又た異な事をお悔み遊ばすわどけなさ、夫等の事も御心から、求め給いし惡戯ならねば、僞りし人の罪とこそなれ、聊かも君の御身に、係りし事には侍らず、假令神佛の尊像を、汚し給ひしとても又た、知ろし召さぬ事は是非もなし、殊に幼ない御身なれば、神佛も許し給ふなり、此を能く聞分け給ひて、御心安く思召せ、ア、譯もなや若君さま、疾々還御遊ばせと、非を理に立つる方便も、時に取りては善の綱、漸く賺し拵へて、御乘物へ移し參らせ、夫々の者附き隨ひ、列を亂さず御供して、鬱頭覽の院を還御あれば、女房は鬱頭覽へ、始終の挨拶述べ終り、太子の後より身繕ひして、腰元下僕を引連れつゝ、歸る途中も兎や角と、太子の事を心にかけ、片時忘れぬ眞心より宮中の御首尾も、我眞先へ立歸り、帝の御前執成さんと、召連れたる下僕の者に、近道を案内させ、太子よりも先立たんと、迦毘羅城指して急ぎける、

校訂　釋迦八相倭文庫第五編　終

校訂　釋迦八相倭文庫第六編序

却說も天上の淨居佛は、悉達太子愽樂に愛着して、諸佛の本願を忘失せん乎と疑ひ、或は病者、或は死者と貌を變じ、一二回來りてこれを試すに、物に擬へ事に摸て、修行の翁と二役兼、摩訶那摩國王の愛女を、馬將軍の孃に苟且の、仮の浮世の假名章も、思ひの外に行はるれば、氣は張弓の鳴滸がましくも、看官の的を狙ひ、予が戯意も已に六編、先にこれまでは通し矢の、當る今春此板の、御評判を冀のみ、

弘化四年初春

萬亭應賀誌

校訂

釋迦八相倭文庫第六編

江戸萬亭應賀

去る程に悉達太子の御乘物を、迦毘羅城へと急がする、其の道邊に一人の修行者、露の命の音も細き、鐘打鳴らし來かゝるを、お先を拂ふ徒武士、目に角立てゝ仂なく、「やア見苦るしい非人坊、這は忝けなくも帝の若君、麟頭覽弗より還御のお先、片寄らぬかと罵りながら、肩胝強く突き退けられ、年波寄せし翁が足下、早や逡めて轉けまろぶを、ソレ打拂へとお後より、下僕一人走り來て、長柄の元にて刎ね飛ばすを、太子は乘物より御覽じて、聲をかけ給ひ駕籠下させ、慌たゞしくも立出で給へば、優陀夷を初めお供の面々、是は如何にと止むるを、耳にもかけず走り寄り、下僕を彼方へ叱りのけ、伏轉びつゝ惱み居る、翁の手を取り助け起し、塵打拂ひ勦りて、「のふ翁許してたべ、下僕は畜類に異ならねば、老いたるを敬まふ事、父母の如くの教へを知らず、如何に優陀夷承はれ、君十善の位を有つも、國土豐かに萬民の、榮へを守る爲ぞかし、然るを無情なき今の擧動、麿は何ぼう心苦し、其方も翁を勦らずやと、實に難有き御言葉に、優陀夷は服して甲斐々々しく、側へ立寄り勦はれば、翁は惱める色を隱し、襟搔い繕

ひ形ちを改め、太子のお顏熟々見て、「コワ不思議面妖な、和郎は正しく此の曉、仇し野にて我助けたる、幼な兒よなと云ふ言葉に、優陀夷は愕き翁に向ひ、「扨は先に逢ふた修行者どの、盡きぬ緣に邂逅ひ、深き恩をば仇で報ひし、知らぬ事とて下人が慮外、偏へに〳〵許されよ、何は兎もあれ此處は途中、先づ迦毘羅城へ伴ふべし、いざ〳〵と勸むれば、翁は頭を打掉りて、「イヤ夫には及ばぬ事、餘りに優しき此の兒の、志しに愛で今此で、我身の上を明かすべし、夫れ南海國の都をば、孱那羅城と申すなり、此の都の主孱摩加天の一子、孱紹太子と云ふは我れにて、其の初め十五歲の時、とうじやう國の艮なる、縣山と云ふ山にて、ほうろ菩薩摩訶般若を說き給ふ、其聽問を望むにより、或る時宮中を忍び出で、法座に連する程もなく、其菩薩惜い哉、早く涅槃に入り給ひ、半偈を聞いて半偈を聞かず、此儘宮中に歸りなば、十善萬乘の君と冊かれ、漸やくにして聞き得たる、般若の奇特も空しくせば、後生如何と思ひしかば、菩薩へ報恩二つには、此身の修行と住慣れし、都を餘所に振捨てゝ、あらゆる國々を遍歷せしを今將た思ひ數ふれば、七十年に餘りし今日、不思議と情けある若宮に、廻り逢ひしこそ嬉しけれ、アラ豐かなる宮の粧ひや、アゝ夫とても賴まれぬ、老少不定の習ひとて、萬事は夢の浮世なる、若宮さらばと立上る、太子は翁が物語り、御身に忍びおはします、願ひの道に其儘なれば、今は人目も憚らず、行かんとする袖に取縋り、「アラ尊の翁やのふ、麿も兼々最と深く、志

しぬる事あれば、何處までも連れゆきて、般若の道一字たりとも、敎へ學ばしたび給へ、左なくば此は放たじと、坐ろ泣きして縋りつき、他事なく見ゆるを優陀夷は押止め、「這は淺ましの御心や、愈々以て發心の、御望みをば中々に、思ひ止まらせ給はぬよな、さればとて父上の、豈見捨て給ふべきや、イザお乘物に召し給へと、心に涙目に角立て、翁を隔て退くれば、翁もさるもの優陀夷の心を、夫と察して去り氣なく、呵々と打笑ひ、袖振切つて行かんとするを、太子は甚く引止め、「喃情けなや見捨て給ふか、是非々々伴ひたび給へと、割なく見ゆるを荒けなく、故意と振切り押やりて、翁は急ぎ分れゆく、太子は何と詮方も、泣々只茫然と、立たせ給ふを優陀夷初め、附々諫め奉り、早くも御乘物へ移し參らせ、迦毘羅城へと還御あるは、如何にも辛き御光景なり、去程に太子は、宮中へ歸御在まして、玉の床に即き給ふと云へど、翁が言葉を聞きしより、尙更發心の志强く、如何にしても彼の道に、入らんと心に撓みなく、思召せども深く謹み、只御心に染まぬ浮世の、塵に是非なく交らい給ふ、されば是を世に傳へて如來の九歲、出家十一解脫とは申しぬ、扨又た優陀夷は轎曇彌の方の、前へ密かに進み出で、太子鬱頭覽の院にての御擧動、殊に提婆が謀叛にて、外道の怪しき事の樣々、夫よりお歸りの途中なる、彼の修行者の翁が有樣、物細やかに申上ぐれば、轎曇彌は深く愕き、又は大ひに悲み給ひ、「いやとよ優陀夷あの太子は、愈々發心の御志、止まり給はぬに極つたり、さればとて

此儘に、聞き流して打捨て置かば、其方は勿論自らの落度、如何なる御咎めを蒙らんも知れず、父君今宵渡らせ給はゞ、夫等の有樣詳らかに、御物語り申上ん、先づ夫れまで附々の、者へも包み隱すべしとて、優陀夷には先づお暇賜はり、夜のおとゞの御身仕舞も、何となく物靜如なる、折しも彼方賑はしく、人目の關は越ゆるとも、いかで許さん戀の關、目に正月は味もなしと、女中も唄へば男も唄ふ、奥と表の界なる、口の鈴の音高々と、帝のお入と知らすれば、皆々裲襠搔い取りつゝ、女中達の御出迎ひ、夜のお居間へ移し奉りて、夫々に御機嫌伺ひ相濟めば、優陀夷の女房指圖して、皆お暇を給れば、數多の女中はいつよりも、早いお引けと笑顏を造り、頭を掉つて詰所々々、部屋々々とぞ下りゆく、斯くて轎曇彌の御方は、帝の御機嫌の折を窺ひ、御膝近く進み寄り、「只今申上ぐるは外ならず、太子の御身の上斯樣々々と、先に優陀夷が申せし如く、事細やかに告げ奉れば、帝は甚く御心を痛め、暫し涙に暮れ給ひしが、良あつて宣ふ樣、「さ有りし事今嘆いて返らず、兎も角も今度の仔細は、麿は知らぬ振にして、和女と優陀夷談合して、佶と諫め諭すべし、扨て其の後は麿が思ふ、計らひ方もあるなればと、物柔らかなる仰せを受け、轎曇彌は嘆きの中にも、嬉しき君の御言葉と、少しは心落つきつ、其夜は紅閨に夢を結び、其明くる日に轎曇彌は、帝の仰せを其儘に、優陀夷を召して物語れば、優陀夷は何となく太子をば、轎曇彌の居間へ誘ひ、四邊の人々を遠ざけしに、太子は早くも夫と覺

れど、只何となくお在するを、轎曇彌は莞爾やかに、「ヲヽ、何時とても麗はしき、太子の御裝ひやのふ、父君を初めみづからが、欣び此上や侍るべき、夫につき些と尋ねたいは、此程人の取沙汰に、太子は發心報謝の道、三摩耶經の御望み、深く在ますと云ふ世の噂と、聞くより太子は微笑みつゝ、尙ほ其色を隱さんと、「是れは〳〵母上の思ひも寄らぬ御尋ね、然らば誠を告げ侍らん、今は何をか包むべき、麽醫頭覽の院へ移りてより、獨り寐の肌寒く、身をも世も顧みず、淫肆の花里へ通ひ馴れ、味な事の數々に、人の誹も儘にして、遂に鬱頭覽の布施報加、賽錢までも運び盡し、夫のみならず閻浮檀金の、佛身に及をかけし事、優陀夷の妻も知る處ろ、ア、勿体なや恐ろしや、此外に發心とやらは、如何なる事か覺えなしと、最と恥かしげに宣へば、轎曇彌は顏打振り、「イヤ其事も聞き侍り、左あらば又此程、醫頭覽より還御の途中、見る影もない修行者の、僞り事を申せしに、太子は深く信じ給ひ、直ぐに其儘、發心の師とも、賴まん計りの御擧動、是れは如何なる御事ぞ、若し左樣の事もあるならば、自らは如何せん、若君お在ませばこそ、帝の御惠みも深く、殊に御代繁榮と、萬民の欣び是に過ぎず、其の目出たさに引替へて、愈々發心の、御望みあらば是非もなや、自らも假令へ如何なる野山の末、虎狼野干の棲家までも、太子に從ひ參らんと、思へば思へ思はるゝ、後の此身の辛さより、今の心の悲しきを、果敢なき花の露ほども、察し給へと搔き口說き、袂を顏に押當てゝ、消入る計

りに泣き給へば、傍聞きする優陀夷も共に、貰ひ泣して扣ゆれば、太子も流石遣る瀨なく、方々の心を休めんと、「是は由なきお怒かり、夫れ發心發謝とは、道と知慧と慈悲心にて、一つ缺ても叶ひ難し、抑も道とは心の沙汰なり、知慧とは思慮分別、慈悲とは人に從ひて、心を破らぬを申すなり、麽醫頭覽よりの歸るさ、道の邊りに來かゝりし、年波寄せし修行者を、下官ぞもが仂なく、打ち惱ますを見るに忍びず、老いたるを敬ふ事、父母の如しと聞くからに、乘物より立出でゝ、翁の心を宥めしに、翁は何ばう恨めしげに、我も或る國の太子にて、多くの臣下に侍れしが、羽とやら兀とやら云ふ、惡しき事を好みしかば、遂に國を追出されて、斯る拙なき身と零落れ、此所等の國まで彷徨ひ來りと、云ひつゝ道を避けて行かんとせし故、自ら翁の袖引とめ、其の羽とやら兀とやら云ふ、御身の好き給ふ事を、ちと聞かま欲しと尋ねければ、此の翁は好きの道を、人には包むか得ぬ云はで、只打笑ひつゝ行過ぎぬ、是等の事も優陀夷ならで知る者なし、其の羽とやら兀とやら云ふは、位も國も失ふ程の、惡しき者なれば、此悉達は更々以て羨みなし、アラ恐ろしの羽兀や、崑崙の山は崩るゝとも、麽が心は空しくせじ若もや惡き事あらば、優陀夷は佶と麽を諫めよ、必らず父君や母上に、密かに申す事勿れと、御心の底を押包み、只片言に宣ふを、夫とは知らず轎曇彌、又も涙を押拭ひ、「喃許してたべ若君、左ほど優しき御心を、恨み申せし恥かしさよ、知慧なき者に知慧つけて、反つて不覺を取

りしよな、般若を羽と思ひ給ひ、半偈を兀と思召す、いとあどけなき幼な心に、何事の在すべき、優陀夷も心安く思はれよ、如何に誰かある來やれよと、呼ばれて出で來る女中達、癒て太子に冊きて、優陀夷も共に御居間を、出てゞ歸らせ給ひける、既に日も早や暮近き、折から雪の降りいで、、俄に積もる白妙の、御庭の那方にて、十一二の女子の聲、「ちとお願ひ申ますと云ふ聲さへも降りしきる、吹雪の風に揉まれつゝ、細りて微かに聞こゆるを、お側に居合はす命婦が聞付け、氣味惡ろげに耳を澄まして、窺へば是れ正しく、乙女の聲に違はねば、樣子を見んと庭に出で、手笠に雪を凌ぎつゝ、折戸を細目に開けて見れば、まだ十ばかりの幼き娘、最と憐れなる姿にて、雪に埋もれて畏まり、命婦を見るよりハッと手を突き、戰く聲の細やかにと、「お願ひ申上げます、私は過ぎし年、千乘國の善覺大臣の御娘、轎曇彌の方の御附人にて、月景殿へ參りたる、馬將軍の娘に侍り、遠々の所を只一個、尋ねて參りましたれば、お取次を」と云ひさしつゝ、彼は涙に聲嗄れて、哀れとも不憫とも、譬へん方なき有樣を、見るより命婦は胸塞がり、勵はりたくは思へども、苟且ならぬ譯なれば、心強くも餘所々々しく、先づ其仔細を知らせんと、浮む涙を呑込みて、「成る程其馬將軍は、轎曇彌の御方の、お附にて有りければ、如何なる所存ありけるにや、過ぎし頃此方を立去り、今では大惡無道なる、提婆達多に仕ふると聞けば、和女に罪は無けれども、仇の手に付く者の娘、片時なりとも置く事ならず、疾

々出で行くがよいと、枝折戸はたと立切れば、娘は耐へ兼ね打臥して、わッと計りに泣入れば、轎曇彌は端近く、出て命婦に仔細を聞き、「扨も不憫や幼な兒なれば、幷も如何程の事のあるべき、恐れながら帝へ忍び、事の樣子を聞きたければ、密かに此方へ呼入れよと、聞いて命婦は心嬉しく、再び出て折戸を明け、娘を見ればコワ什麼に、雪に埋もれ、正体なく、手足も冷へて絶々なる、息の玉の緒力草、命婦は漸やく抱起し、肌に添へつゝ温め鳥、欄干の下へ連來り、一と方ならぬ介抱に、娘は漸々顏を上げ、四邊を見廻し驚きて、涙ながらに兩手をつき、轎曇彌を見て打守れば、轎曇彌も又た娘の顏、熟々と御覽あるに、遠路の旅に憔れても、如何にも氣高き爪はづれ、仝じ浮世にありながら、太子や姫と拜められ、又此樣に淺ましく、居所にさへ迷ふ子の、あるは如何なる因果ぞや、親の心が誠なら、生先長き幼な兒の、路次に彷行ふも知らざるか、馬將軍は鬼畜ぞと、親を憎みて子を憐れみ、思はず袖を濡らし給へば、命婦も共に貰ひ泣して、暫し言葉も無かりしが、轎曇彌は思案を極め、仇の血統と知りながら、生中不憫を加へては、後の分れも辛からんと、言葉を優しく乙女に向ひ、「喃娘嘸ぞや嘸ぞ、無情ない者と恨まふが、何うも此處へは置く事ならぬ、氣も落つかば支度して、身寄の方へ行くがよいぞや、シテ此品は僅ながら、サア和女に遣るのでは無い、此へ捨るゆへ拾ふて戻りやと、菓子果物鼻紙何か取交せて、帛紗に包みて下さるゝを、コワ難有しとも云ひ兼ぬる、幼な心に只

平伏し、涙拭ふて身繕ふを、見る目悲しさ彌増して、命婦は轎曇彌に手をつかへ、「此上に一つのお願ひ、どうぞ此子を一と夜は、此欄干の下へなりと、寢さして遣りたう存じますと、云ふを押止め轎曇彌、「如何に命婦、自らも女子ぢやもの、此の大雪殊に夜に入り、何の無情なく歸されう、止めたうて〳〵、成らぬ心は山々なれど、其處を怺へてすげもなく、歸さにや爲らぬ理由ある娘、追ひやる此の身の心の内、ま何の樣であらうぞい、推量しやと云いさして、涙に暮るれば娘は聞分け、「喃奥樣勿体ない、大恩受けし父樣の、お主を捨てしお憎しみ、夫に引替へ難有いお惠み、假令父さまは敵にもあれ、私は此御恩、いつまでも忘れねば、どうぞ父さまの罪科も、見逃してたべ給へ、コレ此樣に手を合せ、お詫を申上ますと、涙の霰はら〳〵はつと、平伏す怜悧しさ轎曇彌、命婦も今は耐り兼ね、共に涙の顔掩ひ、「又た其んな優しい悲しい、哀れな事云ふて泣かすかや、顔に似ぬ子の可愛ゆさに、後日如何なる事もあれ、是が見捨て歸さりよか、と云ひつゝ命婦に打向ひ、「今宵は兎も角欄下の、下に寢させやりたしと、轎曇彌の御言葉を、聞きもあへず鹿野女は云ふ樣、「後日のお叱りも怖ければ、私は是から參じますと、とぼ〳〵として出で行きけり、斯くて其夜も過ぎぬれど、轎曇彌は馬將軍の、娘の行來を尙ほ案じ、心も更に榮やらず、命婦を召して仰せらるゝは、「何んと命婦昨日の娘、雪踏分けて、今頃は何處に居やるであらふのう、「アレ又貴下樣思し出して、其樣な事御意遊ばし、涙を

お浮め遊ばすか、モウ淨然と思ひ切り、とは申す者のアレがまアと、後は涙に口籠れば、轎曇彌目を屢打き、「ソレ和女が最う泣くではないか、私しや悲しくも何ともない、思へば憎い仇の子と、袖を翳せば命婦が又、「ソレ貴婦もおむづかる、「ナニ和女が、「イヱ貴女がと相互ひに、涙を爭ふ障子の外、お庭掃除の下僕が聲にて、「これに見慣れぬ藁づとの、取落してと聞くよりも命婦は愕き立出見て、是こそ昨日娘が忘れし、品とは流石云ひ兼ねて、餘所に紛らし受取りつゝ、轎曇彌にかくと告げ、果敢ない思案も女の習ひ、命婦は藁づと携へて、お庭口から迂〳〵と、若しや其處らに迷ふても、居るか〳〵と行く向ふより、見慣れぬ足輕逸散に、「御注進々々と、馳け來るに命婦は愕き、立歸らんとするを呼止め、「優陀夷大臣へ直々に、申上たき一大事あり、急いで御取次下されよと、物忙たゞしく云ふを聞き、命婦は何かわ知らねども、先づ此方へと先に立つ、御庭口へ扣へさせ、急ぎ内へ入りて斯くと告ぐれば、優陀夷は軈て欄干に立出で、「何事かわ知らねども、一大事とあれば是へ〳〵と、招ぎに從ひ、「ハット答へて、走り入りて蹲き、「私事はお家の足輕、過ぎし頃仰せを受け、姿を瘦し提婆の方へ、太子へ仇する手段の程を、見透さんと忍入り、心がけたる折こそあれ、昨日の夜深と思ふ頃、邪智佞奸の馬將軍、悉達太子の御首を、打取りしとて提婆の館へ、提げ來る、其無念、骨髓に徹し、己れ馬將軍太子の仇、逃さじと味方を集め、狙ひ付けしに天命逃れず、今朝早くも捉へしゆへ、直ぐ樣

首を打落し、太子の鬱憤を晴らすべし、とは思ひしが待て暫し、並々ならぬ仇なれば、迦毘羅城へ引て歸り、太子の御家臣上下を分たず、一と刀づゝ切り責み、與に天を戴かじと、是へ連來り候と、述ぶるに優陀夷は不審晴れず、夢見し心地に言葉もなく、小首傾け居る處ろへ、白髪まじりの馬將軍に、繩をかけて引立てゝ、御庭先へ引据へければ、優陀夷は樣子を正さんと「這は珍らしや馬將軍、淨飯王の御扶持を食みながら、横道者の提婆に與し、能くも太子の有ること無い事、内通ひろぎし而已ならず、太子の御首打取りしと、披露ありしと忍びが注進、仔細ぞあらん夫れ聞きたし、サヽ語られよと責め問へば、老に這入れど馬將軍、聊か後れし氣色もなく、欄干見上げて優陀老に向ひ、「最早大望成就の上は、馬將軍が本心を、只今夫にて物語らん、暫らく縛めを許されよと、云ふに優陀夷は打首肯き、「其繩解けと指圖の下、捕手の者は四方を堅め、縛め解けば馬將軍、靜々上り挫乎と座し、「如何に久しや優陀夷どの、不慮の面會珍重々々、扨て某が大恩受けし、此の宮中を去りし一と通り、物語らん能く聞かれよ、我に一人の老母あり、過去し頃此母を、提婆方にて奪ひ取り、我に味方に付くか付かぬか、返答如何と度々の催促、否と云へば母の命、切り呵むと退引させず、よし左らば此方は又た、末に至りて高恩を、報ずる時節ありもせん、先づ大切なる母の命を、助けん者と思案を定め、表面ばかりの忠臣顔にて、提婆に與しありける内、提婆も白漢一つの功に、悉達太子の御首を、打

285358

取らば、日頃の願ひ、母の縛め許さんづ、左なくば命も今宵限り、如何々々と無体の難題、是非なく館を立出ても、空しく歸れば母の命、是を救ふは太子の御首、右も左りも恩の山、一と足行きては一歩戻り、一と足戻りて一と足行き、暫らく道に立止まり、思案に盡きて一心に、神佛の名を唱へつゝ、腹切らんとする傍らより、十一二なる幼な兒が、雪に惱みし袖打振り、提婆さまのお館は、どちらの方と問ふ顔を、熟々見れば其氣高さ、是ぞ正しく親を助け、君を助くる天よりの、授け物ぞと不憫ながら、拔手も見せず首打落し、其儘館へ引返し、提婆の前へ携へて、淨飯王の一子なる、悉達太子の首打ちたり、篤と御檢分下されよと、似ても似つかぬ其首も、忠と孝との二つ筋繩で、提婆の五体を搦めたれば、不思議や眼眩みけん、太子の御首と見定めしか、馬將軍出來したり、褒美には母を返す、勝手に連れて早や歸れと、聞く間遲しと老母を勦はり、兼て願ひの夕陽山へ、姿も比丘に出家させ、本望遂げし上からは、有りて甲斐なき老の命、召捕らすとも此方から、名乘つて出でゝ首差延べ、不義不忠の名を雪がんと、思ふに甲斐なき繩にかゝり、云譯のない其證據は、是れ見給へと云ひも終らず、差副拔いて襟寛げ、左りの肋へ突立てるを、優陀夷は支へる隙もなく、死なしたりと後悔の、折柄さきより物影に、立聞き給ふ轎曇彌、命婦も共に轉びいで、右左りより取縋り、「ノウ早まりし馬將軍、最前よりの物語りに、恨みは晴れてある者を、何ゆへの切腹と、泣き口説かれて馬將軍、苦し

き顔を振上げて、「コワ勿体ない姫君のお言葉、假令へ朝敵の云ひ譯立つとも、過ぎし頃御妹、摩耶夫人の懷胎を、調伏せしも我計らひ、二人の行者の成り行を、思ひ出すも實怖ろしく、大切の太子を恨みし罪、殊には一旦發心ならすも、提婆の扶持を食みたれば、是にも恩の義理立たず、只此上のお慈悲には、我本國へ殘し置く、娘と妻を召寄せられ、御惠み下されかし、是のみ黄泉の障りなりと、妻子を思ふ涙の雨、轎曇彌は怺く兼ぬ、「如何に將軍其娘の、顔をば見覺えて居やるかや、「されば某が娘と申すは、未だ懷胎なりける内、此の宮中へ參りたれば、其面ざしは知らねども、名をば鹿野女と呼ばれつゝ、年は十二になり侍り、何とぞ是を我代りに、行末長く召仕はれ、お目かけられて給はれと、割符の合ひたる昨日の娘、僞りもなき其子にて、太子樣のお身代りは、必らず是に極まつたりと、思へば不憫彌增して、命婦は涙に暮れながら、「コレ其娘御は昨日此處へ、父御を尋ねて來たわいなと、聞くより將軍目を見開き、「ヤア我娘が此處へどうして、「サア一人迦と尋ねて來て、父上に逢はせてたべと、いたいけに云ふてあれど、今其の父御は惡人の、提婆が方へ加擔して、此御殿には居給はず、殊に此方と提婆とは、仇同士の中なれば、女子と云ふても此方へは、片時も置く事ならぬと、つれなく云ふて歸せしが、扨ては昨夜途中にて、首打たれしはお前の娘と、云ひつゝ眸押拭へば、馬將軍は身を振はし、「ヤ、そんなら朝夜首打つたは、我娘にてなりけるか、世にも因果が斯くばかり、廻り合はせて子は親を、戀ひしと尋ね來る道で、親に殺され親は又た、知らで最愛しい子を思ひ此で死ぬるも外ならず、我子を賴まん爲ばかり、然るに斯くまで齟齬ひ、誓ひに誓ひし神佛の、賴みの綱も切れ果つれば、今は早や是までなり、少しも早く世を去らんと、恨み嘆てば轎曇彌命婦も諸ろ共に、泣き萎れている處ろへ、忘れ置きたる藁苞を、緣に引かれて昨日の娘、怖々折戸を入り來れば、組子の者ども見咎めて、追出さんとする聲に、命婦は見付け走りいで、見れば紛はぬ昨日の娘、能くこそ來れと抱き抱へ、轎曇彌の前へ連れ行けば、轎曇彌篤と見て、「ヲ、嬉しや〳〵、昨夜首打たれたは、此の子では無いそうな、和女の父御はあれ邪處にと、聞くより娘は手負ひに縋り、「ノウ父さまでムんすか、お懷かしやと泣き沈む、血統の聲に引かされて、今を限りの馬將軍、漸うに顔を上げ、篤と見詰めて打愕き、「やゝ其方は昨夜道にて、首打つた幼な兒ぢやないか、「イエ〳〵、私しは鹿野女でムりますわいな、お前がほんの父さまなら、どうぞ物云ふて下されと、云へど不審は晴れやらず、「シテ和女昨日の夜さは、「ハイ昨日此御殿を戻つてから、父上に早う逢いたさに、提婆さまのお館へ、漸う辿り行く道で、餘んまり夜が更けたゆへ、地藏樣のお堂の内で、夜を明かさんと寢たところと、云ひつゝ父の顔打守り、「ヲ、夫れ〳〵、お前に能う似た伯父さんに、首打たるゝと怖い夢、見は見たれども恙なく夫れから夜明けて見れば、大事の藁苞取落し、是が無ければ父さまに、廻り逢ふても名乘る

事が出來ぬゆへ又た此まで、夫を尋ねに參りましたと、事細かに物語るを、馬將軍熟々聞きて「ハテ首を打ちしも地藏の前、娘が寢たるは堂の內、是ぞ正しく佛の力に、太子を助け母を助け、娘を助け、我を助くる御身代りかと云ふを聞き、皆々一度に顏見合はせ、尊み敬ふ地藏の誓ひ、今の世までも明らけく、身代りの尊躰とて、迦毘羅城と伊娑那國の、其の間ひの道の邊に、立たせ給ふぞ難有き、手負ひは娘を引寄せつゝ、「鹿野女であつたか懷かしや、母は何處におはするぞ、汝一人來はせまい、何處に〳〵と尋ねられ、娘は何んと答さへ、泣く目を漸々搔き拂ひ、「のふ母樣は此內にと、命婦が渡せし藁苞を、差出したる不思議の言葉に、「ナニ母が此の內にと、押あけ見れば錦の袋、中より位牌を取出し、「そんなら母は沒つたか、「さアさア、親子二人の侘住居に、朝夕の事も乏しく、夫に婆さまが提婆の方へ、捉はれさんしたと聞くよりも、母さまの病ひ起り、お藥とても儘ならず、日に增し重る枕の側、私しは御遺言に、若しも此身が亡くならば、守り袋に納め置く、和女の臍の緒並びに又、系圖の書物一つにして、大切に肌にそへ、迦毘羅城の父上を、尋ねて父子の名乘りをせよ、必らず母の亡い後で、惡あがきして父母の、名を汚なすと御敎訓、其お言葉の內よりも、愈々弱りて程もなく、果敢なく息は絕へ給ひ、呼べど叫べど早や屆かず、是非もなく〳〵兼てより、仰せありける院へ葬むり、夫より此のお位牌と、系圖の書もの大切に、尋ねて來れば父上も、敢ない最期の此お姿、どうぞ妾も

諸共に、冥土へ行つて母さまに、逢ひたいわいのと取縋られ、馬將軍は、「實に尤も、とても因果のせゝつば際、獨り計りは殘さぬと、腹に立てたる刀にて、既に斯うよと見えけるを、轎曇彌は走り寄り、鹿野女を早く抱き取り、「血迷はれしか馬將軍、佛の助けし尊とき娘、今より妾が貰ひ受けて、追つて太子の妃に冊け、馬將軍の家名をば、萬代までも絕やすまじと、聞いて將軍臨終の欣び、「ハア難有や忝なや此上は此の世の中に、思ひ殘す事更になし、其のお言葉が將軍には、名僧智識の御經より、實に難有き御引導、方々左らば南無阿彌陀佛と、右へ引いたる彌陀の利劍に、此世の苦痛は逃れける、鹿野女は取付き聲を上げ、嘆けど返らぬ無常の風、優陀夷も共に咽びつゝ、忠心義心孝心を、感ずる涙果てしなし、斯くて轎曇彌は優陀夷に命じて、其の遺骸を厚く取置かせ、忌日々々も懇ろに吊らひ、鹿野女の慈愛も漸次に深く、養ひ給ふぞ辱けなき、扨も斯る有樣を、太子は聞し召されしより、愈々發心の志深く、摩耶夫人の亡後を二つには、彼等が菩提も捨つるに忍びず、幼なき身とて露の命は、草に宿りし如くにて、無常の風の誘ひなば、後とも更に云ひ難し、あら味氣なの我身かなと、流るゝ水に望みては、其行末を思ひやり、空行く雲を御覽じては、其行先を羨みつゝ、今宵の內にも宮中を、忍び出んと思へども、行先更に辨へねば、迚り迷はん覺束なさ、我發心の師は何處、如何なる方にお在するか、誘ひ給へ伴ひ給へと、悒々惱み泣き給ふも、人目憚る忍び音に、漸次々々にお姿も、

憔れて遂に朝夕の、御供も進ませ給はぬを、冊きの者轎曇彌へ、知らせ申せば打愕き、直ちに太子の住居へ行き、樣子を伺ひ轎曇彌、「此程は御惱み强くまし〳〵て、朝夕の供御も、進ませ給はぬ由、自らが心細さは、何に譬へん樣もなく、若し過ぎつる頃みづからが、太子を無情なく恨み申し、其の御心の晴れやらで、夫故の御惱みに、在ます事もお在さんかと、心苦しく侍るかしと、言葉優しく宣へば、太子は深き御思案なれば、「是れは又母君の、思ひに寄らぬ御仰せ、如何なる事のあればとて、母上の御言葉、何とて惱みに成り申さん、「さらば人は人を友として、語り慰む者と聞けば、數多の公達を召寄せて、舞の御會を催され、御心を晴され給へと、聞きて太子は笑を含み、「夫こそ麿が望む處ろ、さらば數多の公達へ、其沙汰致さん誰かある、優陀夷を是へ疾く呼べと、御意の趣きお附の女中、急ぎ優陀夷へ告げにける、」去程に諸卿の公達は、太子此度舞の御會を、催し給ふ召によつて、地謠、笛、鼓、太鼓、皆な、夫々に役を設け、我劣らじと華美やかに、綺羅を飾り威儀繕ひ、參内あるこそ勇ましけれ、既に其刻限に至れば、舞臺の正面には淨飯王、太子を初め奉り、月卿雲客左右に連なり、舞の曲鳴物の、妙音を見聞せらる、此有樣の賑はしさ、心言葉も盡されず、左れども太子は兎に角に、思ふ仔細のお在ませば、此舞樂にも御心移らず、其終るを待ち給ふ内、早や番組の數積もり、太子は父君へお暇乞ひあり、月景殿の御居間へ、歸らせ給ひし其後に、今日參内の公達を、殘らず是へ

召寄すべしと、仰せを蒙り光明大臣、其趣きを通達すれば、皆々太子の御前へ、引續き並み出れば、太子は今日の舞樂の役々を、殊の外御賞美ありて、扨て宣ふやう、「麿が思ふは外ならず、十人寄れば十里の物語り、十品を知ると申すに寄り、幸ひ今日は公達の、宜き參會の折なれば、思ひ〳〵の物語、心の儘に打明けて、一座の興を催されば、麿が心の喜びは、此上やあるべきと、聞きて諸卿の公達は、太子心に忍ばるゝ、深き仔細のある事を、知らねば面々に進み出で、浮世の噂取々に、物語り申すと雖も、太子の心に差當る、言葉の端も無き儘に、太子は只如何にもして、我志す道邊を、尋ね落して知らばやと、種々に御考案ありしが良あつて心に默頭き、「如何に皆々聞き給へ、凡そ四海の内に棲む、生きとし生ける物毎に、心々に友を求めて、馴れ親みて遊ぶやらん、此義如何と宣へば、上座に扣へし殿上人が、進み出て申すやう、「さん候夫につき、品々變る事のあり、先づ其概畧を一と通り、申上げ奉らん、夫れ龍は諸虫にして、諸虫に鱗毛を並べず、獅子麒麟は諸畜にして、諸畜に脚性を交へずと申す、然れども彼等は皆な、心無き者なれば、友を以て己れが心を、顯はす者に候へば、片時も友を放るゝ事能はず、又人間は格別にて、上品上性なるが故に、我心を以て友となし候へば、心の如き友を、心から親み候ゆへ、己れが心を知らんと思はゞ、先づ己れが親む友を、見つべしと申す事の候と、速に言上しければ、遙か末座に扣へたる、年若なる殿上人、前なる人と日頃よ

り、何かに付きて中惡しく、咎々しき物云ひしけるが、此時又進み出で、「只今何某が言上致せし、心の沙汰然るべからず、畜類は左もありなん、夫に非れば知る事なし、人間の事は如何なる、左樣には候はず、假令へ心に適ふ友を、友としたく思ふとも、心に適ふ友あるべからずされば友なきとて、心を友として只一個、慰むよもやわが世界に候ふべきか、無き事を誠しやかに、沙汰し給ふ人かなと、上座を睨みて苦々しく、云へば以前の人悡へ兼ね、「アラ出過ぎたる青嘴かな、貴殿の如く、心なき者に於ては力及ばず、某只今言上せしは、道ある人の比例なり、入らざる過言嗜み召されと、言葉を正して言返され、尙も悽まず威丈高に、「イヤ〳〵夫は由なき事、假令理に當ると云ふとも、證なき事は數ならず、又證ある事と云ふとも、体なき事は明かならず、サア何處如何なる處にか、心を友として只一個、棲み候もの是れあるやと、疊叩きて詰め寄するを、以前の人も又臆せず、「夫人間たる者は、皆な聞く事を語る者なり、某しも又た聞きたる事を、物語り申すべし、夫れ世間にありと有る、道たる者は數盡きず、文道筆道音聲道、技關管弦藥醫の道、琴棋書畫武藝智謀、何れが秘事の無かるべき、されども是等の品々は、善も惡しくも夫までなり、扨て此に道と云へるは、心を友とする事なり、夫れ權道妙道政道とて、三つの道を道と名づく、これ天道の明道、權道とは仙法の秘事にして、發心報謝の道と聞く、扨て政道と申すは、任官撫育の道にして、十善の介毒に、君への諫めの政、國

土安全の秘事といふ、此の三つの道を學びつゝ、心を友とする人を、大道人と世に名づけて、尊き人とは申すなり、既に此の國の天門に、一千三百餘里を隔ちて、檀特山の寶嶺より、雪山醫王摩靈山、青龍雪洞駱駝金剛臺、諸々の御法の峯に、則ち心を友として、行ひ澄まして棲み給ふ、賢道無爲の神仙達、歷々として分明なりと、承はりて候と、言葉涼しく述べければ、太子は感涙胸にこたへ、日頃より心に忍ぶは、是なる者をと思召すのみ、面へ其色を顯はさず、莞爾として宣ひけるは、「アラ尊き物語かな、何れもの言葉愚かは無く、皆面白し〳〵と、殘る方なく愛で給へど、彼の年若なる殿上人は、前後の事も辨へず、人の話の腰折りて、手持無沙汰に見えにける、其時太子は御心に、思ふ仔細のお在ませば、上座の一人を止め置き、其餘諸卿の公達は、殘らずお暇賜はりて、軈て退出したりける、斯くて太子は殘りたる、彼の一人の殿上人を、御膝近くへ進ませ給ひ、「如何に只今は心なき、若輩者の分として、仂なき言葉を吐き、殊に尊き物語の、妨げを爲しつるが、必らず心に掛けらるゝな、麿が心に含みあれば、何卒今の物語りの、後詳らかに聞かまほし、疾う聞かせてよと改まりし、仰せに彼の人打驚き、「是れは若君さまの、思ひも寄らぬ御言葉、只今の物語りは、仰せに任して取敢へず、當座の興に申せしに、尙ほ御尋ねに預りては、恐入り奉ると、卑下して云へど聞給はず、「イヤ〳〵並々ならぬ今の話、詳しく聞かん爲にこそ、數多の者を先へ歸せり、是非とも聞かんいざ〳〵と

引くに引かれぬ言葉の續き、形ちを改め、皖しつゝ、「然らば御免を蒙りて、拙きながら申上げん、扨又鬼門に相當つて、一千二百五十里を隔ち、阿郁仙、芦駄仙、伽羅阿修佛名顯臺、修羅摩訶發羅仙、是には皆な妙旨の權者達、能くも行ひ澄まして、捿み給ふとかや申し候、是等の事理も性も、体もある事ながら、只傳聞の儘なるを、御慰みに申すなり、御笑ひ草と思召し、言葉遣ひの賤しきをば、御許しあつて此儘に、早や御暇給はれかしと、申すを太子は引止め、是ぞ天より人を以て、云はしめ給ふ教へにこそ、尙ほ奥深く聞かばやと、「アラ尊とき物語、天門と巽の事、鬼門とは艮の事、シテ一千三百里を、行歩する道の末にも、尙ほ人の捿家もあるかや、「さん候五百里は、鹿野道と申して、民の竈もこれある由、扨て其先五百里は、人の通ひはありながら、寂寞として谷深く、其先三百里は、山陽道と申して、山の峯を踰るとかや、承はりて候と、聞きて太子は心の内に、飛び立つ計り喜び給ひ、如何にも天に口なくして、人の唄ふを法となし、人に心なくして、天の德を心とするとは、今こそ思ひ當りたれと、思ふ心を色には出さず、彼の殿上人を勞らひつゝ、先づ今日は是れまでなりと、御暇乞を給はりける

校訂　釋迦八相倭文庫第六編　終

校訂

釋迦八相倭文庫第七編序

昔天竺有王、而有二夫人、一夫人生千之子、次第皆當作佛、第一俱留孫佛、第二拘那含佛、第三迦葉佛、第四釋迦牛尼佛、乃至第千樓至佛也、以上千佛皆現在賢劫之佛也、又第二夫人生二子、誓曰、願以成金剛神居門外而、守護千兄出世佛法也、後人謂之門前之二王也ど、經卷に見えたれど、何れが那れ歟是非の沙汰は、天竺なれば且さしおき、日本の人情に摹擬し、五常を以す、既に此卷七編は、悉達太子の立春宮より、后をめとることまでを記す、

弘化四丁未新版

萬亭應賀述

釋迦八相倭文庫第七編

江戸　萬亭應賀　校訂

去る程に年月押移りて、悉達太子の御年も、早や十五才にならせ給ひしかば、淨飯王より春宮の、御儀式を仰せ出され、此趣き太子へは、優陀夷を以て申上げ、諸國の王達へは、御使ひを走せて、此度太子東宮に、立たせ給ふにつき、二月八日吉日なれば、御元服の御儀式是あるにより、時日を違へず、朝勤あるべしと觸れられたり、去れば程なく其當日となりければ、御親族の甘露飯王、白飯王、斛飯王を初めとして、諸國の王達月卿雲客、無位無官に至るまで、其家々の禮服に、身を飾り袖を連ねて、參内あるこそ勇ましけれ、扨て迦毘羅城の大城には、淨飯王を初めとし、其の役々の坐を設け、威儀を亂さず控ゆる折から、悉達太子は悠々と出御あり坐に就き給へば、一人の官人白玉の盤へ、四海水を溢へて、是を先づ甘露飯王へ奉り、夫より漸次々々に、諸王達へ傳へ終りて、帝自ら盤水を捧げて天地を拜し、軈て太子の頂にそゝぎ、御聲最とも高らかに、「今日悉達太子を以て東宮に立て、麿が繼嗣とす、此旨上天皇帝を初め、奉土の濱諸國の王、乃至月卿雲客に、告げ知らしむと宣ふより、殿上殿下の人々、皆一同に御

代萬歳と唱へつゝ、夫々の捧げものを、思ひ〳〵に献上あれば、帝の歡喜斜めならず、夫々に官爵を加へられて、軈て大宴を開きて、諸王諸臣を饗應あるこそ、如何にも芽出たき例なれ、去れば月景殿の奥間も、太子の御元服の御祝ひと、互ひに曠なる衣服を着飾り、行通ふ局の混雜に、お仲居お末お仂ども、三人寄れば姦しく、譬の如く寄集り、「是れのう鶴竹さん、今日の忙がしいにはとんと最う、倦み果てたでは無いかいな、「イヤ最う忙しない事は、云ふまでもない其中に、お前は先刻から見えなんだが、大方又たお口へ出て、男話も宜い加減にせぬと、嚊ましう出ますぞへ、ドレ供御のお仕懸けをと、立上るをお仂の、若梅が押止め、「ホンに其供御で思ひ出したが、あの上つ方は、毎日三度の供御を上りますかへ、「ヲヽそりや知れた事、〇〇〇〇神々は、九膳づゝ召上るのさ、「そんなら殿方は、幾膳づゝ上るのかへ、「サア夫は、ヲヽ夫れ〳〵、殿さま方は十膳の半分ゆへ、ごぜん樣と云ふでは無いか、「フウ夫では此方づれは、二膳位ゐがやつとだねへ、「まア其んな者さ、それゆゑ御二男御三男樣では、お位が無いから、おひやめし樣と云ふでは無いか、「ヲヽそれ〳〵、したが非人袖乞は、幾膳食べますのか、是には供御の位ゐがありますまい、「イヱ〳〵有るとも〳〵、お前も折々お下へおさがりの時、隨分お見であつたろが、ソレ道なかに袖乞非人が、哀れな聲で手を合はせ、どうぞや叶ひませぬ者に、一膳頂かしてと云ふでは無いか、「ほんに爾うぢや哩な、只つた一ぜんとは、誠に〳〵果

敢ない身の上、したが私しは早く勸め上げ、お禮奉公もして仕舞ひ、ソレ彼の人と夫婦になり、氣兼なしの取膳が、寧そ最う待遠いと、口も輕く氣も輕く、互ひの轉口捻り合ひ、背中を叩く氣散じは、唐も日本も天竺も、替らぬ奥の習ひぞと、思ひ遣られて最と可笑し、折柄表使ひの知らせにて、「只今太子さま月景殿へ、入らせられしと聞くよりも、俄に襷かけまくも、御献立の順違へじと、心いそ〳〵しく繰出し、御元服の御祝ひに、奥の噪めく物音は、さしも由々しく聞ゆるに、お仲居おすへ陪者まで、遙かの間より我勝に、今日の太子の御粧ひを、忍びて拜し奉るに、御顔容の麗はしさも、以前に勝りて艶々しく、そも此君に嫁し給ふは、何れの姫に在ますかと、一寸してさへ艶きたる、噂も女の常ぞかし、斯くて程なく、御祝ひも濟ませられ、轎曇彌の方の御欣びも、日に增して一と方ならねど、只お案ず存ますは、發心の御志、何卒止め參らせんと、或ひは舞樂何呉と、御心慰め奉れぞ、太子は只管書籍にのみ、心を傾けさせ給ひて、終日餘事を顧みず、是によりて百官の者、優陀夷を以て、帝へ言上申すやう、此折節太子をちと、藍毘尼苑へ御幸なさしめ、御心を慰め奉らんは、如何に候と伺ひけるに、帝も夫こそ然るべし、急ぎ支度を爲さしめよと、御許しを受けて取敢へず、優陀夷は此由告げ奉れば、太子は些とも辭み給はず、「夫こそ應が望みの遊山、嬉しやさらば民百姓の、業に妨げ是れなきやう、忍びの供にて赴くべしと、物に賢き仰せに任せ、御供僅に倶せしめて、御庭口より送り

參らせ、藍毘尼苑へ入らせ給ひぬ、扨て藍毘尼苑の境内は、折しも彌生の頃にして、今を盛りの花の香に、空さへ醉つる計りにて、四下眩く見えければ、右將軍は御腰掛を、此處ぞと思ふ花の許へ据へ、太子を饗應すに、何事のお在ましてや、附屬の者を遙に遠ざけ、只一人そよ吹く風に、散りそむる花を御覽して、無常を觀じ給ひしが、頻りに嘆息し給ひつゝ、青苔蒸したる平石へ、腰打掛けて首俯垂れ、暫し屈して居給ふ内、不思議や夢幻の如く、痩せ衰へし一個の修行者、彷彿と現はれたり、太子は不審の眉を顰め、「ヤア夫なるは何者ぞ、名乘り聞かせよと仰せあれば、行者は僅に打咳き、「イヤ某はなか〳〵に、名乘る程の者ならねど、太子へ對し只一と言、示す事あれば來りたり、夫れ富めるも貧しきも、尊きも賤しきも、假りの浮世に住むものは、斯樣に花の散る如く、旦を待たぬ有爲轉變、斯かる大難を抱きながら、此の優樂は何事ぞ、過ぎつる頃も餘所ながら、修行者の姿に打扮ち、孱那羅城の主個、孱摩迦王の一子、孱紹太子と名乘りつゝ、太子を助け參らせて菩提心を勸めたる、我こそ天上の淨居佛なり、努〳〵疑ふ事なかれと、聞こし召すより太子は愕き、「アラ難有や日頃より、心に念ずる御佛よなと、立寄らんとして見給へば、早くも姿は消失せて、又はら〳〵と葩の、散りくるのみぞ物寂しき、折から優陀夷附々の、者は太子の仰せにて、遠ざかりつゝ居たれども、時刻移れば立出でゝ、御機嫌如何と伺へども、何の答へも在まさず、茫然としてお在せしが、良わつて御心惡しきと

て、早や還幸を急がせ給ふに、優陀夷は心ならずも夫々へ、御供立を急がせつゝ、宮中へ還御ましく〳〵ける、事の有樣何となく、常ならず覺えしかば、優陀夷は御供にて歸ると軈て、淨飯王へ太子の御氣色、斯樣々々と奏しければ、父帝は御機嫌損じ、「是れ尙ほ佛心あるゆへなり、抑も何の宿緣にて、斯くまで執念く佛の道に、志の止まざるや、此度元服の祝ひより、麿が心も休らひて、何卒早く世を讓り、國土豐かに泰平を、唱へしめんと思ひしに、今更書籍にのみ心を入れ、氣を痛めたる煩ひとあれば、行末の事思はれて、何を賴みに暮らすべき、優陀夷は何と思ふぞや、力の綱も切れ果てしと、嘆ち給へば優陀夷は尙ほ、平伏の頭を擡げ兼ねて、何と答辭もせざる處へ、轎曇彌の方御入りありて、太子の御煩らひを語り給へば、帝も夫のみ御心に、懸る由を仰せありて、重ねて又た宣ふやう、「今も今とて優陀夷へ云聞け、宜き計らひ方はあるまじきかと、其の僉議をする處へ、思ひ廻せば過し頃、彼の老翁が相したる、占方こそ不思議なれと、憂きに集る三つ鼎、物しめやかなる御簾の內、轎曇彌の方宣ふ樣、「如何に帝聞し召せ、太子最早十五才に成り給へば、美目麗はしき美女を選み、宮妃に付け參らせ、是等に伽致させて、鬱々の御心を、散せしむる御計らひは、如何侍らんと宣ふを、帝聞し召して首肯き給ひ、「如何にも〳〵草も木も春を迎へて、花咲くは天の精、太子も今年は十五才なれば、寢屋の伽もあらまほし、優陀夷は何と心得るぞと、仰せを受けて漸やくに、頭を上げて申すやう、

「さん候仰せの如く、容貌麗はしき、宮妃を備へて悒々しき、御心の結ぼれも寬ぎなば、極めて其の妃の內へ、太子の御胤を宿し、安々御誕生まし〳〵て、如何ばかりか目出たく喋めき立てなば、遂には太子の御心も、自と佛意を放れ給ひ、上下萬歲を相唱へて、案堵の時もやまり候はん、あら欣ばしき思召かなと、色を直して奏しければ、帝も共に喜び給ひ、「さらは太子へ此趣きを告げ、諸國の王の愛女の內より、容貌宜しきを、數多僉議致さすべし、扨て是れに付ては城南に、新內裏を造進せよ、云ふまでも無けれども、此の新宮の裝ひは、先づ東の間は、春をかたどつて、花を彩色に鏤め、南の床は夏をかたどり、野邊の淺茅生民の仕業、西の殿は秋を表して、洞庭の月の曇りなく、千草の花の莚を眺め、北の造りは冬に擬へて、雪の景色其外諸向も磨き立て、太子を祝ひ參らすべしと、殘る方なき御指圖に、優陀夷は厚き思召を、逐一に伺ひ終り、直ちに番匠工みの長に、繪圖を詳らかに引立てさせ、念に念を入れつゝも、夜を日についで、新宮造營を急がしける、扨又た太子は過ぎし頃、藍毘尼苑より歸らせ給ひて、御枕重く思召すは、我れ斯く十善の若宮と冊かれ、浮世の塵に交はる事、餘りと云へば嘆かはし玉の臺に錦の褥、殆と〳〵汚らはしや忌はしや、今宵なりとも宮中を、逃れ出んか立去らんか、アラ淺ましの我身かなと、忍び音に鳴く鈴虫の、雨夜に焦るゝ如くなる、折柄優陀夷は御機嫌を、拜せんとて靜々と、御褥近くへ進みいで、「我君如何在ますやと、伺ひ申せば莞爾やか

に、太子は枕を上げさせ給ひ、「ヲヽ優陀夷か懷しゝ、麿が病ふに父君も、嘸ぞや本意なく思すらん、左りながら是とても、生なる者の習ひぞかし、若し此上に如何なるとも、父上母君の御前をば、優陀夷能々諫めよかし、アラ果敢なの麿が病着やと、云ひつゝ悼つがはしげに、又も枕につき給へば、優陀夷は尙も進み寄り、「是は若君の仰せとも覺えず、父上母君初めとし、百官百司の輩の、碎く心を何ゆへに、愛愍納受在ますで、斯く餘所々々しく遇し給ふ、思召の程こそ疑がはしけれ、御望みの義も有るならば、箇樣に親しみ參らする、我々なれば明々地に、語らせ給へ聞かまほしと、嘆てば太子は起直り、聊か形ちを改め給ひ、「如何に優陀夷麿が身に、よそへ隱し忍ぶ事、露ほども無けれども、若もや人の讒言にて、餘所の見る目に疑ひあらば、夫こそ麿は聞かまほし、いざ聞かせてよ物語れ、何せ今日までも告げざりし、反つて優陀夷に恨みの言葉、聞きて優陀夷は少しも臆せず、此處ぞ御爲思ふ存分、申上げんと胸を据へ、「アラ空々しき御言葉、如何ほど御心に隱さるゝとも、其肺肝を鏡にかけて、疾く見極め奉りしぞや、そも君の御心は、飽くまでも發心の道に、思入り凝らせ給ふ、去るからに過ぎつる頃、舞ひの御會の其時にも、一人の公達の並々ならぬ、悟りの道に御心を、止めさせ給ふ事までも、疾く知りたれば其公達は、最早や御目通りを止めたり、如何にも淺ましき御擧動、先年相者の見し如く、十善の御位に、若しや即かせ給はぬ時は、父君の御血統も絶へ、慈悲大賢王より連

綿と、三十八代の、釋種の天下も覺束なく、大小の朝臣の、其悲みは如何ばかりぞや、是に依つて願はくは、御先祖を敬ひ臣下を憫み、發心の御志を、偏へに止まらせ給はれと、眸重たく述べければ、太子も今は道理に服し、御涙に暮れ給ひしが、良あつて宣ふ樣、「如何にも汝が言葉聞屆けたり、是までは麿が心に、天魔が魅りて不孝たりしが、今より心改めて、十善の位を嗣がん、ノウ優陀夷、重ねて變ずる事勿れと、御一念の晴れさせ給ひし、御言葉を聞くよりも、優陀夷は蘇生たる心地して、「アラ難有や夫でこそ、御代繁榮の基なれ、されば此度帝より、太子の徒然御伽の爲め、容貌麗はしき妃を冊けよとの、宣示あり、依りて諸國の王達へ、此趣きを觸れ流せり、夫につき新宮造營を、取急がせ候へば、只今の御言葉、重ねて變らせ給ふなと、堅く誓ひて欣び勇み、其日は其儘退きけり

去程に太子は優陀夷の諫言にて、十善の御位を尊み、是まで御心に忍ばれし、發心報謝の道を、さらりと打捨て給ひしかば、忽ち御氣色も癒へ、常になき御機嫌の麗はしさに、帝を初め轎曇彌の方、御附人は男女とも、只火中より玉を拾ひし、心地して打欣ぶ、中にも生若き女中達は、太子此程の御裝ひに、飽くまでも愛で從ひて、何につけ彼につけて、御側に付き纏ひ戯むれけるゆへ、轎曇彌の方は、太子の年頃と云ひ殊に又、人並勝れし裝ひに、モシ亂りなる事もあらば、帝の思召且は又、國中への聞へ惡しからんと、心の内に工面あり、何卒早く新宮を、

造進せよと諸役に仰せて、萬事急がせける程に、早や新宮は成就して、近々に吉日を選び、御引移りあるべしと、仰出されたりければ、轎曇彌の方打欣び、兼てより所存ありて、養ひ置きし馬將軍の、娘鹿野女の年もはや、いざよふ月を二つ三つ、越せど心も未通心なる、姿言葉嫋やかさ、並々ならぬ褄はづれ、されば命婦は轎曇彌の、御言葉を其儘に、鹿野女へ通じ改めて、御側へ連れいでければ、轎曇彌の方密やかに、膝元近く召されつゝ、「今改めて此へよび、申聞かすは外ならず、其方の父へ忠義の報ひ、存生にもあらば一廉の、國王に封ずる筈なれど、敢なき最期に及びしゆへ、帝も自らも心を病め、何卒立派に其家名を、立てさせんとは思へども、男子無ければ詮方なし、依りて此度和女をば、太子の妃に冊くれば、心に心を能く用ひて、苟且にもしほたらとした、姿取なり言葉にも、悋氣がましき素振など、是れ第一の女の嗜み、必らずよや忘れなせそと、我子の如く慈む、心の誠顯はれて、幼き者に云ふ如く、細々と云ひ聞かすれば、鹿野女は只差俯頭き、流石赧らむ顔に袖、最と羞かしげに嬉しゝとも、辱けなしと也山梔子の、花もの云はぬも中々に、未通女に見えて愛らしきを、命婦は見兼ねて側へ寄り、「是れ喃鹿野女どの、嘸ぞ嬉しかろ難有かろ、早うお禮を申してよと、押追られて手を支へ、「コワ冥加なや賤しき身を、左程に重くお取立、國許への聞へと云ひ、且は冥土の父母も、嘸ぞや嘸ぞ草葉の影にて、御情けの程如何ばかりか、難有がり侍るべし、此上ながら幾重にも、

お惠み厚く御教訓の程、願ひ奉りますと、事閑雅に述べ終れば、命婦は再び附添ひて、嚮て御前を退き下れば、早くも此沙汰夫々に、達せられしかば内外の者、扨ては鹿野女は今日より、太子の妃に備はりしと、俄に敬まい遇しつゝ、針妙たもんも數多く、附け添へられて華美なる、奥の局を其儘に、常の居間に下されしより、鹿野女は只管難有く、是れ皆な轎曇彌の御惠みと、深く欣び數多の女中へ、身を謙遜りて驕らぬ、訪ひ音づれに皆々も、斯程に優しき心立てなればこそ、鹿野女さま思ひも寄らぬ玉の輿、あやかり者仕合せものと、寄るも觸るも目引き袖曳き、羨ましげに叫きける、扨又轎曇彌の方は太子へも、鹿野女の事云々と仰せあり、一と方ならぬ妃ゆへ、御不憫を加へられて、親み給はゞ自らが、心を添て育てし甲斐も顯はれて、父馬將軍の菩提の爲めにも、惡しからまじと諫め申せば、太子も又た最と、羞かしげに差俯頭き、僅に點頭きたまひたる、折柄優陀夷の女房立出でゝ、「はや夕供御の御支度、調ひしと申上ぐれば、母君へ太子は暇乞ひありて、御居間へ歸らせ給ふに、折しも夏の夕暮方、數多の女中も涼やかなる、肌薄衣の染模樣、中形小紋かすり縞、皆な當世の色綾を、思ひ〳〵に着飾りて、我劣らじと並居る中にも、濃き紅ひは奥殿の、園生に植へて隱れなき、鹿野女の方の粧ひは、鬢の毛筋も綠なす、蟬の羽重ね艶やかに、花の簪取揃へ、白く妙なる額の富士に、かゝる霞か薄雲の、振袖翳す擧動は、水際立ちて華麗やかなる、太子は御褥につき給ひ、嚮て御涼みの御宴

初まり、數多の者へも御盞を下され、歌舞の曲さへ催ほされて、殊更興にのり給ひ、其夜よりして御寢所に、鹿野女の御伽を愛で給ひて、艶めく樣に聞えたり、されば新宮も殘る方なく、造營成就せし由にて、既に御移轉の、吉日となりければ、太子のお附は殘りなく、早や〳〵新宮へ引移り、其日の御祝ひ取々に、持て囃す其中へ、新規に召抱へられたる、多くの美女の其中にて、釋種の親屬執杖が娘、年は二八の眉若き、瞿陀彌女の麗はしきに、太子の御目止まりしゆへ、是も妃に備はりぬ、殘りの者も夫々に、お附の役を賜はりて、宮仕へしけるゆへ、夜のをとゞの酒の莚も、其の華美さは中々に、言葉も及ばぬ事とかや、是等の有樣月景殿にて、帝優陀夷より聞こし召し、然らば愈々太子には、發心の志の根も、きつぱりと切れ侍れば、軈て兩人の妃の内へ、若君誕生もあらんとて、欣び給ふ其の處に、右梵士太郎次の間より、「今淨飯大王へ、奏しまつるは餘の義にあらず、某過ぎし頃よりして、太子の御妃僉義として、普ねく諸國を、尋ね巡り候處ろ、迦夷衛國の國王の姫に、耶輸陀羅女と云へる美人の候が、容貌は彼の深宮に、凡そ美人多しと雖も、是に勝る者はなく、是れならで太子の御心に、適ひ參らす可き者の、よも外に有るべからず、此趣き優陀夷大臣より、帝へ宜しく御取次ぎ、御披露賴み奉ると、云ふを優陀夷は聞きあへず、則ち御前へ手を支へ、右梵士が言葉云々と、奏せば帝聞し召し、「然らば夫を入内させん、さりながら先も國王の事なれば、苟且の事にもなるまじ、此

使者こそ優陀夷ならで、外に勤むる者はなし、急いで迦夷衛國へ聘物を携へ、耶輸陀羅女と婚義の事を、取結び來るべしと、仰せあるを側聞せし、右梵士太郎進み出で、「恐れながら大王へ、直き〳〵に申上げん、私し迦夷衛國王とは、親しき中に候ゆへ、則ち太子の御有樣を、包み隱さず述べければ、はや彼方にては御臺までも、太子の御仁德を委しく知りて、何卒小國とて見落し給はず、悉達君と我姫の、婚義を取結び下さらば、近國への聞へ家の譽れ、偏に賴むは右梵士どのと、彼方の言葉を幸ひに、左らば近々兎も角も、悉達太子さま野遊山に事寄せ、是れへ御入りを願ひ見んと、申談じて下拙は、直樣立戻りたる仔細、斯くの如しと述べければ、帝御機嫌麗はしく、「扨ては能くこそ計りたれ、左らば日柄を相選び、太子を只何となく、迦夷衛國へ赴かせ、互ひの樣子を見せしめて、緣に任せて呼び迎へん、優陀夷宜きに計らへと、仰せて又右梵士太郎を、迦夷衛國へ赴かしめ、近日太子の御入りを、知らせらるれば彼の國にては、大王の太子の御入りとて、表て立ちたる事ならねど、見苦るしきは國の恥辱と、俄に城の内外を修覆し、間毎も綺羅美やかに、庭の景色まで造り立てさせ、太子の來駕を待ちたりける、其欣びに打替へて、伊娑那國の提婆達多は、過ぎし頃太子欝頭覽の院へ、入學せしと聞きしより、小弓の勝負に打負けたる、遺恨を晴らさんと摩偈國の、北冥山に棲む魔術の長、法性妙顯を語らひ、惡鬼外道を味方につけ、悉達太子を亡ぼさんと、腹黑く計りしが、諸神諸菩薩の守護に

よつて、太子は危き命を免がれ、恙もなく迦毘羅城へ、歸りたる後とても、馬將軍の計策にて、地藏の首を太子と見せし、是等の無念骨髓に徹し、何がな仇を報はんと、手ぐすね引いて待つ折柄、此頃頻りに諸國の内を、淨飯王より穿議して、美目形ち麗はしき娘を、選り抱ゆるとの噂にて、既に近國迦夷衛國の美人、耶輸陀羅女を、太子の妃に近々娶るとの沙汰あり、提婆聞くよりも益々怒り、如何に是を聞捨てにせん、彼奴とは從弟同士ながら、我年長の知慧を揮つて、耶輸陀羅女を横取りして、朝夕手活の花にして、太子に恥面搔かせんづと、己れに等しき惡黨を、呼び集めつゝ妨げすべき、計策をぞ廻らしける、とは知らずして迦毘羅城と、迦夷衛國とは因みを結び、或る日優陀夷の計らひにて、御供立も僅かにて、太子を乘物へ乘せ參らせ、道を運びて忍びやかに、迦夷衛國へ入り給へば、兼ての申合せにて、禮義を省き見立たぬやう、案内の者心得て、直ちに奥庭の方へと、誘ひ申せば耶輸陀羅女は、今日を曠と手を盡し、取り飾りたる裝ひは、宛然天女の來迎も、斯くあらんかと疑ふ計り、四邊眩ゆく打扮ちて、腰元乳人引從へ、靜々と出で迎へ、太子の姿を只一と目、見るよりはつと恥入たる、心の内に思ふやう、常々噂に聞きたるが、實に三十二相備はり給ひし、御面差服裝風俗の、お衣紋つきの麗はしさと、只俯頭きて言葉なく、顏赧らめてお在す程に、物慣れたる一人の乳人が、太子に會釋し姫諸ろ共、庭を見晴らす御坐敷へ、誘ひ申して堆く、酒菓を出して取並べ、おん二た方のお

心を、打解けさせ奉らんと、頻りに遇し參らすれば、太子も娘の裝ひに、深く心を寄せ給へば、姫も又た此君ならで、我が添寢する殿達は、よもあらじとて人知らず、心にむすぶの神せゝりして、お在す處へ右梵士太郎、一人の惡黨を高手小手に、縛めて勢ひ猛く、太子の御前へ引來り、「最前より那の藪影にて、怪しき鳥の鳴く聲に、心許なく立越へて、窺ひ見れば是れなる盜賊、鐵砲の火蓋を切つて、太子の方を狙ひ澄まして、居たるを手早く取押へ、斯くの如くに縛めたり、只今此處にて首打申すを、太子を初め優陀夷どのも、御見物下されよと、刀の柄に手をかくれば、優陀夷は暫しと押止め、「やア夫なる盜賊、何の仔細是れあつて、世に顯はれて仁德厚き、太子に仇なし奉るぞ、殊によつては命も助けん、有樣に樣子を語れと、情けをかけて詰寄れば、「アゝ命だにお助けあらば、何が扨て隱し申さん、私しは提婆どのに、賴まれたる忍びの者、今日悉達太子樣の、此の處ろへ來給ふにつき、打殺して立歸らば、適れの褒美取らせんと、吩咐けられし甲斐もなく、此樣に縛められて、只今首を打たれては、褒美處ろか命が無い、兎角浮世は命が物種、何卒お助け御免々々と、聞くより優陀夷は尙ほ詰寄り、「シテ又提婆は何處にあるぞ、「左れば候提婆どのは、多くの山賊を語らふて、伊娑那國の山路川筋を堅め、太子の還幸を待受けて、打取らん結構なりと、聞くより顏を見合はせて、皆々ぎよつと愕きしが、右梵士太郎立掛り、「アラ難有や此盜人こそ、則ち天の賜物なれ、サア其後を語れ〳〵、「さ

れば此外の國にも、横道抜け道までも人數を廻し、多勢を以て取り切りたれば、最早やお手薄なるおん供にては中々に、切拔けて迦毘羅城へ、還幸は叶ふまじと、聞くも身の毛の彌立つ計り、中にも迦夷衛國王は、心の工面右つ左つ、思案に暮れしが良あつて、優陀夷を小影に差招き、「われなる者の今の白狀、假初めならぬ御一大事、能く思案を廻らせしに、此の海上五十里を横ぎり、旃那羅國を廻りて還幸あらば、道は遙に遠しと雖も、提婆が計略を免がれて、太子に恙ましまさじと、思へば此館の下より、快船を申付けん、抑も此快船と申すは、軍用の貯へにて、一日の順風には、三千里を走る奇代の用船、早う〳〵と快船の、櫓舵をしめさせ用意を爲し、太子を初め耶輸陀羅女、腰元までも打乘せて、急がし立つれば優陀夷は又、右梵士太郎に打向ひ、「汝は是に止まりて、下人どもと云合はせ、太子は尙ほ此の處ろに、お在する体に假裝して、お乘物其外長柄とも、城門の外へ飾り置くべし、是れ提婆方の者どもへ、油斷をさする一つの計略、必らず共に脫りなせぞ、イザ去らば快船の、纜解くより國王は、走り寄りつゝ言葉をかけ、「返す〳〵も行屆かぬ娘、優陀夷どの其餘の方々、偏へに賴み參らする、お去らば去らばと國王の、言葉にも我子に夜の鶴、謙遜たる挨拶に、太子も厚く暇乞ひ、五十里隔つ向ふなる、山を目當に舵を取り、早や順風に帆を上ぐれば、矢を射る如くに程もなく、旃那羅國へ着きけるにぞ、甘露飯王の住國なれば、優陀夷を以て仔細を告げ、兵士三十五人請ひ受けて、

列を亂さず迦毘羅城へと、還幸まし〳〵けるとかや、」扨又た迦夷衛國にては、右梵士太郎が計らひにて、彼の繩付の盜人へ、太子の御召替へを着せ、密かに乘物へ打乘せて、是ぞ太子と見受くる樣、忝しく附き從ひて、伊娑那國の横道を、迦毘羅城へと急ぐ折から、何處よりか鏑根の、征矢一と筋飛び來つて、乘物へはつしと立つ、機會に一と聲玉ぎるは、扨も何事と右梵士太郎、乘物の内改め見て、大音に呼はるやう、やア何者の仕業なるや、勿体なくも迦毘羅城の太士、迦夷衛國へ野遊散の、還幸を此に待受け、何の報ひに射止めたるぞ、名乘つて出でよ右梵士太郎が、主に放れて打死する、死者狂ひの手並の程、此世の名殘餞別に、思ひ知らさん何者ぞ、出でよ來れと叫ぶ内、山傳ひに山賊ども、八九人走り來り、乘物目がけて立掛るを、太郎は遣らじと支へる隙に、乘物打捨て陸尺どもは、只逸散に足曳の、山踏分けて逃げ去つたる、後には右梵士只一人、山賊どもは多勢を賴みに、打つて蒐るを引違へ、突き掛けるに身を交し、飛び蒐るを拂ひ退け、元より力士の十人前、さも目覺ましく見えける内、弓矢携へ出で來る、提婆達多はしたり顏に、腮をしやくり　乘物睨み、「ヤア〳〵者ども、下人一個に目をかけずと、其乘物引ッ擔ぎ、早く城内へ急げ〳〵と、指圖の聲を聞くよりも、遣らじと焦慮る右梵士に、「どつこい爾うはと盜人ども、前後兩側より、四人一度に組付きて、組んづほぐれつ揉合ふ内、太子の乘物兩人にて、手早く擔ぎ上げつゝも、提婆が附添い逃げ行くを、太郎は故意と追ひか

けんと、するを急り合ひ押止め、遂に乘物の後見えずなるまで、取付き組付き防ぎしが、軈て山賊どもは太郎を突き退け、「此奴一人助けしとて、幷も何程の事あらん、勝手に逃げろと口には廣言、身は顫へつゝ馳せ走らんと、するを太郎は引ッ捉み、一人を眞向に差上げて、「さらばお暇仕らふと、四五間先へ頭顛動、又踏まへたる一人をば、彼方へ發矢と蹴飛しつゝ、「此奴等一人も生け歸す、奴等ならねど太子を射止めし、褒美として助けてやる、一昨日來い蛆虫めらと、打興じつゝ踏ンばたかり、心の内の可笑しさに、獨り笑して四下を見廻し、「最早や迦毘羅城の下人等も、殘りなく逃げ延びつらん、無益の事に暇とつたり、イザ此由を少しも早く、帝へ奏し奉つらんと、尻引ッ搦げ手拍手打つて、迦毘羅城へと、「してこいな

校訂　釋迦八相倭文庫第七編　終

校訂　釋迦八相倭文庫第八編序

夫れ八は物の名員にて、天に八家、星に八坐、八種の雷神あり、地に八大龍王、八間地獄、八功德水、易に八卦、人に八苦あり、是等の八の數あげて數へ難し、然れば佛祖は八正慈悲の門より出、八萬の法を說給ひ、八十歳の霜を頂きて、生天、都率天、下天、托胎、出家降魔、轉法輪、入滅の成道、八相をあらはし、說法の經文廣大なれども、法華經八卷に勝れたるを聞かず、扨この冊子の八編は、八百八町と聞えたる、大江戸の水を硯にたゝへ、八千八聲の啼く頃から八月の初めつかたまでに、稍稿なりて上梓す、

弘化五戊申正月

萬亭應賀誌

釋迦八相倭文庫第八編

江戸萬亭應賀　校訂

去程に悉達太子は、提婆が爲に迦夷衛國にて、危ふき虎狼の口を逃れ、耶輸陀羅女と、快船にて伯父甘露飯の住國、旃那羅城へ着き給ふ、此にて物具供人數多狩り求め恙なく迦毘羅城の新宮へ還幸ましましければ、優陀夷夫々の者も、案堵の思ひを語りける、程なく右梵士太郎御後より、御供人を連れ歸りたる、其次第を、優陀夷まで申上ぐれば、太子の御耳へも入り、最と愛で給ひて、又も迦夷衛國へ赴き、耶輸陀羅女と、婚縁の儀式を語らせければ、軈て吉日を撰び迦夷衛國よりは、樣々の贈りものを調へ、數多の役人を添へて、美々しく迦毘羅城へ送られけるも、近國へ聞えけるゆへ、飽まで計られし提婆達多、我手の者と太子と見違へ、生捕らせし事の腹立たしさ、其報ひには耶輸陀羅女の婚姻を道に待受け奪ひしかど、何者の知らせにや、姫は早や迦毘羅城へ、過ぎし頃行きたりと聞き、齒嚙をなして、口惜がり、愈々謀叛は止まざりき、されば迦毘羅城にては、吉日の御祝ひとて、奥殿にて耶輸陀羅女と、九献の盃取交し、千秋萬歳と、龜鶴の婚義を催されければ、淨飯王を初め轎曇彌の方も、末頼もしげに欣び

給ふ、夫に引替へ物憂きは、鹿野女瞿陀彌女の二個の姫なり、同じお伽の役ながら、耶輸陀羅女の方は、太子殊更寵愛あるゆへ、人の用ひも一と方ならずと、我幼なきを省みず、二人とも心の内に、耶輸陀羅女を嫉み嘆ち給へば、其附々の女中は、相互ひに我勤むる、主人をのみ、只大切と思ふ者から、何卒此方の姫君の方へ、御通ひあれかしと、樣々に心を碎き、鹿野女の方は、瞿陀彌女の方を憎み、又瞿陀彌女の局は、耶輸陀羅女の方を嫉み、又耶輸陀羅女の局は此方へ太子の御通ひの繁々あるを鼻にかけ、是れ見よがしと誇りけるゆへ、三女の方の附人は局多聞に至るまで、行き通ひにも肩で風切り、互ひに言葉も交さゞる事、轎曇彌の御耳に入り、コワ安からぬ事だかし、若しや互ひの身の上に、危き事もあらんかと、優陀夷の女房を召されつゝ、三女の方を御居間へ、招くべしとありければ、直ちに此趣きを、三個の姫君に申上ぐれば、コワ何事と思ひながら、互ひに衣服を着飾りて、我劣らじと時を違へず、月景殿へ赴きければ、轎曇彌の方三人の、姫を待遇し給ひつゝ良あつて仰せ出さるゝ御言葉に、「如何に姫達改めて、云ひ聞かす事外にもあらず、夫れ女は我れ人ともに、貴きも賤きも、平均て三つの油斷あり、此三つの障害は、如何ほど心に嗜みても、忍ばれぬ者にて、宜しからぬことなれば、確かに諭し參らするゆへ、三人とも心に心を、注けて能く守り給へ、扨て其三つの油斷と申すは、一に睡眠禾縷とて、心打解け仂なく睡り、二つには自慢未練とは、徒らに我身を誇り

て、人を蔑ろに見下し、三つには嫉妬の未練とて、是れは分けて宜しからず、互いに威勢を爭ひて、遂には己れが命を捨てゝも、人を咒詛ふて畏ろしき、巧みを企つれば、譬にて嫉妬なき女は、百揣を掩ふとありて、嫉妬の一念さへ無ければ、百の惡しき事をも隱すとかや、斯程に戒めたる事なれば、女は淺猿しき者にして、今姫達に諭しぬる、自身さへも一度は、辜なき者を、嫉みつ誹りつしたりしが、心づきては我身で我身を恨めしく思ひしより、大凡そ其の邪念を晴らせり、左れば和女達は心言葉も優しきに、よも夫等の淺ましき、志しは持たれまじ、なれども同じ太子へ替る〳〵、御伽を勤むれば、若しやと案じ云ひ聞かすれば、何卒三人の心を一つにして、睦まじく太子を守りなば、發心の御望みある太子も、御心を此の宮に止め給へば、上は更なり下萬民、怪しの末の者までも、國土の豐けきを、欣ぶ時も來るべけれ、若し左もなくて皆々が嫉妬深き事もあらば、太子の御胤は勿論、折々毎の御伽も、程なく愛想を盡かされて、お側をば退けられ、淺ましき者と人々に、後ろ指をさゝるべし、此に心を能くつけよ假令へ面は優しくとも、嫉妬の心ある時は、黑髮も蛇となり、ひさげの水も湯と湧かば、嗜みても尙ほ嗜みたきは、此道の戒めなり、皆な召仕ふ女どもへも、我主人の威に誇り、彼方此方の姫達を、蔑ろにする事なく、三世の緣を結ぶとも、朋輩の中睦まじく、交際ふ樣に云ひ聞かせよと、細まなる諭し言に、姫達は、犇々と胸にこたへて差俯頭き、忍び涙の外ぞなき、一と間

隔てゝ扣へたる、三人の姫の附人は、平素の心荒々しきに、恥ぢて漏れ聞く身の辛さ、暫し言葉も無き折柄、轎曇彌は三人の、姫を厚く勞らひて、身の暇を給はりければ、皆な夫々に分れを告て、軺て部屋へぞ歸りける、」されば其年も過ぎ、太子の御年、はや十六才に爲らせ給ひ、御裝ひ殊に麗はしく、お伽に冊く姫達は、何卒我れ逸先に、御胤を懷胎して、持て囃されん者と巧みつゝ、瞿陀彌女の方にては、太子のお慰みに事寄せて、數多の小禽を集めつゝ、是を欄干に並べ置き、太子の御入りを待受けて、殘らず籠の內より放てば、小鳥は嬉しげに羽揮ひしつゝ、此方彼方へ飛び廻りて、友呼びかはす是にさへ、月下氷神のお在すかや、羽色に愛でゝ追廻し、睦まじく嘴を契る、夫婦中さへ何となく、艶めく小鳥の有樣に、皆々心を空にして、計らず興に入りたるも、是れ瞿陀彌女が夫となく、心の願ひ達せんと、神に誓ひの放生會に善根をして我先に、若君懷胎せん事を、祈る心と知られける、されば又鹿野女の方は、過ぎし頃より如何にしてか、太子の御通ひ絕へけるを、悲み嘆きて此程は、甚く病ふの床に就き、只うと〳〵と身を悔ひて、玉の輿さへ味氣なく、思ひ煩ひ給ふより、お枕元へ年長けたる、局が朝夕附添ひて、藥なぞ勸めて諫むるやう、「姫君如何ましますや、此程は太子さま、暫し御通ひは遠ざかるとも、此方にさへお變りなく、赤心をもて明暮に、太子をお慕ひ遊はさば、其眞實を神佛も、必らず感納まし〳〵て、今にも太子の御通ひ、あるべきは知れてある、若し其時

はお惱みにて、姫には如何遊ばすぞ、兎角御心を取直し、浮々と遊はせば、病著平癒疑ひなく夫につき私し風情が、物知り顔に侍れども、尊き聖が云ひし事に、抑も彌陀の五佛とて、阿彌陀、觀音、勢至、地藏、龍珠を深く御信行遊ばせば、病氣平癒も疑ひなしと、兼てより聞き侍れば、此の五佛を御信心ありて、お藥を召上らせ給へと、涙含て申しければ、鹿野女も軈て枕を擡げ、浮む涙を御袖にて、搔き拂ひつゝ、宣ふ樣、「ヲヽ、宜うこそ案じてたもる、此程から和女を初め、皆の者が氣を痛め、心を盡しての看病、嘸ぞ分らぬ女子ぢやと、蔑みもあらんなれど、自らとて見る影もなき身の、斯くまで難有き出世を顧みて、苟且にも太子へ、悋氣がましき事無きやうにと、心を責むるが嵩じ〳〵て、思はざる此の煩ひ、今より和女が語りたる御佛を祈りて平癒を願はんと、宣へば局は尙ほ摺寄り、「其五佛の内にも、觀音は三十三体に分身まし〳〵たる、中にも千手に變じて、地獄道の三障を破り、正觀音と變じては、餓鬼道を救ひ馬頭と變じては、畜生道を助け、十一面と變じて、修羅道を救ひ、順貞觀音と變じては、人道を助け、如意輪と變じては、天道の三障を破り給ふ、是れを則ち六觀音と申し奉ると、事細やかに述べければ、鹿野女は聞いて點頭き給ひ、「成程々々觀音の、誓ひも誠に難有く、五佛の内何の御佛でも、誓ひは凡て尊けれど、地藏菩薩は自らの、身替りに立給ひし事もお在すれば先づ此の報恩を營み、父母の菩提をも、吊らひたきと心には、束の間も忘れやらねど、何を云

ふにも宮仕への身、只思ふたばつかりで、空に月日を過しぬる、是のみ心に掛り侍りと、嘆てば局又云ふやう、「コワ左程に思召さば、早や〳〵地藏を信心遊ばせ、此の御佛は殊更に、女子を守らせ給ふとかや、抑も地藏に、十種の福と申して、第一に女人泰產、二つには慈根具足三つには取病疾除、四つには壽命長延、五には聰明知慧、六には財寶榮愛、七には愛敬、八には米穀成熟、九には神明加護、十には大菩提を證すと申せば、此の御佛の名號を、千遍唱へて小さい紙一枚へ認め、是れを千枚認むれば、百萬遍の功德にて、則ち海や川へ流して、果敢なく果てし無緣衆生の、亡者の爲めに、施餓鬼致して遣はす時は、其の名號の功力にて、普ねく成道を遂げて、安樂國に生ずる故、此上もなき大善根、左れば其行者たれば、貴女樣の御病ひも癒へ、遂には太子の御胤宿し、御壽命長久の基、殊に承はれば太子さま、九才の御時の事かとよ、欝頭覺の院へ移らせ給ひし時、仇し野にて既に早や、御最期とも爲る處ろを、優陀夷夫婦が地藏菩薩を、一と筋に信仰せしゆへ、薩埵の誓ひに御命も恙なく、十善天子の若君と、目出たく御繁昌遊さるれば、今より其の御營み、早や〳〵思し立ち給へと、太く勸め參らすれば鹿野女は自から氣を勵まし、漸くにして起き上り、身も硯も清めつゝ、やをら机に打向ひつゝ地藏菩薩の名號を、千度唱へて一枚認め、日を重ねて思ひの儘に、既に千枚認め終り、「是にて百萬遍の功德なり、早く川へ流すべしとて、自から手箱へ詰め給ひ、お側お次を勸めぬる、

女中へ使ひを仰せ付けらる、左ればお使ひの女中達は、外珍らしく欣びつゝ、供人召連れ迦毘羅城を、急き立ち出で最寄なる、川の橋へ赴きつゝ、携へたる彼の名號を、手に〳〵取りて一と握りづゝ、亡者の爲めに施すとて、流れに向ひて投げ放てば、川風に靡き飛ぶ有樣、宛然時ならぬ雪かと計り、愛で取り囃す人もあり、又た物に慈悲ある人は、此善根を深く愛でゝ、共に佛心を起すもありけり、扨は扨置きて此に又、月景殿には轎曇彌の、徒然を慰むる、腰元どもが戯むれて、笑ひ催す折柄に、お庭に扃を叩く音、皆々は聞き耳立て、聞けば正しく男の聲音、コワ何者と女中達、四五人立ちて欄干より、庭下駄穿いて立出で見れば、儼がましき一個の雜色、白丁烏帽子をかけまくも、畏き雲井の御庭口、殊に奥向き男禁制の掟を破り來るは曲者取逃すなと各自が、早くも長刀押ッ取りて、馳せ行く威勢に件んの男、多寡が女と侮りしも怯みたりけん後退りするを、年嵩なる女中詰寄つて、「ヤア其處な曲者、逃ぐるとも逃さうか御前間近く入り來りしは、若し表御門を守る、新參の雜色にて、不案内ゆへ踏迷ひ、此處とも知らず來りしか、但し又樣子あつてか、何にもせよ返答次第阿容々々と、生けては返さぬ掟なり、イザ有樣を白狀せよと、最とも嚴しく責め問へば、流石の男もおづ〳〵と、砂に坐を組み取圍ひし、女の怒りを宥めんと、手を上げて答ふるやう、「イヤ是れ女中方、騒ぐまい噪ぐまい、我等は雜色とやら合式とやら、云ふ樣な者では無い、遙か以前の事なるが、淨飯王位に即

き、千五百人の宮女を、抱へられたる其内にて、好容夫人と呼ばるゝは、現在の我妹なれば、越方より度々逢いに來たれども、四の五の云ふて逢はせて呉れず、死んだ事やら達者やら、更に便宜も分らぬゆへ、思ひついて南門の番人に、酒飲ませ、烏帽子白丁をかりそめの、衛士に紛ふて來たからは、淨飯王に逢はぬ内は、歸らぬ歸らぬ、早く取次いで逢はせてたもれと、投げ出すやうに云ひけれど、女ども更に聞入れず、各々互ひに目注せして、追ひ退けんとする後の方、「ヤレ暫し女どもと、轎曇彌の方欅干へ、出で給ひて宣ふやう、「如何に其者此方へ近ふと、呼ばせ給ふに女中達は、打愕きつ目ひき袖曳き、手持無沙汰に見えける内、轎曇彌は件んの男を、佶と見て宣ふ樣、「そも汝は何者だと、尋ねらるゝ言葉の下、是こそ兼て聞及びし轎曇彌なるべしと、男は膝を突き直し、「我等は淨飯王の由縁の者、此まで來りしは外ならず些と頼みたき事あるゆへ、と粗忽の言葉を聞兼ねて、女中達口々に、「此な下郎の分際にて、忝けなくも十善天子の、由縁の者とは粗忽千萬、憂き目を見せんと立蒐るを、又轎曇彌支へ給ひて、「如何にも女どもの申す通り、由縁の者とは聞き捨て難し、夫なる下司先づ包み隱さず仔細を語れと宣へば、「ハテ最前も云ふ如く、好容夫人の兄なれば、遠慮せずに此處までと、云はせも果てず轎曇彌、「成程思へば過ぎつる年、千五百人の宮女をば召抱へられたる其中に好容と申すは妹摩耶の、腰元でありけるが、摩耶夫人逝去の後、青龍殿の女子どもは、上下の

差別なく、皆々紀念を賜はりて、御暇を下されたるに、好容のみ宮中に、殘り居る因由なし、辻褄合はぬ事申すと、憂き目見するぞと叱り給へば、彼の男は冷笑ひ、「ハヽア此方は、まだ何んにも知らぬのぢやな、「知らぬとは夫りや何を、「サア知らぬが佛に語り聞かすは、いかい罪になるけれど、云はねば此方の賴みを聞くまい、必らず〳〵我口から、聞いたとは云ふまいぞや、今云はれし如く摩耶夫人の、腰元を勸めたる我が妹、いつの間にやら淨飯王の情を受け、雨風たゝぬ戀の海に、夜な〳〵忍びて曳く綱の、いとゞ可愛の積もりてから、摩耶夫人逝去の後は、女中殘らずお暇出たれど、好容夫人只一個、此の月景殿の南の臺、破利舍那殿へ移し置き、割なく通ひ給ひしゆへ、此頃安々と太子を產み、難陀太子と申しつゝ、優陀夷の忰槃特を、是れに附け置かるゝ事まで、我詳かに知りたる故、妹の緣に結ばれて、淨飯王の由緣の者と云ひたるが、過まりか、是れ云ふからは莫大の褒夷　黃金取らねばならぬ、サア黃金をと手を差延べ、何の遠慮も荒男の、言葉を篤と聞給ひ、初めて曉る轎曇彌、扨はとばかり打點頭き、忽ち言葉を改めて、「如何に夫なる男、下司下郎と見侮りしは此方の粗忽、和主が願ひ、逐一に聞屆けたり、左りながら其体にては、假令帝に由緣あるとて、現はに披露も成り難ければ、先づ今日は立歸りて、此の後衣服を改めて、夫々の供をも召具し、表向き參內あれ、其時は自らが、帝へ執成し參らせて、黃金は愚か一角の、國王にも取立てん、此儀得心あるならば

少しも早く歸られよと、理の當然に籠められて、再び返す言葉もなく、左らばと答へて伴んの男は、元の道へと立歸る、後見送らせて轎曇彌、一と間の內へ入り給ひ、本意なき樣にて宣ふ樣、「今日と云ふ今日思ひ掛なき、よしない事を聞侍り、心にかゝる一と苦勞、豈夫とは思へども、過ぎし頃より帝の素振、御通ひの絕へたるは、實にもと思ひ計らるゝ、モシ去る事もあるならば、帝は隱し給ふとも、優陀夷夫婦命婦等が、密かに告げて吳れべきに、我に包みしは情けなしと、嘆ち涙に暮れ給へば、居合はす局聞き兼ねて、「其お恨みはお道理樣、手前なども去る事は、未だ夢にも聞侍らず、思へば聞えぬ帝のお心、憎いは好容夫人よと、心を汲みての執成を、聞くより轎曇彌は局に向ひ、「ソリや和女は何を云ふぞ、帝は扨置き好容をも、自らが何んで恨まうぞ、無き事にてはあるまじきを、聊か苦しからねども、斯かる事のおわすなら、疾より明し給はれば、假令太子御誕生ありても、其時々の御祝ひも、我逸先に計らひて、宜きが上にも宜き樣に、育て申すに左はなくて、深く包ませ給ふを見れば、此後とても無ぞや嘸ぞ、妾に愛想が盡き給ひ、後護き事したまふべし、兎も角も事の實否を、聞きたしと宣へば、局は尙ほも進寄り、「それこそ最と安き事、過ぎし年摩耶夫人の、供御の役を勤めし女、御逝去の後お暇いで、今では靱造りの夜叉軍士とか、云へる者の女房となり、名を吉祥と呼ばれ侍りて、女の業に小間物類を商い、此御殿は勿論の事、破利舍那殿へも赴く由、此者に密かに賴み

事の虚實を承はらんと、云へば轎曇彌、眉を顰め、「如何にも其女は、妹がまだ存生の折、一二度逢ひたる事もあり、若し近き内來たならば、此方へ密やかに呼び寄せよと、仰せを聞きて局は畏こみ、彼の吉祥が來る日を指折り數へて待つ程に、何心なく吉祥は、戀の重荷に引かへて、世帶の煙細ければ、女ながらに重荷を背負ひ、其處此處と馳け歩るき、心に染まぬ世辭追從も、世渡る業と部屋々々の、口を覗ひて殘りなく、暑さ寒さの捨て言葉に、待焦れたる彼の局は、夫と見るより呼び入れつゝ、軈て御前の首尾を伺ひ、轎曇彌の御居間へ、密かに案内せし程に、轎曇彌は吉祥を、近く召されて破利舍那殿の有樣を詳しく尋ね問ひ給ひて、又御心のありたけを、頼み聞え給ひつゝ、此の日は身の暇賜はりける、夫よりして局役に、召遣はれし件んの女中を、俄に老女格に引上げられ、斯れまで深く睦び給ひし、優陀夷夫婦命婦まで、何となく御機嫌に合はず、餘所々々しき御擧動となりける故、件んの人々、夫とは知らず、如何なる事の、お在するかと、案じ暮すも道理なり、去れば又、破利舍那殿の、好容夫人と申けるは、初めは青龍殿なる、摩耶夫人の腰元を勤めお在せしが、髮形ちから爪はづれまで、淨飯王の御意に適い、折々の御戯れ募り、漸次に御不悶彌増して、遂に此處へ移され給ひ、此程太子を設けつゝ、御名を難陀太子と呼ばれ給ひ、御年既に三才にて、殊に智慧賢く在し〳〵、帝も一入愛で給へど、如何なる事の、お在ますにや轎曇彌の方、御親族へも、御誕生の御

ひろめなく、只お伽には優陀夷の忰、槃特一人を附けられて、好容夫人の召遣ひとても、僅に附け置き給ふゆへ、乳母の心は心ならず、同じ帝の御胤にても、摩耶夫人の產み給ひし、悉達太子の御威勢は、人の敬ひ一と方ならず、現在の弟君は日影の花の如くにて、何となく乳母までが、肩身狹きは疎ましと、嘆つ中にも浮れ居る、槃特は生れつき、愚かなれども柔順しく、難陀太子に侍きて、御意に背かず從へば、太子も又た槃特あらでは、常に友とし給はず、隔てぬ中の戯むれに、太子槃特を御膝元へ召し給ひ、「コレ其方が名は何んと云ふ、聞かまほしやと御意あれば、「又しても太子さまの、もどかしい事お尋ね遊ばす、私しの名は那のものぢや「サア何んとぢやと責め給へば、顔赤らめて頭を搔き、差詰まりしを見給ふより、「又忘れたか其方が名は、槃特と云ふのぢやぞ、今度は必らず忘れまいぞや、シテ其方が父の名は、覺えて居るかサア何うぢや、「ハイ〳〵覺えて居りますとも、「ホウ何んと云ふぞ、「父樣と申ますとゝわどなき答へに、太子を初め乳母まで、笑ひ催はす高聲に、好容夫人も立出で給ひ、「の槃特幾度も、敎へたに最う忘れてか、其方が父の名は優陀夷と、聞くより槃特打首肯き、懷ろより書留帳を取出して繰開き、那方此方を讀みて見て、「成程父が名は優陀夷、私しの名は槃特、太子さまは難陀さまと、皆な書き記るして置きましたと、阿呆ながらも辛氣なる、折柄西に入りかゝる、夕日欄干に差込めば、打開きたる坐敷の内へ居合はす人の影法師、背丈も長

く疊襖へ、映るを見るより槃特は、はッと愕き立噪ぎ、「コワ化性の者の來りしと、逃ぐれば附添ふ己が影、彼方此方へ走れども、尙ほ附纏ふに敵はじと、手を振上ぐれば、彼方でも等しく上ぐる手の影に、愈々恐れて居合はしたる、乳母に取付き泣出せば、乳母は可笑しさ怺へ兼ね、思はず聲立て笑へども、又槃特が心の怖さは、左も有りなんと取敢へず、障子を破と締切れば、槃特は溜息つき、「アラ嬉しや曲者は、何處へか失せたと坐にすわる、折から彼の吉祥は、いつもの如く小間物の、品々携へ部屋々々を、廻りて此へも來りしかば、好容夫人の許しを受け、軈てお屋間へ進み入り、何吳となく御覽ずる內、幸ひ四邊に人もなく、宜き折を見て轎曇彌の、お文をそつと差出せば、好容夫人は打驚き、「夫は誠か難有や、斯くお文まで賜はりて、睦び給ふ辱けなさ、疾く拜せんと封じ目を、切りて篤くと見る程に、初めよりして細々と打解け給ふ、文体にて、太子を此方へ伴なひて、疾く見せ給へなど細やかに、書い認めてありけるを、讀終りて吉祥に向ひ、「如何にも此おん文の樣、自らが心には、飛び立つ程に嬉しけれど、帝を差置き、月景殿へ、太子と共には參られず、今にも帝入らせ給はゞ、此御文を御覽に入れ、御許しを受けてこそ、直ぐさま太子諸ろ共に、御目見得に赴くべければ、夫までの處は惡しからず、取繕ひて吳れよかしと、頻りに喜ばしき体なるゆへ、吉祥も共に嬉しきを、袖に包みて退きつゝ、其儘月景殿へ赴きて、好容夫人の御喜び、云々なる由申上ぐれば、轎曇

彌、「夫は何より嬉しやのう、さらば今より誰にも沙汰なく、破利舍那殿へ赴かんと、仰せあれば既に早や、日も暮れたればと中老の、女中が止め參らすれど、「少しも厭ふ事は無し、自らが思ふ仔細あれば、更々案じず供せよと、俄に夜の御運び、只中老一人召連れて、破利舍那殿へ赴き給へば、好容夫人は難陀太子に、添乳して早や寢ね給ひし、部屋の扃を叩くは誰ぞと腰元が明けるを遲しと、立入り給ひて轎曇彌、其腰元に打向ひ、自らは轎曇彌なりと、仰せらるゝに打愕き、思はず平伏を押止め、「イヤ愕く事はない、自ら此へ來る事、前以て知らせなば、何や彼や手重くて、皆が嘸ぞや心づかひ、されば此由好容に傳へて、寢間衣の儘にて苦しからねば、一寸云ひ聞けて逢ひ吳れよと、言葉優しく宣ふより、腰元は好容の、枕頭へ走りゆき、云々の事告げ申せば、好容は打愕き、夜のもの搔い遣り捨て、「着換への小袖早や持てと云ひつゝしどけなき姿にて、太子を抱き上げ起きんとするに、轎曇彌は早や入り來り、打解けたる氣色にて、「イヤコレ何も夜の事、衣服を改むるにも及ばず、太子も寢たら其儘でと、云ひつゝ靜々好容の、枕の下まで進み寄り、「如何に久しや好容夫人、不時に來りて嘸ぞや嘸ぞ不審にも思はれ樣が、更々訝る事勿れ、今日文をもて申せし如く、疾はにも逢ふべき筈なれど如何なる事の記ありてか、帝を初め優陀夷夫婦、命婦等までも其方の身の上、太子御誕生の事をさへ、妾に包みし物からに、嘸ぞおとにも心憂く、思はるべきかと推せしゆへ、身ら訪ひに

來りしのみ、心安く思はれよと、情けも深き御言葉、聞く好容は我から恥ぢて、赧らむ顔を得も上げず、消へも入りたき其の素振、轎曇彌は尙ほ打解け、好容の抱きし太子を熟々見て、「夫なる和子は兼ねて聞く、難陀太子に在ますか、テモ麗はしき御粧ひ、此方へちやつと抱かせて」と、手を差延べて抱き取り給ひ、太子の顔につけて、あやし給へば目を覺まし、莞爾と笑み給ふより、轎曇彌もいとゝ愛で給ひて、餘念も無き有樣に、好容も難有涙に暮れて只言葉もなく差俯頭いて、居る程に、轎曇彌は太子をいだき、暫らく時を移しけるが、如何にも分れ惜しげにて、「今宵我に貸し給へと、宣へば好容は、はつと答へて乳母を添へ、「何卒暫らく和女さまに、御養ひ下さらば、尙ほ難有き仕合せと、畏々申せば轎曇彌、「さらば此儘連れ歸らん、和女も何憚らず、折々此方へ來られよ、今宵の無躾お許しと暇乞ひして出で給へば、好容は又た平伏して、「お粗末さまと云ひつゝも、送り出んとしてけるを、轎曇彌は甚く押止め、太子の乳人引連れて、月景殿へ歸らせらる、されば其の明けの日に、早くも此事帝に聞え、殊に又優陀夷夫婦、命婦等は、彼の母子の事、是れまで包みし面目なさ、轎曇彌の御前へ、出づる事さへ最と辛く、互ひに顔を見合せては、本意なき由を語る內、優陀夷夫婦命婦まで、轎曇彌の御召と、聞くより扨はと胸に釘、先づ逸先に優陀夷が出で、若し兎や角とあるならば、包み隱さず有りの儘、申上ぐる外なしと、少しも憶せず御前へ、出づれば轎曇彌は難陀太子を

是れ見よがしに抱き給ひて、「コワ久しやのふ、優陀夷、此太子を見知りしかと、差出し給へども、優陀夷は何の答も無く、差俯頭いて居たりしが、良あつて頭を上げ、「御前さまへ是まで包みしは、重々我々が無念なりと、云ひ解かんとする先を、轎曇彌は押止め、「イヤ其云ひ譯を聞く爲めに、是へ呼び出しはせず、假初ならぬ若君の、御誕生在ませしを、妾へは勿論の事、御親族方を初めとし、國中殘らず沙汰すべきに、未だ其事無きゆへに、夫を急げと申さん爲め、只今呼び出せしなりと、心の恨みを言葉に濁し、夫となく戒めつゝ、仰せあれば優陀夷は畏み、是よりして難陀太子の御誕生を夫々へ、御披露となりけるゆへ、御親族方は勿論の事殿上殿下の人々より樣々の捧げもの、大殿に山を爲して、御祝を催はせらる、されば優陀夷の女房命婦も共に、轎曇彌のおん前へ、畏々と進みいで、好容夫人太子さま、御誕生の事の由を包みし事の申譯け、恐入りて詫びければ、轎曇彌も一と通りは、叱り給へど、左のみ又た、執念くは恨み給はず、御祝ひの日よりして、好容夫人を表面上、月景殿へ召出され、何や彼と睦まじく、語り給ふに附々も、心安くは思へども、御祝ひの日よりして帝は更に月景殿へ、通はせらゝ事もなく、好容の方へも入らせられねば、是れ只事に侍るまじと、優陀夷帝の御前に出で、御心の內を問ひ參らせしに、案の如く轎曇彌、破利舍那殿へ沙汰もなく、音づれしのみならず、難陀太子を誘ひて、月景殿にある者から、流石に麈とて面伏せ、何を機に面合はせん、

返す〳〵も本意なき事、誰が計らひで轎曇彌の、耳に入れしぞ其者の名を聞かまほしと嘆ち給ふに、優陀夷は平伏し、「如何にも其仰せは、御道理には候へども、隱す事は必ずしも、顯はるゝと云ふ比喩の如く、誰云ふとなく、風が便りにする者なれば、左のみ御心に掛け給はで、幸ひ御交情睦まじき、好容夫人の事なれば、相も變らず御通ひありて、太子の御身の上何奚と語らひ給はゞ轎曇彌の方も、左のみ恨みも宣ふまじ、是非とも御入りあれかしと、彼方を思ひ此方を厭ひ、漸やくに帝を勸めて、月景殿へ誘ひしに、轎曇彌は帝を敬び、軈て四邊の人を遠ざけ、「如何に我君聞し召せ、自らが過ぎし年、妹が懷胎の頃なるが、心に如何なる、天魔破旬が魅入りてか、罪もなき摩耶を深くも嫉み、あられもない事仕出せしが、不圖其の惡念發起して、夫からは深く、嗜み謹みて、假初にも嫉み心を捨たるが、昔一と度不束なる、僻事ありし者なれば、此程好容夫人の身の上を、お包みあるは無理ならねど、左のみ執念く自らを、嫌ひ給ひてお在しては、此方にて兎や角と、心を盡す甲斐もなし、最早やお伽も是までなり、許し給へと涙ながら、用意の短刀逆手に取り、「疾くより覺悟は極め侍り、女の髮のめでたきも誰を賴みに結ぶべき、君の心に適はずば、少しも早く態を變へ、尼法師にも成り果てゝ、煩惱の絆を斷ち侍らんと、云ひも終らす手づからに、髻を解かんと仕給ふを、帝愕き押止め、「ヤ暫し待給へ、麿が心に何事も、隔てん樣は無けれども、好容夫人の身の上を、和女に明かさ

ぬ物からに、恨みらるゝは左る事ながら、只今和女の懺悔の如く、女子と云へば誰とも、嫉みの心あるなれば、若しも夫等の淺ましき、事もやあらんと疑ひて、隱せし事は許してよ、左れば是より太子をば、和女の者と養育し、又好容と睦まじく、親しみ給はば如何ばかりか、麿が心の欣びぞ、早や〳〵心を取直し、酒事にても催し給へと、最と懇ろに諭し給ふ、言葉の機に轎曇彌は、嘆ち涙も今更に、忝け涙を搔き拂ひ、「アヽ勿体なや冥加なや、果敢ない心に恨みし事、幾重にも御許し、御免なされて下されかし、仰せの如く難陀太子を、此方へ移して自らに、養育せさせ給はらば、自らが下々への、聞え惡しからず侍るかし、斯程まで厚きお惠みの御心にお在しませば、よも此方をば恨み給はで、是れまでの事共は、打捨てゝ、此の後は、必らず〳〵隔て給はで、お目かけられて給はれかしと、掌を反すより、早くも心打解け給へば帝も最と〻御氣色よく、俄かに御酒宴を初められ、其夜は喋き明し給ひぬ」、黑干玉の羽色になりて可愛いと、鳴いて渡れば可愛くて、なかぬ鳥の月の夜も、習はなくして戀の闇、夜明けぬ國のいつまでと、思もつ身に明けの鐘、聞くも辛しよ野鷄の、野暮な口から後朝は、ほんに遣る瀨が無い哩な、獨り寢る身の夢でさへ、ほんに遣る瀨が無い哩なと、腰元どもが口々に、氣も氣散じに浮れ蝶、唄ふて通ふ長局は、女護の島かと疑はる折柄、忙たゞしく腰元一人、奥の詰所へ走り來て、優陀夷の女房に打向ひ、只今お玄關先へ案内して、未だ見知りなきお客樣の

數多の供立にて御入と、知らせをまいて優陀夷の女房、「开は誰殿の御入りか、先づ是へ御招待、粗忽なき樣計らはれよと、吩咐つかはす程もなく、儼がましき武士の、長上下を踏みざわめかし、大小門に差しなして、案内に連れて打通り、上坐に通れば優陀夷の女房、禮義正しき挨拶に、件んの武士咳ふきしつゝ、「某は好容夫人の兄、夜叉軍士と云ふ者なり、先づ以て此度難陀太子、御誕生の御披露を、人傳手に承はり、何より以て珍重の義、依つて其御欣び旁〻、轎曇彌の方へ面談の上、淨飯大王を初め悉達太子、難陀太子へも近づきの爲め、是まで推參致せりと、左も鷹揚に述べければ、女房は不審の頭を傾け、暫し何の答へもなく、心の内に思ふ樣、是れまで遂に名も聞かぬ、武士なれど、如何にせん、好容夫人の兄とあれば、此儘にも歸されじとて、「暫らくお控へ召されよと、云ひつゝ退き一と間へゆき、轎曇彌の御前へ出で、云々の由を申せば、轎曇彌首肯き給ひ、「成程其者を、其方は知らぬ筈、自からは一ち度對面せし事あり、定めて今日來りしは、願ひ望みのありての事、只今帝お目覺め給はゞ、彼が身の上遂一に、自らが申上げん、暫らく夫にて待遇せとの、仰せに女房ハトとは云へど、如何にも不審の者なれば、好容夫人の間居へ赴き、云々の由尋ぬるに、好容夫人は打愕き、「成程妾に其名をよぶ、一人の兄のあるけるが、幼なきより、心邪け、宜からぬ事のみ働いて、多くの人を惱ます事、度重なりて兩親の、意見も更に用ゐねば、彼の身年廿歳の頃、長く勘當致してより、

久しく噂も無かりしが、過ぎし頃人に聞けば、着る者さへも肌薄き、襤褸を纏いて彷徨へど、まだ心をば取直ざず、人を損ぬる身の放埒、其宜からぬ沙汰を聞く度に、兩親はあられぬ涙、生れそこねし子を以て、世間を狹く身を詰めて老の苦勞も那奴ゆへと、恨みては泣き悔いては泣き、又も世間に非道に死せし、人ありと聞く時は、若しや那奴が業では無きかと、案じてはに、大小手挾み衣服正しく、供人召連れ來りしと、聞きて少しは落つき侍り、只つた一人の兄上を誹るは惡しき事ながら、善からぬ者に候へば、程よき樣に云ひなして、帝を初め轎曇彌の方へも御引合せは、御無用なり、若しも後日に如何樣の、事も出で來し其時は、自らも親も面目なき儘、此義宜しく賴み入ると、事を分けたる利發さに、女房も左こそと首肯きて、「左あらば宜きに計らひ申さん、必らず案じ給ふなと、云ひつゝ、軈て轎曇彌の、御前へ出れば既にはや、彼者に御面會の色めきあるを、先づ押止め、好容夫人の物語り、云々の由詳らかに、告げ知らせ參らすれど、轎曇彌は好容の現在の兄と聞きて、「假令へ好容は夫にもせよ、自らが打捨て無情もなく、歸してやらば人誹りて、我名を下すが憂しや辛し、太子まで擧げし者の、見とあらば、相應の恩賞與へ得さすことも、左のみ帝の御叱り、有るべくとも、思はれず、と宣ふを、女房は、「先づ兎も角も私しに、御任せ下されよと、無理に押止め退きて、軍士の前

へ再び出で、「是は〳〵其方様には、いかいお待遠さまや、折悪しく今日は、淨飯王轎曇彌も聊か勝れ給はねば、お寢間へ引籠りお在るゆへ、御對顏なりがたき儘、私より御參内の御挨拶、宜しく申せとの仰せなりと、述ぶるを待たず夜叉軍士、頭を左右へ振り立てゝ、「ハテ喧ましい女の嘴、云はゞ此度誕生の、若の爲めには己れは伯父なり、其者を餘りと云へば、輕卒の扱ひ心得ず、尤も過ぎし頃、不圖轎曇彌に面會の節、又も參内致せし時は、莫大の恩賞あるべく一ッ廉の國王にも、封ずべきとの確かな言葉、今更反古にも致されまい、先づ面會は兎も角も此返答を聞きたしと、眉毛動かす高聲に、女房は甚く持て餘し、「夫等の事も此方より評議の上にて沙汰せんと、賺せど更に聞入れず、「イヤ面倒な、轎曇彌に直談せんと、携へし菓子折提げ、刀追ッ取り立上つて、一と間へ行くを、無理に止める襖をば、無理に引明け入らんとする、機に入り來る優陀夷大臣、右梵士太郎に包みを持たせ、「イヤ待たれよ夜叉軍士、則ち帝の御名代、優陀夷是にて面談せんと、言葉凜々しく述べられて、地体は弱き下司の本性、畏々元の坐に復れば、優陀夷重ねて言葉を正し、「此度若君、御誕生の御欣びとして、自身の參内帝にも御滿足、某より其挨拶、宜しく申せとの事、則ち斯なる一臺は、淨飯王より其許へ、贈らるゝ時服一と襲、些少ながら受納して歸宅せられよと云ひながら、差向けられて不足顏、「イヤこれ優陀夷どの、假初ならぬ此度の御祝ひ、是しきの禮物を、貰ひに參内は致さぬ、妹が緣

にて親族となれば、帝を初め太子までに、盃の取替せもありたる上にて、曳出物には一ッ廉の國の玉にも取立てらるゝ筈の處ろ、多寡が時服の二つや三つ、欲しくば此方から贈るべし、慾に目が眩れ參内はせぬ、信實を以て來たからには、贈り物は受取らぬ、帝へ面會が叶はずば、太子方へ逢はすべし、若しさる事もならぬとあらば、妹好容を引連れ歸る、イザ二つ一つの返答は、如何でムる優陀夷どのと、最と荒々しく云ひけるを、優陀夷は聞きて冷笑ひ、「ハテざわめかしい其腮ひ、巧みの尻の剝げぬ先、暇申て早や歸らぬか、長居をしたら物種の、命の程が覺束ないと、云ひ詰められて心の内、小氣味惡ろくは思へども、今更引けては歸られず、何とぞ巧みを調べんと、言葉臆せず又云ふ樣、「イヤ聞憎き其挨拶、巧みの尻の剝げぬ先とは、扨もや如何なる云い分ぞ、「去れば其許の目論見を、詳らかに云ひ聞かさん、靭造りの夜叉軍士、退り居らふ退り居れと、星を差されて流石に喫驚、左れど面は素知らぬ顏、「靭造りの夜叉軍士とは扨りや誰が事、「己れまだも僞るか、好容夫人の兄なれど、親に永く勘當され、今では靭師に成下り、下司の營み野山へ出で、猿熊を打捕りて、其皮剝いで生計とする、襤褸の姿に假初めの、借着の衣服大小に、供人大勢連れたるは不審晴れねば是れに居る、右梵士太郎に見せしめしに、其供人は過ぎし頃、悉達太子迦夷衛國よりの還幸を待伏せして、右梵士太郎と戰ひし、提婆が手下の者なれば、早や腹中の巧みの底を、見極めたるとは知らざるや、まだ

化の皮顯はさぬか、こゝな人非人めがと、睨めつけられて夜叉軍士は、忽ちに齒噛みを爲し、側に在合ふ白木の臺の、時服を硝と蹴飛ばせば、包み解けて中よりは、時服と思ひがけもなく軍士が常に着慣れたる、襤褸の小袖顯はるれば、流石の軍士耐り兼ね、「計る〳〵と思ひしに何時か此方らが計られしか、早や是れまでと切りかけたる、刄を優陀夷は引外して、身をかわす間の二の太刀に、右梵士が眞ッ向へ斬り付けんとて、振上るを、あわやと優陀夷後ろより、腕をしつかと、取止めたる、其隙に右梵士は、差副拔くを見るよりも、優陀夷暫時と押止め、此奴助くる者ならねど、假初ならぬ好容夫人の、兄とわれば是非に及ばず、只散々に縛めて、追放ふが可しソレ右梵士と、云はれて嬉しき血氣の若者、飛立つ思ひ軍士に向ひ、「ヤイ己れは好容の、兄とは云へど兼てより、長く勘當受けたる身なれば、親は勿論兄弟の、緣は切れて今にては、野伏仝前の世渡りする、其さもしい心から、私良摩國の達婆太子に與し、此宮中へ姿をかへ、入り込みて肝太くも事を爲さんとする面魂、されど我帝は聖賢にして、仁心深く在せば、命を助け給はすると、云ひつゝ大小上下剝ぎ取り、取寄せ置きたる仲んの襤褸を、着せかへて其が儘に、追ひ出さんとする處へ、女房吉祥走せ來り、優陀夷に向ひ手を突きて、「これは私しの逢合ゆへ、何卒手前へ御預け、下されかしと手を摺りて、樣々に詫びければ、幸ひの者來りたりとて、欄干の下へ下げ、優陀夷は右梵士引連れて、御前へ赴く此方には、吉祥軍

士の胸元押へ、涙と共に恨み事、「此な人でなし、鬼よ蛇よ、道にて樣子は殘らず聞いた、大惡無道の達婆に與し、此樣な事とは露知らず、日頃外をば内にして、戻らぬゆへ此度とて、十日廿日も寄りつかぬを、氣に掛けずに居た内に、此の有樣は何事ぞ、忝けなくも、此宮は妾宮仕へして御恩を受け、又一つには現在の、和郎の妹が結搆に、召遣はれてある者を、何が不足で此の働き、心素直に持つならば、妹の疵護で格別の、お取立てにも逢ふならば、私も今の下司の業、さらりと止めて髮形ち、立派に夫婦で暮すもの、幵も連添ひし初めより、美からぬ心と知りながら、何うした月下氷神たちの、結び合はした緣なるか、ツイした機みの酒事に、不圖逢ひ初めて夫よりも、女夫となれば其日から、更に内には落つかず、朝夕貧しき營みに、小間物類を商ひて、少しの代に煙を立て、操を立てゝ居る者を、心强やと泣き口說を、軍士は蹴仆し冷笑ひ、「ヤア姦ましいめろ〳〵と吠へ面、親の意見さへ聞かぬもの、女房は愚か何奴等が、何んと云はふと淨飯王へ、面談せぬ内はいつかな歸らぬ、どりや對面をと側に据へゐる、菓子の一と箱携へつゝ、襤褸の姿の其儘にて、奥を目かけて行かんとするを、女房は遣らじと支ゆれども、如何で男の力に及ばん、されども、女の一念力、遣らじ行かんと競り合ふ内、軍士が持ちたる菓子の箱、水引切れて中よりは、ばら〳〵と落ち來る菓子、吉祥は佶と見て「是が此世の名殘ぞと、三つ二つ拾ひ取り、口に入れつゝ尙も又、悖まず去らず挑み合ひ、遣

らじ放せの其が内に、吉祥忽ち手を悶き、挫乎と坐れば口よりは、五臟六腑惱亂の血汐を吐きてアッと計りに、苦しき聲を立てたるに、大膽不敵の役及軍士も、コワ敵はじと欄干なる、椽の下へぞ忍びける、とは知らずして、優陀夷大臣、後に續いて右梵士太郎は、好容夫人を誘ひて、立出見れば吉祥は、手負ひになりて居けるゆへ、コワ何故と勦れば、吉祥臨終の聲微かにわゝ、勿体なや怖ろしや、此の御殿を汚す罰當り、偏へに許し給はれかし、又た私しが懺悔する身の、落度の一と通り、轎曇彌の御方初め、好容夫人も一と通り、御聞屆け下さるべし、過ぎし頃良人軍士、大惡無道の達婆方に、與せしとは露知らず、此の宮の何かの御樣子、寐物語に根堀り葉堀り、聞かるゝ度に迂濶々々と、月景殿の御光景、破利舍那殿の御樣子、好容夫人難陀太子を、產み給ひし事ぞもまで、夫と知らねば打明けて、語り聞かせば其通り、私良摩國へ赴きて、内通したるのみならず、先つ頃大膽にも、月景殿へ忍び入り、轎曇彌の方の御前にて、好容夫人の有樣を、口に任せて述べたれば、是れより其の御中らい、帝を初め附々まで、御不興になりたるも、元を押せば皆な私しの、口一つより出でたる事、其云ひ譯も何とせん、女の口の善惡なきゆへと、悔みて返らぬ其中にも、只嬉しきは轎曇彌の方、好容夫人と睦まじき、御仲直を致した者から、一と度帝の逆鱗は、是れありとても遂に又た、御心解けて目出たき御交情、我計らひの事なくば、御悼はしくも難陀太子は、尙はいつまでも日影の御身、

是れ程までに私が、思ふに引替へ軍士が心、只一圖に達婆に伍し、何かにつけて悉達太子の、御身を妨げんとのみ計りぬる、本夫の仇に女房が、心を盡して味方につき、本夫の味方達婆を、ば、女房が仇と、恨むなる、夫婦の心斯はぞまで、合はぬと云ふも過世の因緣、妻は本夫に從ふの、理を守りて此の宮を、仇にすれば不忠の第一、夫のみならず此年頃、身の生計とは云ひながら、多くの猪猿を打殺し、其報ひは何處へ行くべき、廻り來りて此上にも、如何なる憂き目にや逢はん、手づから喰うべし此菓子は、夫と覺りしに違ひなく、毒藥調合の品なりき、妾が最期を御覽じて、本夫と一つでない印、御推量下されよと、道理せめて憐れなる言葉を聞くより、轎曇彌も、一と間の内より走り出で、好容夫人と諸共に、不憫の者と寄添ひつゝ、勦はる中にも好容は、我現在の嫂と、初めて聞いて取縋り、「是までは商人の、女々と呼びたるも、知らぬ故とは云ひながら、一つは兄の放埒から、許し給へや自らと、て、誠につれない男よと、恨みながらも、血統の緣、切るも切られぬ妹が、コレ此の樣に詫びまする、のふ姉上と手を合はせ、いと〻涙に暮れければ、轎曇彌は言葉を改め、「疑ひ晴れし吉祥よ、本夫に代つて是れまでに、致せし忠義の志は、山に積むともよも盡きじ、心確かに持たれよと、聞くが此世の暇乞ひ、其儘其處に息絕へたり、右梵士太郎は軍士の行衛、彼處此處尋ねしかども、更に其影だに見えず、召具したる供人も、何時の程にか逃失せて、一人も殘る

事なければ、何を擒にする物なく、手を空しく立戻りて、此趣き又吉祥が事をも具に奏しければ、帝且怒り且嘆き給ひて、此吉祥こそ摩耶夫人、存生の節は何吳となく、懇ろにせし者なれば、其報ひの爲め且つは又、這回の忠死を賞する爲めに、亡骸を厚く取納め、禮を重くして葬むるべし、又軍士が惡行は、甚だ憎き者なれば、假令へ好容が、兄にもせよ、何處までも行衛を穿議し、召捕へて嚴しく正し、其罪に行ふ事、少しも忽せにする事勿れ、凡て善を勸むる者は、其の志を厚く褒美し、又惡事を爲すものは、嚴しく能く戒むるを以て、國を保つ政道の、正しき道と云ふなれば、夫々の者へ申付け、軍士は勿論其同類、外にも斯る曲者あらば、洩さぬ樣に取押へ、佶と其罪に行へかしと、善惡正しき仰せを蒙むり、優陀夷御前を退きて、直ちに吉祥の亡骸を、懇ろに取りをかせ、是を御菩提所の側に葬むり、又夜及軍士が行衛をば、夫々へ、相觸れて、嚴しく尋ねせさにける、

校訂　釋迦八相倭文庫第八編　終

校訂　釋迦八相倭文庫第九編序

夫頭彌山の南洲を閻浮提といふ、日本震旦天竺は皆此中なり、然るに天竺は、其閻浮提の正中大國にして、王城あり、今の王は釋迦氏也、抑此國の祖先を尋るに、昔光音天の衆この地に遊戯飛行自在す、時に香しき甘味を取喰ひて、身孕ば飛行するを能ず、食を思ふが故に粳米生ず、長さ四寸半、朝に苅ば夕に生ゆ、これを喰ふが故に、男女の形分る、后日に貪慾發て苅ば再生ず、侵奪とありて、智者を撰で國王に定む、名を平等王と云、是より三十三世に至て、善思王轉輪聖王の、位を證して四天下を治む、又百一萬五十六王を經て、師子頰王の皇子踐祚す、これを淨飯大王と稟す、今序にかへて玆に是を識す、

弘化五戊申年孟陬吉辰

萬亭應賀述

校訂 釋迦八相倭文庫第九編

江戸萬亭應賀

さるほとに破利舍那殿に、淨飯王の忍ばせ置かれし、好容夫人の有樣を、思ひ寄らざる夜叉軍士の、さがなき心より轎曇彌の、御耳へ入り一度はうらみ嘆ちしが、禍ひかへつて幸となり、悉達太子の御身の上も、已に日陰を出で給ひて、時々の御祝も、轎曇彌の計らいにて、悉達太子の先例に異ならねば、淨飯王を始め好容夫人の、御嬉び限りなく、難陀太子も轎曇彌を、生の母の如く慕はせ給へば、轎曇彌も又深く愛して、月景殿に止め置き、急に破利舍那殿に返し給はず、抱きかゝへして愛しめば、好容は御機嫌伺ひと言ひなし、日毎々々に月景殿に入り給へば、轎曇彌は又新宮の兄君、悉達太子の御許へも、難陀をともない音信れ給へば、悉達太子もいとゞ悅び、打とけて語らひ給ひ、又好容夫人へも、厚く言葉をかけられて、數多の召遣を集めつゝ、樣々の戯れ遊び、御慰みとりく〳〵にて、兄弟の御中ことに睦まじ、去れば月景殿は云ふに及ばず、破利舍那殿新宮の御所に行き通ふ、女中ども〳〵互いに深く睦み合ひ、勇みて宮仕へ爲すと云へども、夫に引かへ物憂きは、悉達太子の伽を勤むる、鹿野女瞿陀彌女兩人なり

いか程心に心を攻めて、嫉みがましき志を、我と嗜み侍といへども、元より女の只一圖に君を戀しく思ふに付ては、計らずも心の猿に、惑はされざる事を得ず、いつしかに又嫉妬起りて、彼方は此方をつひ妬み、此方は彼方を妬みつゝ、夜のお泊りを爭ひて、我れ一先に御胤を宿さん物と、村膽の、心に炎を燃やす物から、幾度何程の、善根功德を盡すといへども、此の嗔恚の炎に燒き捨て其の甲斐なく、返つて身の禍とも成るべきか、又は妬の其ほむら、隱すと爲れど美くしき、花の笑顏にをのづから、其の色の顯るゝにや、悉達太子は只管に、耶輸陀羅女の方へのみ、御通ひ寄らせられ、殘る二人は夫程に、召給ふ事なかりし故、優陀夷の女房取り扱いて、此二人の姫も折々は、御伽に召さるゝやう、樣々に進め參らすれば、太子はいな御顏付にて、とも角くもとのみ宣ふ故、女房も猶二人の姫の、心を察し味氣なく思へば、又轎曇彌の御前へ出で、蜜に云々なる由を告げ申せば、轎曇彌も又密かに宣ふ由有り、其の御言葉を兼て優陀夷の女房、再び太子の御前へ出で、「此の程轎曇彌の方の仰せには、過日も示し置たる事さへ有るに、如何なれば左迄偏頗に、耶輸陀羅女のみ、御伽に召給ふぞや、若し二人の姫に、不束なる事しも有ば、包み給はで右樣々の事有る故、嫌ひ給ふと私へ、仰せ聞け給へかし夫れ聞きとゞけて品に寄り、ともかくも計らひて、御迦の役を留めんとの事、此義如何におはしますやと、言葉賢こく理を攻めて、申せば太子は御顏を、暫時背けておはせしが、良有つて

宣ふやう、「いやのう女房麿に置て、何に片落ちに耶輸陀羅女のみ、招ぐ事の有るべきぞ、去る故に先に其方にも、二人の物もともかくもと、言ひしは何れも隔てなく、語らふと云ふ麿が心此の義を持つて月景殿の、御前へ宜敷沙汰せよと、心と口と裏表、夫とは知れぞ女房は、其の儘仰をかしこみて、夫より後は耶輸陀羅女、鹿野女瞿陀彌女三人の、姫を太子に勧め申て、かわる〳〵に召されけれども、鹿野女瞿陀彌は元よりも、深く心に深み給はねば、御伽の夜は更に又、樂しげなくをはしゝが、耶輸陀羅女の侍づく夜さは、酒の莚も酣に、ひとしほ喋めき渡りつゝ、餘所の見る目も目立つ迄、戀愛の程知られける、全く太子耶輸陀羅女の、容貌の勝れたるを、見惚れ給ひし故には有らず、抑も〳〵耶輸陀羅女は、生れながら容貌麗はしきのみ成らず、親の族の嚴しきにや、身を嗜みて恪氣なく、人を侮らず情け深く、召仕ふ局多門仂女に至る迄、心を着けて勤れば、餘所の局多門まで、如何にも優しき能き姫と、噂して取りはやし誰れ有つて誹る物無き故、自づから天道の運を受け、斯程に多き姫たちの、召されし中に只一人、撰り好まるゝ身の冥加とは、あの姫の事ぞとて、皆口々に羨みぬ、扨て年頃水の出花の色盛り、翠帳紅閨の、割なき御契幾度か、重る儘に此程は、御心地例成らず、御病着にもましまさずやと、典藥を召して、御樣体を伺はせけるに、御煩ひは思も寄らず、如何にも目出度き御懐胎に、極つて候と、言上爲すを聞し召すより、太子は雀躍し給ひて、こはそも誠か悦ばしと

勇み給ふに耶輸陀羅女も、供に我が身を搔き抱き、太子の御胤身孕りしとは、如何成る神の利益にやあら冥加なる、我身かなど、勇みたちて優陀夷の女房、命婦へも事の由を、即座に知らせて喜べば、宮中の喋さ大方ならず、是よりしては耶輸陀羅女を、太子の愛み益々深く、暫時も御傍を、放ち給ふ事無ければ、いよ〳〵耶輸陀羅女の譽れの勢ひ、朝日のとよさか登る如くに持囃されて、帝よりも御悦びの御使に、優陀夷の女房を持つて、贈物下されつゝ、猶仰せ遣さるゝやう、太子一度十善の位を見捨てゝ、發心報謝の道に、只管入り給ふ所成るを、此宮中に御心止り、萬乘の位を嗣せられて、政事を知ろし召すは全く持つて、夫人たちの侍づき能きが故成りき、中にも其許は逸早く、御胤を宿し參らせし事、國への聞へ萬民の饒、此の上や有るべき、猶心を着けて身を大切に守り、頓て安産の時を待つべしと、細々と御心の程を、女房は述べければ、耶輸陀羅女の心の内、何に譬へん其悦び、嬉しき儘の御答も、又誠心をもて述たりける、されば其の夜の事成るが、悉達太子は耶輸陀羅女の許へ、御通ひ有りて打ち臥し給ひし、御夢に不思議や、御枕許へ過きし九歳の御時に、鬱頭覽弗の院にて、番僧に欺かされ、僞はられ給ひて通ひなれたる、淫肆の曲輪にて言葉を替はせし、傾城の婆須密多女、忽然と裲襠取り顯れし、其の姿は以前に百倍して、容貌髮形の美麗さ、やはか侍づく三人の姫も、及び無き其の粧裝は、さながら盛りの牡丹花の、筒は一本水を上げ、匂ひ飜るゝ如くにて、水際立

ちて懷中へ、差入る顏の麗はしさ、邊り眩ゆき折こそ有れ、頻りに空薫の名香の、馨り薫々と心を動かし、天上の春もかくや、とばかり疑かわれつゝ、夢心に太子は問はせ給ふやう、「何如に夫なる遊女は、昔し麿が九歳の時にや、善惡なき物に訛らかされ、通いし淫肆の曲輪にて、言葉を替せし物成らずやと、宣給ふ聲に遊女は、面を上げて點頭つゝ、「如何にも仰せ有る如く自らは淫肆の遊女、婆須密多女と申す物と、聞きも遂らず太子は又、「して其の遊女が此の奥殿へは、誰が免して何物の、案内にて來りしぞ、「されば誰にも兎されず、何物の案内も受けねど君に語らはん其の爲に、妾が一念の一筋なる、速る心の誠より、遙々の道をも厭はず、人目の關を姫御世の、大膽なる戀なればこそ、徒跳し、此迄參つて見奉れば、曲輪へ通ひ給ひし時とは、打つて替りし御姿、御年頃と言ひ艶々と、なまめきし御粧ひ、此程傳へ聽きはべりしに、御伽の姫たちも、多く出來させ給ひし由、斯る上は仂なき、自から如き賤の女が、問ひ參らすともよもや〳〵、苟且にも御情けをば、掛け給はじと心で心を、取り直せども情けなや、一度御姿を拜してより、忘れ兼たるそが上に、夫れ其の時の仰せには、何卒正眞の佛菩薩を、拜ませ呉れよと歎き給ひ、母君摩耶夫人の御菩提を、吊らひ給ふ御志の、如何にも愛しく思はれて御望を叶へ奉らんと、心を盡せし甲斐もなく、替り易きは秋の空、無情なき君も諦めても、諦らめ兼て御恨を、述べに是迄參り侍ると、目に張り持ちて嘆つにぞ、太子は現に答へ給ふよう

「如何にも夫等の事有りたるが、此程心に斷へたる仔細は、一度は母摩耶夫人の、御菩提を吊らはんと、憂き身を扮して發心懺謝の、道へ立寄らんと、樣々に焦りしが、爲る事成す事我母の、妨げとこそ成れ中々に、菩提の爲は思ひも寄らず、抑も十善天子の若君と呼ばれたる身に有る事か、扮て無き事か、臀頭覽の院へ諸方より、納めたる奉加賽錢を盜み取り、汚らはしき傾城町へ忍び出で、是はまだしも、臀頭覽の本尊なる、左りの方に安置せし、藏王如來は閻浮檀金と聞くからに、此の尊体を勿躰なくも、土か金かと疑がひて、乃に掛けし身の淺間しさ、夜叉鬼神にも劣りたる、逆事のとひ吊らひ、嘸ぞや嘸ぞ冥土の母君は、麿故に猶苦しみを、受け給はんと身を悔いて、其の言ひ譯けに、仇し野の、露と消ゆべき命ちさへ、又助かりて是迄に、存命へし情けなさ、死ぬにも死なれぬ身の罪障、佛神へ乃を當れば、五逆罪と聽くから に、最早や心の張も切れ、罪も報いも後の代も、忘れはてたる身の置所、只鬼畜と心得て、假の浮世に假の宿、器を飜し、其の水は、再び又元の器へ、戻る道理有る事なし、我が罪咎も其の如く、悔んで甲斐なき不孝の振舞、濡れぬ先こそ露をも厭へ、今の此の身の有樣は、又有べき榮華とも覺えず、あら心易き浮世かな、あら恐ろしの越方やと、嘆息つく〳〵宣ふを、彼の遊女は聽きあへず、「是は又若君の、御言葉とも覺へ侍らず、夫れ此の世界は穢土と申して、萬の汚れいと多く、又娑婆火宅とも言ひて、佛の戒め給ふ世界成れば、數多の佛菩薩たちも、人

間、餓鬼、畜生、修羅、天上、地獄、此の六道を免れ、安養の淨土へ、赴かしめんとて、樣々に說法爲給ふをば、君には未だ知し召さずや、抑も若君は苟且の、人間にてはましまさず、即ち諸佛の結緣にて、衆生を濟度の其の爲に、生れ給ひし御身をば、忘れ給ひし不束さ、過ぎし年より幾度か、天上の淨居佛、姿をかへて君に見へ、示し諭せし事どもまで、早くも忘れ給へるか、夢の浮世に心をとめて、耻づる色なく共侶に、臭き身を抱き合ふ、男女の淫樂汚らわしや、只今若君の宣ひし、其の昔し、鬱頭覽の院の、奉加賽錢を盜み取り、或は藏王如來の像を乃に掛けて、淫肆の曲輪へ通ひ給ひし、不束さに御名を下し、此の上の不孝は無きと、歎げかるゝはげに道理には、聞ゆれども左に有らず、其の罪咎と思ひしも、是れ皆母君摩耶夫人の菩提の爲めに此の上も無き、大善根にて侍るかし、夫を如何と尋ぬれば、是より遙か後に及び摩耶夫人の再來は、因緣によりて添けなくも、忉利天上に生れ給ひて、帝釋天の后妃と成り、喜見城に住む事有り、其の時宮殿の扉、悉く金色の光を放つべし、こは御身が九歲の時、鬱頭覽の奉加賽錢を盜み、淫肆へ通ひ、正眞の、佛菩薩を拜し奉らんと、只一條に世に無き母を、慕ひて戀慕偈仰したる、功德に依つて再來の、摩耶夫人が住む宮殿の、扉は悉く七寶と成れり、扨て又おことが乃に掛けし、藏王如來と申けるは、お身が前生八千度、國王と生れ出で、又樣々に生れ替り、人界に出たる內、南紹國の巽なる、素摩山の蓮華臺に、藏師如來と顯れしを、

忉利天上の帝釋天、自から閻浮檀金を持つて造らせらる、かるが故に此の如來は、即ち太子の前生にて、いはゞ其の身を切り割きても、母の無き跡を吊らはんと、思ふ志し有に似たり、又鬱頭覽の院へ諸方より、寄進せし賽錢を、番僧共が盜み取り、其の言ひ譯けを免かれんと、迦毘羅城より御寄宿の、太子賄ないの其の黃金を、僅ばかり並べ置きて、番僧等は素知ぬ顏にて諸方よりの奉加賽錢を、悉く悉達太子が持ち出しと、鬱頭覽に沙汰せし物から、鬱頭覽は只呆れしが、太子の淫肆へ持出せしは、御身に着くべき黃金成るを、御身が使ひ果せしに、何の仔細の有るべきや、咎は惡僧共に有りて、太子は誠に此の上も無き、大善根を成し給ふなり、さればこそあれ仇し野にて、已に危うき御最期を、淨居佛修行者と成り、御命を助け參らせ、其の歸るさの途中にて、又出合ひしを幸ひに、夢の浮世を諭し參らせ、別れてより太子には、深く報謝の道に、入るべきとは思ひ給へども、人界の塵に妨げられ、十善の位を次ぎ給ふ時は、諸佛の願も朽ち果つれば、其後太子藍毘尼苑へ遊覽の時、又も淨居佛顯はれ出で、花の散るに事よせて、老少不定は風前の、燈火の如しと諭せし物を、扨ても敢果なく報謝を遂ず、苟且の愛惜に惑はされて、火宅に心を留め給ふ、あら鈍ましや情けなし、妻子珍寶身に從はず、子は三界の首枷ぞや、早やく浮世を振り捨てゝ、有七寶池八功德水、十萬の安養の淨土へ赴くべし、かく申す此の遊女は、衆生濟度の其の爲に、淫肆の曲輪へ生れかへて、夜々替る戀衣の、

袂は文に宿貸して、態と浮名を溢せども、身は假の夜の假初に、涙は賣れど心まで、浦の男波のさす手をば、夜は引寄せる川竹の、替る枕の色ならで、柳は翠花は紅ひもさゞら波立つ破て、さりと、唄ふ聲々たへなるに、太子は夢の内ながら、目を閉ぢ觀念し給へば、遊女の姿は白象に乘りて、端嚴柔和の粧はいなる、正身の普賢菩薩と拜まれ給ひ、法性無漏の大海には、普賢恒順の月の光り、朗か成りと唄ひ給ふ故、太子御目を開きつゝ、餘りに尊とく思召し、御手を合せて伏し拜ませらるれば、姿は以前の遊女にて、さゝら波立つと唄ひ、又現に御目を閉ぢ、心を法界に澄し給へば、生身の普賢菩薩の來迎にて、目前に紫雲靉靆き、音樂聞へ花振りくだる、そが上に忉利天の、喜見城忽然と顯れ出で、世にも妙へなる有樣に、太子は感涙胸に溜め兼ね、「あら有難や忝けなや、是迄遊女と思ひしに、普賢菩薩にてましませしかと、猶伏し拜み給ふ程に、白象普賢を乘せて紫雲に從ひ、虛空を差してぞ登りける、太子御目を開かせ給へば邊りに遮ぎる物も無く、只名香の煙のみ、微かに燻るばかりなる、打柄窓の笹竹に、塒を出でし雀の聲して、夜はほの〳〵と明けしかば、耶輸陀羅女はとく起き出でゝ、御前を下れば夫々の物、立出てゝ御機嫌伺へども、太子は件んの御夢に、心の内の遣瀨なさ、事明らかに人々へ告るにも告げ兼て御思案の胸いと苦しく、其日よりして御不快とて、御典藥を招かせ給へば、帝轎曇彌の方を始め、優陀夷光明兩大臣、右將軍等其の外の、大臣たちも御傍へ、交る〳〵相

詰め、優陀夷の女房命婦等も、御膝近くへ詰め切ッて、姫も着添ひ奉りぬ、扨て又鹿野女瞿陀彌女の附々の女中口々に、耶輸陀羅女の御泊りの、夜より太子の御心例成らず、是は何如にと喋く事、遂に耶輸陀羅女の付の、女中の耳に入り、元より女の口善惡なく、早くも耶輸陀羅女に告げしかば、耶輸陀羅女は打驚き、こは思ひ寄らざる事聞き侍る、そも自からの許へ御泊り有とて、何の仔細の有るべきや、此事聞き捨にも成るまじ、優陀夷の女房に、云々と言ひ聞けんとて、一筋に案じる胸は女氣の、心細さは常の習ひ、三度の食事も進み兼ね、思ひ煩ろふこそ道理なれ」爰に又私良摩國の王子、達婆太子と聞へたるは、飽まで心猛くして、迦夷衞國王の娘、耶輸陀羅女と婚緣の事を、媒妁を持つて言ひ渡りしに、此方を嫌いて遂に遠國なる、摩伽陀國迦毘羅城の、淨飯王の王子悉達太子を、婚禮を取り結びし事、如何にも口惜くや思ひけん、日頃出入する靱作りの夜叉軍士は、能く迦毘羅城の、樣子を知りたれば彼を招き、惡巧計を企だてさせしに、軍士は淨飯王の愛妃、好容夫人の兄成る故に、膽太くも迦毘羅城へ姿を變へて入込しに、案に相違の憂目に合ひ、已に命も危ふかりしに、兎や角やして逃げ忍び、一つの葛籠を奪ひ取り、背負て私良摩國へ立ち歸り、達婆太子の前へ進み出で、携さへ來りし、彼の葛籠を、側に下して扨て言ふやう、「如何に太子尊命の、豫ての大義を仕損じて、辛き命を這々に、逃れて只今歸りたり、去りながら迦毘羅城へ、赴さし印には、是なる葛籠がお土產と

手拇顔に述べければ、達婆太子は眉を顰め、邊りを見つゝ襖を締め切り、軍士を膝元へ呼び近づけ、「いや軍士あれ程迄に、手堅き企て仕損ずるとは、甚だもつて粗忽千萬、して其の様子は如何に〳〵、」「されば太子の仰せの如く、衣服大小閃かし、乘物に打ち乘りて、供人多く召し從へ、事々しく迦毘羅城へ入込み、方の如く好容が兄と名乘りて、難陀太子の誕生の賀を祝して夫より淨飯王を始め、驕曇彌へも面會せんと、思ひし事の仇と成りて、音に聞へし優陀夷の女房、女ながらも容貌勝ぐれて、うかと奥殿へは案内せず、兎角爲る内彼の優陀夷は、右梵士太郎を召し連れ出て、何處なる物より手に入しや、我が靴作の貧しき世計に、不段來慣れし此葛籠を、我が目前に差出され、ぎよつとはせしが少しも疾まで、其の色を見せねども、彼人も白漢何事も、早や合點の樣子成れば、しなしたりとは思ひしが、改めて仕込みし毒菓子を、悉達に喰はせ歸らんと、樣々謀る其内に、かく成る事を聽き付て、我が女房吉祥は、案内を知りし奥殿へ、跡を追ひつゝ走り來て、我が底巧を言ひわかし、自から毒菓子を取り喰ひ、御恩を受けし淨飯王を、仇と狙ふ、夫とは、一つでない其の言ひ譯、又一つには夫の惡事を、我が口から現はしては、連れ添ふ妻の本意成らねば、夫への言ひ譯是れこうと、血汐を吐いて苦しみ死、是を見にける此座の諸人、彼を憐まぬ物も無く、我を憎まぬ物もなければ、こは叶はじと欄干より、椽の下へと忍び入り、其所此所と彷徨しが、我を尋ぬる其の嚴しさ、夜更けを窺

ひ立出しに、所も狹まき長局の、椽先と思しきに至りしかば、差足して密に邊りを、窺ひ見れば薄燈火なる、燈火の下に一人の腰元、居睡むりて居るを幸ひ忍び入り、有合ふ葛籠の中を打たき、睡むる腰元引捉へ、聲立てぬやう其内へ、押込めて背負しが、立ち出づる先知れねども足に任せて急ぎしかば、陽明門の片側へ出で、此搆へ堀へ立木を渡し、漸々と逃れ出でしと、言ひつゝ葛籠の蓋を取れば、まだ十八九の腰元が、髪も亂れて惱める姿、軍士は出して勦はれども、只潛然と泣くのみ成るを、漸くに賺しつゝ、太子は言葉を柔らげて、彼が樣子を尋ね問へば、腰元僅に頭を上げ、「妾は好容夫人の婢成るが、其夜夫人は難陀を誘ひ、月景殿へ行き給ひ、着き人は皆從ひて、妾のみ殘されしを、捕へられて參り侍り、抑も爰は何方にや、何卒憐と思召し、破利舍那殿へ返してと、涙差組み虚々するに軍士は打點頭づき、「いざ破利舍那殿へ連れ行かんと、達婆に目交ばせ立上り、彼の腰元を同伴て、我が家を差して行かんとせしが、いや待て今頃は迦毘羅城の討手ども、我を目掛けて居るは必定、さらば是より仙多良國の、篠光太子が許へ立ち踰へ、一先づ姿を匿さんと、身繕して急ぎける、かくて軍士は仙多良國の、篠光太子が許へ立踰へ、此の國に僅なる、棲家を求め住いけるが、元より生計は靴士成れば、鐵砲を肩げ歩るき、野山を廻りて獸を獵り取り、此の皮を剝ぎ靴を作り、猶是を業とすれど、捗々しき得物も無くて、貧しき中に痛わしきは、同伴れたる腰元なり、破利舍那殿へ

今日返す、明日返すと欺し賺しつゝ、止め置きて靡かせんとすれど、更に軍士が心に從はず、軍士も殆んど持て餘したれど、こは全く年若の、恥しき故なるべし、何れか手に入れでやと、思へば左のみ逆らわず、籠の鳥として養ひ置きぬ、斯て軍士は又或る時、山へ獵に出でけるにとある深き谷底に、其たけ三尺計りの牝熊、水を呑て居たりしを、軍士は見るより早業に、二ッ王を込め筒先を、彼の牝熊の方へ押し向け、狙ひを定めて火蓋を切り、引鐵曳かんと爲る程に、其の牝熊己れが腹へ、指を指しつゝ、兩手を合せ、軍士を見上げて拜む有樣、こは子を孕みたる熊なりと、軍士は彌々嬉びて、彼奴討取らば皮に痕つき、且つ腹籠の子を殺しては詮なし手取りにせばやと思ひしかば、鐵砲の火蓋を元の如く爲し、肩げて岩根を踏み越へつゝ、谷底差して下れども、件んの熊は逃げもやらず、居縮まり居ける故、軍士は優しく聲を掛け、傍へ寄りつゝ、筒切の、握り飯を取り出し與へけるに、畜生ながらも事を辨まへ、拜みて禮を成す有樣、いと不便成る物成れども、軍士は元より大惡無道の、武士の成の果てにて、物の哀れを露知らねば、熊の嬉び握り飯を、食ふ暇を窺いて、用意の腰繩手繰つゝ、不意に投げ掛け手早くも、熊の四足を絏しめければ、熊は驚き悶けども、早や絏められて動き得ず、いと憐れなる聲音して、泣き叫びつゝ軍士の顏を、眺めて涙を落し詫る有樣、不便なれども如何な聞き入れず軍士は頓て鐵砲を、四足の間へ差し通し、心猛くも引肩げ、我家を差して立ち歸り、箱を閉せ

て是に入れ置き、食物とても碌々に、與へざれば日に增して、熊は瘦衰へけれども、軍士は更に心も着ず、或る日又能き得物をせんと、鐵砲を負げ路を差して、出んと爲ける門口へ、一人の武士入り來り、「靭作の軍士と云ふは、此方なるやと尋ねられ、軍士は腰を折り屈め、「さん候靭作りの、軍士は則ち某なり、御用の筋は如何にやと、尋ね返せば彼の武士、供人に荷がせし靭を是へ差出し、「扨て此の靭の如く成るを、此度新たに拵へたく、所々方々へ尋ねしかど、是ぞと思ふ能き皮なし、若し爰許へ來りなば、有もやせんと言ふもの有れば、遠路を尋ね來りたり、何と此の靭の如き、能き皮有るやと尋ねられ、軍士は其の靭を手に取り、此所彼所を改め見しに、世にも稀成る大猿の、一枚皮にて包みたる、靭成れば軍士は感じ、彼の武士に打向ひ「某し此迄年久しく、靭作りを業と致せど、未だ此の靭程の、珍らしき皮を見ず、假令如何程大切なる品なりとも、大きなるは皆寄皮にて、目立ぬやうに掛け縫致し、作りたる物成れど、此の猿の皮は、正眞の一枚皮にて、中々に某し方に、仕込みし猿に、此に及ぶべき皮とては、絶て是れ無く候へば、是は余人に仰せ付けられ、下されよと辭退をすれば、武士再び尋ぬるやう、「然らば又何なりとも、此の靭に張付く可き、能き皮は無きやと聞きて、「さん候靭に張るべき獸の皮は、大抵定り有る物にて、正かに牛馬の皮を持て、作る事も成り難く、猿か熊かの皮を以て、上品と致せども、生憎に能き熊の皮さへ、手許に切し候へば、急の御間に合ひ申さず

此の御靫に張るべき熊は、是れ是を御覽せよ、小さくとも是程の、熊に有らざれば御用に立たず、と、箱の内なる熊を見すれば、武士熟々打ち眺め、「何と此の熊の皮を持つて、作り呉れまじきやと裏問へば、「如何にも是に候へば、御用には相立てども、此の熊には孕のあり、頓て生み落す時を待ち、孕の皮を持つて、作れば大に益有る品あり、夫故にこそ此の如く、餌を與へて飼ひ置き候、頓て生落せし後は、何れとも仕るべくと、言へば件の武士は、「あゝいや〳〵暇取つて能き筋ならば、如何にして態々來りはせず、左らば孕の、皮の代まで與へなば、急に作らんや、抑も我を誰とか思ふ、陀著耶尼國の賢立太子なるぞと、聞いて軍士は打驚き、「扨ては大國の太子とも、知らぬ事とは申ながら、無禮の段は免させ給へと、遙かに下りて跪き、平伏して又言ふやう、「こは勿体なや忝なや、此破家へ太子の來臨、身の譽れ此の上なし、仰の如く孕の、皮の代迄給わりなば、何で否み申べき、急ぎて御用の御靫を、張り立て仕らんと、受合ひければ太子は悅び、「去らば早速に約を違へず、張り調へて遣すべし、尤も摩尼破利國の靜觀太子の所持の靫、見事に出て來し由、其の作り主は誰ぞと問ひしに、私良摩國の片邊に棲む、夜叉軍士と言ふ者成りと、聽くより直樣私良摩國に赴きて尋ねしに、此者行方無く成りしと有り、餘義なく彼所の靫師へ、誂へんと爲てけれども、是に張るべき宜敷皮の、無ければ倦みて有りけるに、家來の物が此國に、軍士と云ふ物來りて、靫作りを業と爲る由、聞き出して

告げしかば、取り敢ず尋ね來て、對面して珍重々々、扨て靫の恰好は、靜觀太子の持ち給ふ、品を手本に賴むなりと、言ひつゝ、頓て懷中より、金の小包取り出し、「少々ながら先づ是れを、識しの爲に渡し置く、殘りの代は國元にて、靫と引替に渡すべしと、約を固めて賢立太子は、別れて阿著耶尼國に歸らせらる、扨て軍士は思ひ寄らざる、儲け口の出で來しも、此の熊を生捕りし故、左すれば今一度彼の谷へ行き、此の熊の牡熊を討取り、彼の皮にて此の靫を張り、是れなる牝熊の孕は、扶け置きて又も能き、靫を張りて儲けんと、慾に迷ひし胸巧み、身支度して彼の谷へと、鐵砲肩げて出でながら、婢に向ひて言ふやう、「是れ〳〵其方今日も又、能く留守しながら此の熊めに、油斷なく心を着けよ、最早打殺すに近ければ、食物を與へずに置きて、隨分段ないぞと、言ひ捨て出で行く跡を見返り、腰元は熊の傍へ寄り、「のふ今のあの言葉、畜生ながら聞いてゝあろ、嘸ぞ悲しかろが妾とても、矢張り其方と同じ事で、疾から此の家に捕はれて、逃る道さへ辨ねば、日に〳〵泣いて暮すのみ、其方にも昨日今日迄は、妾密に喰物を、隱し置きて與へしが、明日はどをやら命を失ひ、靫に張らるゝやうな樣子、嘸ぞ悲しかろと食べ差しの、飯を少々持ち出でゝ、「なんぼ明日限りじやとて、食物與へずに置かりやうか、傳へ聞くに主親を、殺せし程の罪人でも、刑罰に行ふ迄は、三度の飯は與ふる由、餘りと言へば主人の非道、妾も頓て殺さりやう、是れは些細な殘りの飯、腹持ちも有るまじきが、

志じや受けて給もと、箱の格子の間いより、落しやれば件の熊、兩手を合せて伏し拜み、腰元の顏つく〴〵と、眺めて涙はら〳〵と、滴して己れが腹へ指差し、伏し轉びつゝ泣き悲しむ、心は夫と問わねども、我が腹に子の無き成らば、此身は死ぬるとも厭わねど、其の素振物言ふよりも、能く分りて乙女は堪へ兼ね、持ちたる小皿を投げ捨てゝ、わつとばかりに貰らひ泣き前後を忘れ伏沈みて居たりしが、心を察して餘りの不便さ、よしさらば此熊を扶けて、寧そ逃しやらん、妾とてもいつ都へ歸られべきとも思はれず、とても果つべき分ならば、攻めて物の役に立てん、さうじや〴〵と覺悟を極め、箱の鍵を尋ね出し、錠捻開けて蓋を退くるに、熊は悅び速かに、逃げ去るかと思ひの外、箱より出でゝ乙女の傍へ、寄りつゝ其の袖を啣へ、地に平れ伏して辭義を成し、少しも動く景色無ければ、早や逃げ行けと物も叩き、音に脅せど如何なゝ、立ち去る樣子見へざれば、乙女はほと〳〵持て餘して、「扨ては久敷箱に入れられ、腰立たぬのか不便やのふ、斯く成る上は是非もなや。殺さるゝより外無しと、最ど悲む折柄に、熊は異論なく腰も立ち、門口差して走り出れば、こは逃げ行くか嬉しやと、思ふ程なく熊は又雀躍して門口より、走せ歸りつゝ何如に爲けん、椽の下へぞ逃げ入りける、折柄戻る夜叉軍士今日の得物は案に相違し、兎一疋討ち取らず、剩さへ岩根にて、足に傷して氣色惡るく、呟きゝ入り來りしが、熊の箱は口開け、中は空にて何にも居ず、打ち驚きつゝ內へ入り、彼の腰

元に樣子を問へば、少しも憶する氣色なく、「さあ其の熊を逃がせしものは、餘人ではなく妾なり、抑も畜生とて子を思ひ、親を慕ふ心根は、やわか人間とて違はんや、況しても獸の內にても、猪狼と事替り、熊は能く人語を聞き別け、理非を辨まへ禮をも知り、人間に近き物からに、腹に子の有るを厭いて、最前妾に打向ひ、若し明日にも殺されなば、腹の此の子を何如にせんと、公然に物は言はねども、心は夫と知らるゝまで、泣き悲むが愛らしさ、餘りに見るに堪へ兼て、只今逃しやりたれば、熊の替りに妾をば、命取つて堪忍してと、進み寄られて軍士は呆れ、「いや早や不埒千萬なる、女郎めが愚痴三昧、是迄養いし大恩を、仇で報ずる曲者が、口賢こひ仁義立ては、此の天笠に嘆かわし、此は定めて迦毘羅城の、悉達太子の邊に居る故、聞き囓りたる似而非廣言、あの悉達のみ生れ損ねて、前代未聞の臆病者、天竺の國風に違ひ、物の報ひの因緣のと、ものゝ憐を言ふに感染れて、取得も無き畜生を厭ひ、子が愛らしいの不便のと、恐れ慄く心柄、大國成る阿耆耶尼國の、賢立太子の御靭に、作るべき大切の熊を、放ちやりたる阿房物、獸を殺すは我が世渡り、其の家業を妨ぐる奴、假令神にゝ佛にもせよ、助けべき所以なしと、口惜しさの一圖の面色、目に血走りて齒囓を成し、「己れを殺して太子へ言分け、觀念せよと腰刀を、拔き翳しつゝ、掣斬りに切り呵責まんと立ち掛る、折もこそ有れ立て切りたる、椽側の障子瓦破々々と、外れ倒るゝ其の物音、さながら雷鳴震動の如く、囂しく鳴渡

れば、軍士はあなやと見返る後の、倒れし障子をみり〳〵と、粉末塵に踏み碎き、以前の牝熊大口あき、毛を逆立てゝ馳け來るに、是はと驚き逃げんと爲たる後より早や飛び着きつゝ、襟髮かばと引咥へ、二振り三振り振りしかば、さしもの軍士も七轉八轉、右手に及を持ちながら働きも得ず悶き苦しみ、遂に首筋を食ひ切られ、敢なく死せし非道の報、心地能くこそ見へにけり、熊は軍士が首を咥へ、さも嬉しげに哮ゆる聲、仇を殺して悅ぶとは、思ひながらも乙女の心、身の毛も彌立ち慄へつゝ、逃げ出さんとしてけるを、熊は手招で心を知らせ、先に立ちて出でける故、扨ては最前箱よりいだせし、其の恩を報せん爲め、妾が危ふきを救ひしならんさすれば付添ひ行くとても、そも何事の有るべきやと、しぞけ風裝其の儘に、熊に從ひ行く程に、熊は小道の草を分け、行き〳〵て高き低き、山を三つ四つ踰けるに、頓てぞ廣き往還へ出ぬ、こわ見覺へ有る道と思ひつゝ、猶行くまゝにいつしかに、早や迦毘羅城なる、御門前に來にければ、御門の番卒驚きて、こは恐ろしき熊來たれりとて、棒持ち出して追はんと爲るを、那方此方へ吠へ退けて、已に二の御門迄馳け入れば、乙女も供に馳せ入りたり、早くも此事宮中へ聞こへ、右梵士太郎は取り敢ず、素破とばかり走り出で、と見れば一つの荒熊が、首を咥へて有りしかば、是は如何にと躊躇ひしに、跡に着きたる乙女有り、こは又誰ぞと見咎むれば豫て見覺へ有る、行衛知れざる腰元なれば、益々驚き呼び近づけて、是に樣子を尋ねるに、乙

女は遠路の勞れを忍びて、有し事ども然々と、詳らかに告げしかば、右梵士は聞き敢ず、扨ても不思議の事ども哉、畜類といへども恩を知り、是迄送り來るのみ成らず、手を別け搜す軍士が首を、咥へて宮中へ來たりしは、帝の御威盛獸まで、靡き從がふ勇ましさ、疾く此の由を奏聞して、熊にも褒美を取らせんづと、有合ふ士卒に守らせ置き、乙女を從がへ奥へ入る、其の暇に彼の熊は、軍士が首を玄關の、敷臺へそと置きて、支ゆる士卒を馳け散らし、跡をも見ずして走り去りぬ、良有つて右梵士は、再び玄關へ立ち出しに、彼の士卒等は恐る〳〵、熊の逃げたる次第を告ぐるに、然らんには是非無しとて、右梵士軍士が首を取り上げ、優陀夷の前へ持ち出し、「只今申し上し如く、提婆に等しき軍士が首、迦毘羅城の巷に迯げ、世の惡人の戒に、曝し置かん何如にやと、言葉雄々敷述べけるを、聞きて優陀夷は打ち案じ、稍有つて右梵士に打向ひ、「何如にも貴殿の言はるゝ所、一理無きに有らねども、提婆達太と事替り、件んの軍士は惡巧を、企だてながらも一つとして、其の謀成就せず、帝へ對し奉り、さして是ぞと言ひ立つる、妨も無きに此の首を、巷に掛けて梟すも何如と、言ふ言葉未だ終らず、右梵士は猶膝を進め、「こは優陀夷殿の仰とも覺へず、假令妨げこれ無とも、已に腹中に惡事を企だて、帝を害せんが爲めなればこそ、難陀太子の御祝を見込み、毒菓子を獻上して、太子迄害ふ巧み、是等の惡事輕からず、斯かる物を罪せずば、國の掟立ち難からんと、口賢敷も述るを聞き、優

陀夷も道理と思へども、巷に掛けて梟す程の、罪は無き故何如せんと、光明太臣を招ぎつゝ、是等の事を談合爲るに、元より優陀夷の下につく、光明成れば兎角を言はず、何如にも宜敷ように、計らはれよとのみ答へて、此方へ泥む事なれば、よし此上は是非も成し、帝へ奏し奉り叡慮に任せ申さんと、右梵士を政所へ待せ置き、優陀夷は光明と共侶に、帝の御前へ進み出て

「今日計らずも一疋の大熊、夜及軍士の首を咥へ、先き達て行衛知れず成りたる、破利舍那殿の腰元を、送り來り候により、彼の腰元に仔細を問いしに、然々に候とて、軍士が有樣始めより、終り迄洩す事なく、逐一に奏問しければ、帝聞こし召して宣やう、「扨ても稀代の事なりき併しながら彼の軍士は、好容夫人の兄にして、並人とは違ふにより、重き罪を押し宥めて、免せと申す譯けならねど、彼が爲す事は一つとして、是ぞと取るべき妨げ無く、只心憎きは先つ頃ろ、好容の兄なりとて、何事の巧か有けん、毒菓子を持參せし罪なり、去れども其の時女房の、吉祥が忠臣に依つて、夫の罪を白狀し、己れと彼の菓子を食らひ、死して詮義を立てたれば、よしや軍士は憎むとも、女房の志、又好容夫人の嘆きと言ひ、彼是れもつて此度の罪は、死罪に及ぶ迄には有らじ、若し存命らへて有るならば、猶此上の妨げも、計り難れば召し捕りて、長く獄家へ入れ置くべしと、豫て光明へも言ひつけ置く、然る所天命は遁れず、軍士計らず畜類の爲に、一命を落せしは、鷹が僥倖とも言ふべし、若し死せずして此上にも、何如な

る事をか企だて、惡事を成して召捕るとも、彼は難陀太子の伯父に當れば、現在首を打つ仕置に、行ふ事も爲し難く、去りとて忽かせにもなし難く、實に難義の筋成るに、今他國にて死したるは、此の上も無き國の吉事、掛かる上は彼の首級は、是早一世の別れなれば、好容にも一目見せ、古郷へ送り遣し、親どもへ葬むらせよ、元より顯はにせざる事故、左のみに國の民共が、政事の善惡を、論ずる事も有るまじきぞ、此義を何と存ずるやと、叡慮も安く宣へば、優陀夷明光猶平伏し、「寛仁大度の御計らひ、何如にも術能く候はん、いでや仰せに從いて、法の如くに仕らんと、二人共に御前を退き、政所へ赴むきて、件の由を右梵士に、然々と示せしかば、右梵士始め其の餘の諸官も、再び軍士が事につき、兎角の沙汰も爲ざりける、去れば帝の仰に任かせ、軍士が首を好容夫人に、見せ申されんにも汚し物を、宮中の奥へ入るべきならねば、優陀夷は右梵士に持たせ遣し、好容夫人を、破利舍那殿の御口へ、呼び出し云々の由を、述べて、軍士の首を見せ參らすれば、夫人は豫てかく有らんと、思ひながらも、しかすがに、現在の兄が首、殊に果敢なき最後を聞き、涙と供に絶り付き、泣き悲しみて果てし無ければ、右梵士太郎言葉を正し、「何如に夫人聞し召せ、其の御歎きはさる事ながら、心能からぬ御兄上何如成る罪にも合はるべきを、今日の最後を遂げられしに、計らざりける身の幸、殊に帝の思召にて、御身の爲に此の首を、親御の許へ遣して、葬むらせよと有難き仰せ、歎きを止めて悅

ばれよと、早や時移りしいささらばと、首桶携さへ立たんと爲るを、其の手に縋り好容夫人、「いや何と有る此の首級を、古郷の親へ遣さるゝとや、こは御情け有る事ながら、年寄りたる母人の、此の首を一目見る成らば、假令へ能からぬ兄なりとも、子に迷ふは親の習ひ、若しも歎げき悲しみて、泣き死にせんも計られず、何卒是れは私くしへ、御任かせ下されかし、親共へは此方より、能き樣に申し遣し、帝の御仁惠を告げべき故、此の事一重に頼み入る、帝の御前は、優陀夷殿を、頼み願い申せば、御使いの落ち度にも成り侍らじと、親の心を思ひやり、只管右梵士に頼みければ、右梵士も其の心を感じ、去る事も又有るべし、心得候とて立ち歸り、優陀夷へ其の由申しければ、優陀夷も又是れを感じ、則ち帝へ奏問せしに、然らば夫人の心に任かせ、如何とも計らふべしとの、仰せに寄りて再たび、又願の如く勝手たるべしと、夫人の許へ遣しければ、好容の嬉び限りなく、速やかに其の首を、鬱頭覽弗の院へ送り、慇懃に葬らせ、忌日〳〵のとひ吊らひ、怠たりなく勤め物爲て、回向細やか成りけるは、如何にも殊勝に思はれて、いと悼わしき有樣なり、斯くて又好容夫人は、古郷なる母の許へ、兄の事細々と、文に認ため遣すに、夜叉軍士がそかはか無き、惡心既に増長して、天命遂いに遁れ難く因果覿面の報いにや、畜類に身を食ひ裂かれ、果敢なき最期を遂げられし故、其の首級を妾は請ひ受け、鬱頭覽の院へ送りて、慇懃に吊らい侍り、是れはそも定まりたる、事と諦らめ給ひ

て、御歎き必ず〳〵御無用成り、御勘當までばせし兄上なれど、妾始め血を分けし、物に侍れば何如ばかり悼はしく、袖の時雨の晴れ間無きに、況して親子にましませば、能きも惡しきも我子には、隔て無き物にし有れば、極めて御歎き強からんと、其の御首級さへ送り申さず、幾重にも〳〵、御悲しみの程諦らめ給ひて、御煩らひこれなきやう、御身を大事に遊ばされ、御回向の程只管に、願ひ上げ參らせ候なぞ、細々書き認ため、意見を加へて親の歎きを、甚くも止め遣しぬる、志の程こそしはらしけれ